宮城県文化財調査報告書第154集

下草古城跡ほか

平成5年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな義務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々とって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものでもおります。

しかし、埋蔵文化財は土地と深く結び付いてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成4年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。

最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成5年3月

宮城県教育委員会教育長　　大立目　謙 直

目　　次

平成４年度発掘調査の概要 1
下草古城跡 5
大泉遺跡 69
新谷地遺跡 91
宮沢要害跡 105
山の神古墳 123
尾田峰貝塚 135

例　　言

1. 本書は、宮城県が平成４年度に埋蔵文化財緊急調査費の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当して実施した発掘調査の調査報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書作成にいたる一連の作業は、調査の原因となった開発行為に関わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査にあたっては、各開発担当部局や地元教育委員会当から多大な協力をいただいた。
4. 本書に使用した土色については、「新版標準土色帖」を参照した。
5. 本書に各遺跡の位置図として掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の 1/25,000 もしくは 1/50,000 の地図を複製して使用した。
6. 本書は調査員全員の協議を経て下記の者が執筆・編集した。

    発掘調査の概要－加藤道男
    下草古城跡　　－須田良平
    大泉遺跡　　－三好秀樹
    新谷地遺跡　　－三好秀樹
    古川要害跡　　－三好秀樹
    山の神古墳　　－古川一明
    尾田峰貝塚　　－阿部　恵

7. 発掘調査で出土した遺物および調査記録類などは、宮城県ないし地元市町村教育委員会で保管している。

平成4年度発掘調査の概要

〔下草古城跡〕

大和町南部、吉田川の支流竹林川流域の沖積地上に立地する城跡で、伊達政宗の 3 男宗清が慶長 16(1613)年に入府し、元和 2(1616)年に吉岡に移るまでの居城とされる。現状でも、本丸・二ノ丸と伝えられる中枢部は周囲より一段高い部分として残り、またそれらを区画する堀跡も明瞭に確認できるなど、平城としては県内でも保存状況の良い城跡の一つといえる。さらに明治期の地籍図では城跡の東・南部の平地にも縦横に堀状に水路が配されていたことが窺われ、城下町が存在していたことも想定できる。

昭和 63 年にこの一帯が県営ほ場整備事業計画地内に含まれたが、以来城跡の取扱いについて協議を重ね、地形的な高まりとして認識される城跡部分は付属する堀跡も含めて事業計画から除外されることとなった。今年の調査は昨年に引続き周囲に展開する平地部分を対象とした、ほ場整備の道路・水路敷に関わる遺構確認調査である。

〔大泉遺跡〕

中田町北部の自然堤防上に立地する遺跡であり、その東側を北上川が流れている。昭和 22 年のキャサリン台風の際に北上川の堤防が決壊し、遺跡の一部が削られて建物の柱が立ったまま出現するとともに須恵器の大甕が十数個出土したこと、また学術的発掘調査で弥生時代の遺物が発見されて大泉式土器の標識遺跡となっていることなど、学史的にも著名な遺跡である。

今回は遺跡に隣接する湿地を中心に展開する水田の県営は場整備に伴って遺構確認調査を実施した。その結果、一部に古墳時代の遺構・遺物が発見されたが、この部分については畑地として造成範囲から除外し保存が図られることとなった。

〔新谷地遺跡〕

古川市西部の丘陵上に立地する遺跡で、県営は場整備事業に伴って調査したものである。この遺跡は当初は周知されていなかったが、古墳時代後期の日光山古墳群に隣接することから、昨年に遺構確認調査・事前調査を実施した。その結果、丘陵斜面から数軒の平安時代の竪穴住居跡が、丘陵頂部から多数の奈良時代の土壙墓が検出された。

今回は沢状地形を挟んで昨年の南側を対象区域として遺構確認調査を実施したところ、土壙墓群の広がりが及んでいることが確認され、掘立柱建物跡なども発見された。

〔宮沢要害跡（古川城跡）〕

古川市北西部の丘陵上に立地する。縄文時代・弥生時代・古代の各時代が複合する西館遺跡として周知されていた。今回県営ほ場整備事業に伴う道路建設が遺跡の東南端部で施

工されることになり、事前調査を行ったところ多数の掘立柱建物跡・溝等と近世の陶磁器が発見された。一方、本遺跡の東側隣接地には近世仙台藩の「要害」である古川城跡が所在しており、要害の古絵図と地籍図等を比較したところ現在でも当時の地割が比較的良好に残存している。それによると、今回の調査箇所は古川要害の下中屋敷の南西端にあたることから、古川城跡を当該地まで拡大することとし、下中屋敷などを含めた「古川要害跡」と遺跡の名称を変更している。

〔山の神古墳〕

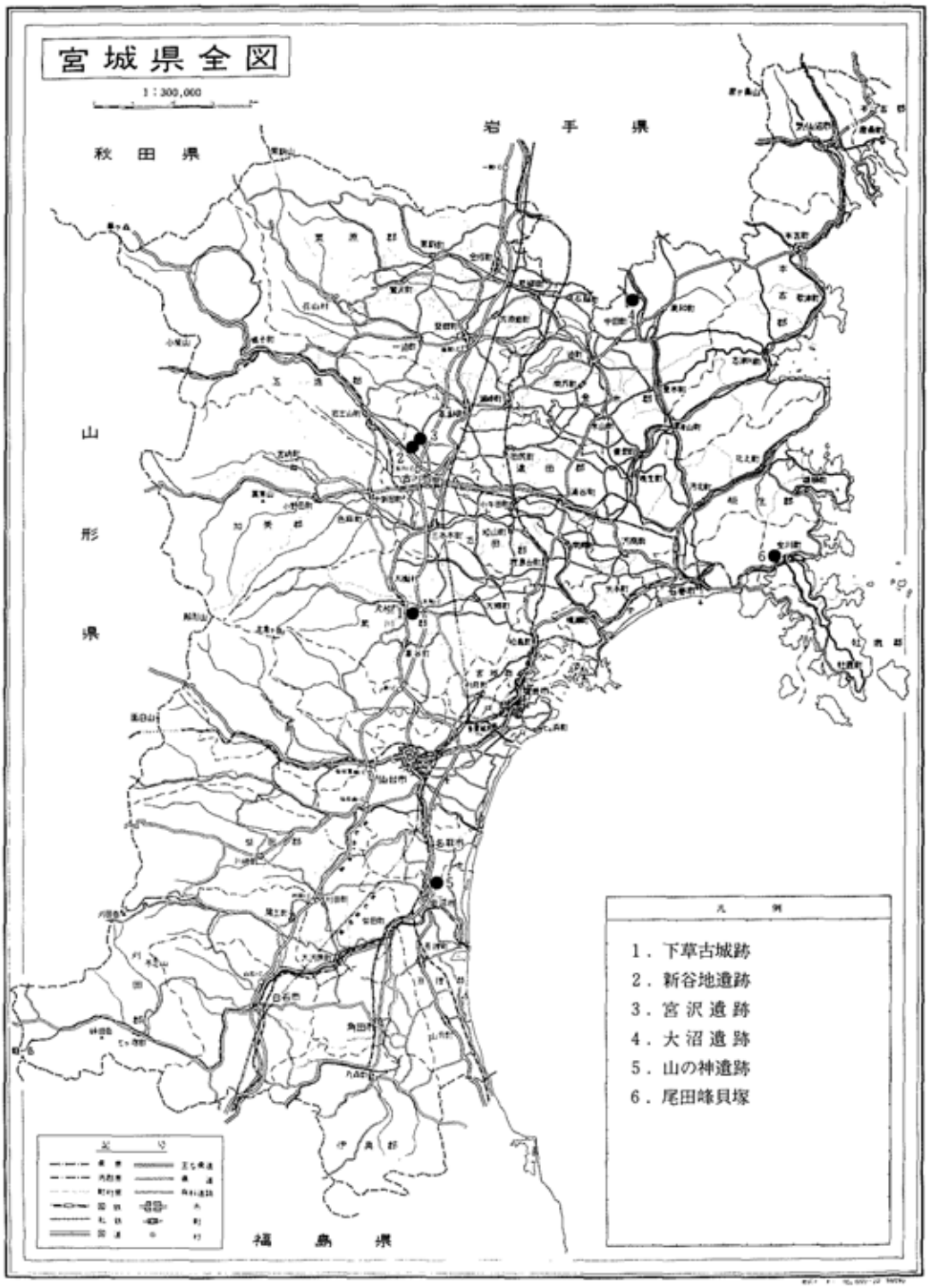
名取市東部の沖積地に立地する遺跡であり、以前から水田中に塚状の高まりがみられ古墳として周知されてきた。今回県営ほ場整備事業の実施にあたり、古墳の周囲について古墳の周溝確認を目的として確認調査を行ったところ、周溝はみられず古墳時代前半の竪穴住居跡が検出されたため、調査区を拡大して集落の範囲を確認した。その範囲については、削平等を受けることはなく、今後も水田下に保存される。なお、古墳とみられた高まりの部分は当初からほ場整備の区域から除外されている。

〔尾田峰貝塚〕

女川町西部の万石浦に注ぐ沢筋に形成された縄文時代後期～晩期の貝塚である。浦宿貝塚として古くから知られ、また度々調査が行われ、大形の遮光器土偶が出土したことで良く知られている。近年遺跡周辺に宅地化の波が及ぶようになったので、県・町教育委員会共同で確認調査を実施した。貝層は緩斜面下位に東西 30m×南北 60m以上の範囲に形成されており、さらにその外側にまで遺物包含層がみられた。今後、町教育委員会を中心に保存・活用の方法を検討していくことになっている。

平成 4 年度国庫補助事業一覧

No.	遺跡名	所在地	開発事業	事業者	備考
1	下草古城跡	大和町鶴巣下草	県営ほ場整備	仙台土地改良事務所	近世の掘立柱建物・井戸・堀・溝
2	鴻ノ鳥遺跡	大河原町小山田字鴻ノ鳥	個人住宅	個人	平安時代の土師器・須恵器が数点
3	上野遺跡	蔵王町円田字東山	個人住宅	個人	Tピット・遺物なし
4	山の神古墳	名取市本郷字矢口	県営ほ場整備	仙台土地改良事務所	古墳は不明　古墳時代前半の集落
5	前川本城跡	川崎町前川字本城	個人住宅	個人	遺構遺物なし
6	尾田峰貝塚	女川町浦宿字尾田峰	範囲確認	町・県共同調査	縄文後・晩期の貝塚
7	大泉遺跡	中田町上沼字本宮	県営ほ場整備	迫土地改良事務所	古墳前期の集落
8	新谷地遺跡	古川市小林字新谷地	県営ほ場整備	古川土地改良事務所	土壙墓多数
9	宮沢城跡	古川市宮沢	県営ほ場整備	古川土地改良事務所	近世の掘立柱建物・溝


宮城県全図
1：300,000
秋田県
岩手県
山形県
福島県
凡例
1．下草古城跡
2．新谷地遺跡
3．宮沢遺跡
4．大沼遺跡
5．山の神遺跡
6．尾田峰貝塚

下 草 古 城 跡

目　　次

第 1 章　遺跡の位置と環境 7
1. 遺跡の位置 7
2. 遺跡の現状と推定される城郭構造 7
3. 文献上の下草古城跡 9
第 2 章　調査の方法・経過 9
第 3 章　発見された遺構と遺物 15
1. 発見された遺構 15
2. 発見された遺物 42
第 4 章　考察 51
1. 遺構 51
2. 遺物 54
3. 推定される遺跡の構造と年代 55
第 5 章　まとめ 56
引用･参考文献 56

調 査 要 項

遺　跡　名：下草古城跡（しもくさこじょうあと）
宮城県遺跡地名表記載番号 23068
遺 跡 記 号：ＯＧ
遺跡所在地：宮城県黒川郡大和町鶴巣下草
調 査 原 因：県営圃場整備事業
発 掘 面 積：約 12300 ㎡
調 査 期 間：1992 年 4 月 13 日～12 月 17 日
調 査 主 体：宮城県教育委員会
調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課
調　査　員：須田良平、大和幸生、天野順陽（まさはる）、太田肇、早川英紀
調 査 協 力：大和町教育委員会・宮城県仙台市地改良事務所
大和東部土地改良区・宮城県農業公社
調査参加者：斎藤永記、斎藤徹子、斎藤柳子、佐藤邦子、佐藤裕子、菅原喜四郎、
鈴木訓男、高橋久兵衛、高橋惣市、高橋正俊、高橋良三、横田ひで子、
横田よし子、若生孝子

下草古城跡

第１章　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置（第１図）

下草古城跡は、黒川郡大和町鶴巣下草に所在する。大和町の中心部、吉岡から南東に 3ｋｍ程のところに位置する。

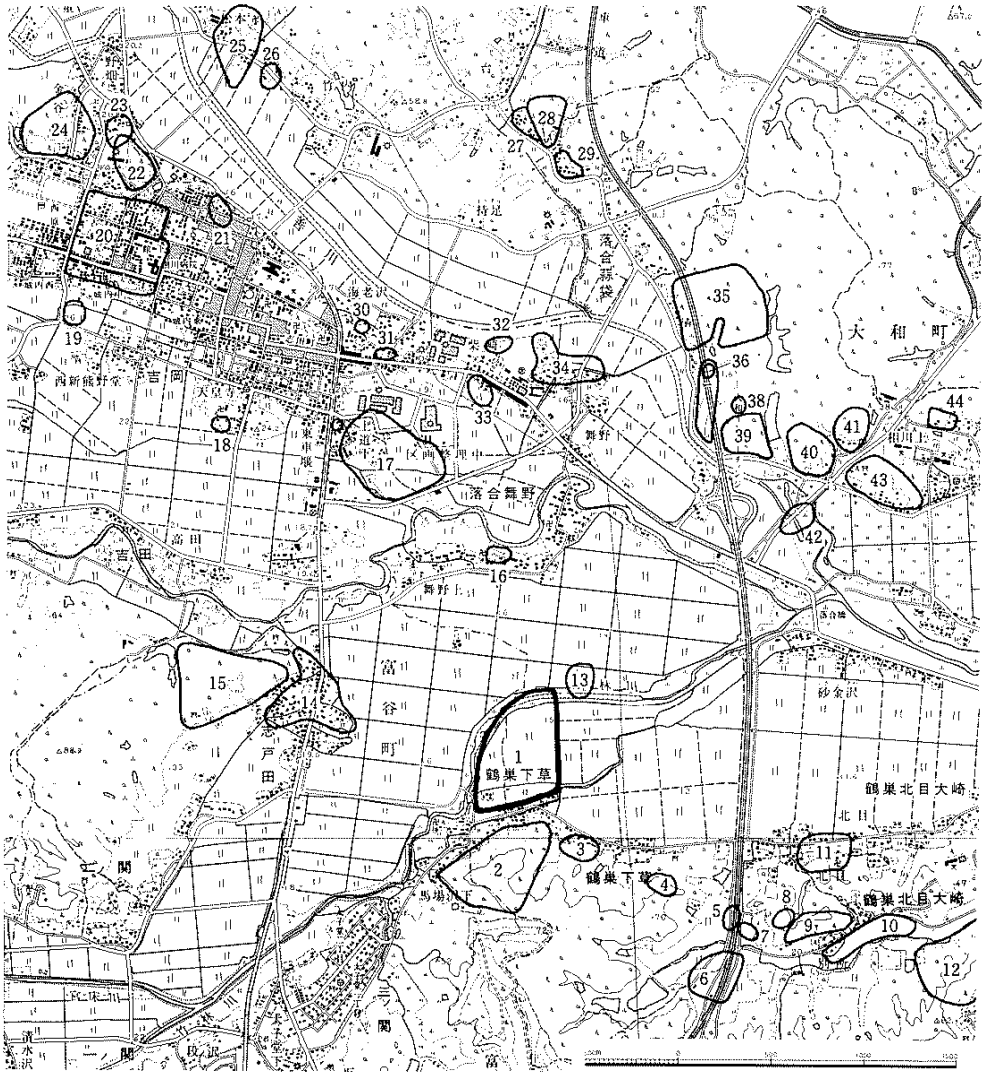
奥羽山脈・船形連峰に端を発した吉田川とその支流である善川、竹林川は、徐々に高度を下げ周辺を開析しながら東流する。大和町の中心部・吉岡から舞野、下草付近では、吉田川に北西から善川、南西から竹林川が合流しており、広く沖積平野が広がっている。遺跡は竹林川が合流する地点から 1.5ｋｍ程上流にあり、標高 13～15mの沖積地中の自然堤防とその周辺に立地する。

２．遺跡の現状と推定される城郭構造（第２図）

遺跡の範囲は東西 500m以上、南北約 600mで、北西隅の欠けた長方形を呈する。遺跡の北と西は竹林川に区画され、竹林川に沿った部分は河川改修によって原形を失っている。南は鶴巣館の立地する丘陵に接している。一方、東側は沖積地が広がり、圃場整備のため遺跡の範囲は明瞭ではないが、昨年度の確認調査により、従来遺跡の東端とされていた南北に走る農道よりも 50m東までは遺構が存在することが明らかとなった。遺跡の現状は水田や畑であり、標高の低い部分は水田、それよりも一段高い平坦な部分は畑として利用されている。

これらを詳細に見てみると、遺跡の南側は水田が広範囲に広がっているのに対して、北側は一段高い畑の部分が広がり、それらを二重に取り囲むように細長い水田部分が認められる(第 2 図)。これは城跡の地割を反映するものであり、高い部分は本丸や二の丸、低い部分は堀という、北端中央の畑部分を中心とした城郭配置の様子が明瞭に残存しているものと考えられ、昨年の確認調査によってその概要は明確になっている。

渡辺・大藤両氏が『大和町史』において明治 19 年の地籍図（以下地籍図と略記）をもとに推定復元した城の構造では、外側の堀と考えられる水田までが城の郭内であり、現状も当時とはほとんど変わっていない。郭外とされた東側、南側には、地籍図によると堀（水田）によって細かく区割りされた部分が広がり、侍屋敷跡と推定されている。しかし現状では高い部分は島状に散在するのみであり、後世削平されて水田として利用されている。この南側の水田範囲では、細長い水田の形から堀と推定可能なところもあるが、内側の堀ほど明確なものではない。



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	下草古城跡	集落跡・城跡	古代・中世	16	上舞野B遺跡	包含地	古代	31	糸繰遺跡	包含地	縄文・古代
2	鶴巣館跡	城跡	中世	17	一里塚遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	32	西浦田遺跡	包含地	平安
3	迫遺跡	包含地	古代	18	天皇寺遺跡	包含地	平安	33	柴崎遺跡	包含地	奈良
4	観音堂小塚群	小塚	中世・近世	19	車遺跡	包含地	古代	34	古川遺跡	包含地	古代
5	日光山遺跡	墓・祭祀遺跡	奈良・平安・中世・近世	20	吉岡城跡	城跡	江戸	35	御所館跡	城跡	中世
6	勝負沢遺跡	包含地	縄文中・平安	21	安楽院遺跡	包含地	縄文中・後	36	新田古墳 1・2号	古墳	古墳後
7	日光山西小塚	小塚		22	中興寺遺跡	包含地	縄文・晩	37	八谷館跡	城跡	中世
8	日光山小塚群	小塚	中世	23	石神沢遺跡	包含地	旧石器・縄文晩・平安	38	新田古墳 3号	古墳	古墳後
9	別所横穴古墳群	古墳	古墳	24	金谷遺跡	包含地	旧石器・縄文中～晩	39	八谷古城跡	城跡	中世
10	別所遺跡	包含地	古代	25	松本遺跡	包含地	縄文・古代	40	大沢遺跡	包含地	古代
11	寺東遺跡	包含地	古代	26	要害遺跡	包含地	古代	41	上ノ山遺跡	包含地	平安
12	天神館跡	包含地・城跡	縄文・中世	27	下屋敷遺跡	包含地	古代	42	相川堤防遺跡	包含地	縄文・古代
13	上舞野A遺跡	包含地	縄文・古代	28	梶館跡	城跡	中世	43	熊野遺跡	包含地	古代
14	三ヶ森遺跡	包含地	奈良・平安	29	岩下遺跡	包含地	古代	44	塚越遺跡	包含地	古代
15	鮫取遺跡	城跡	中世	30	海老沢遺跡	包含地	縄文中				

第1図　遺跡の位置

以上のように当遺跡は、平野部に築かれた城としては現状からも当時の様子が推定できる、県内でも唯一といえる保存状態の良好な遺跡である。

3．文献上の下草古城跡

『仙台領古城書立之覚』には、

平　古城　東西四十六間、南北六十八間。但四方ニ土手形上口八間之堀アリ西北ハ川東南ハ幅四間長二百八十間ノ堀アリ

とある。この規模は現在の本丸とそれを囲む堀と推定される部分とほぼ一致する。

城主及び年代については『下草村風土記御用書出』には、

御城主伊達河内守宗清様慶長年中御取立八九年御居城被遊元和二年（1616 年）今村吉岡へ御取移被成置候事

とあり、伊達政宗の三男で、伊達家の重臣であった飯坂家の後を継いだ宗清が一時期居城したという。飯坂家の牌所で、現在吉岡にある天皇寺の『書上』によると、この寺は飯坂家に従って伊達郡飯坂村（福島県）から宮城郡松森村に移り、さらに宗清の移動にともない、慶長十六年（1611 年）に下草に移ったという。そして元和二年に吉岡に移ったとあり、下草古城跡の年代を裏付けている。

以上のように下草古城跡は、文献に記された城の規模とほぼ一致し、記録では 17 世紀初頭のほんの数年の間宗清が居城していたことが知られているだけである。

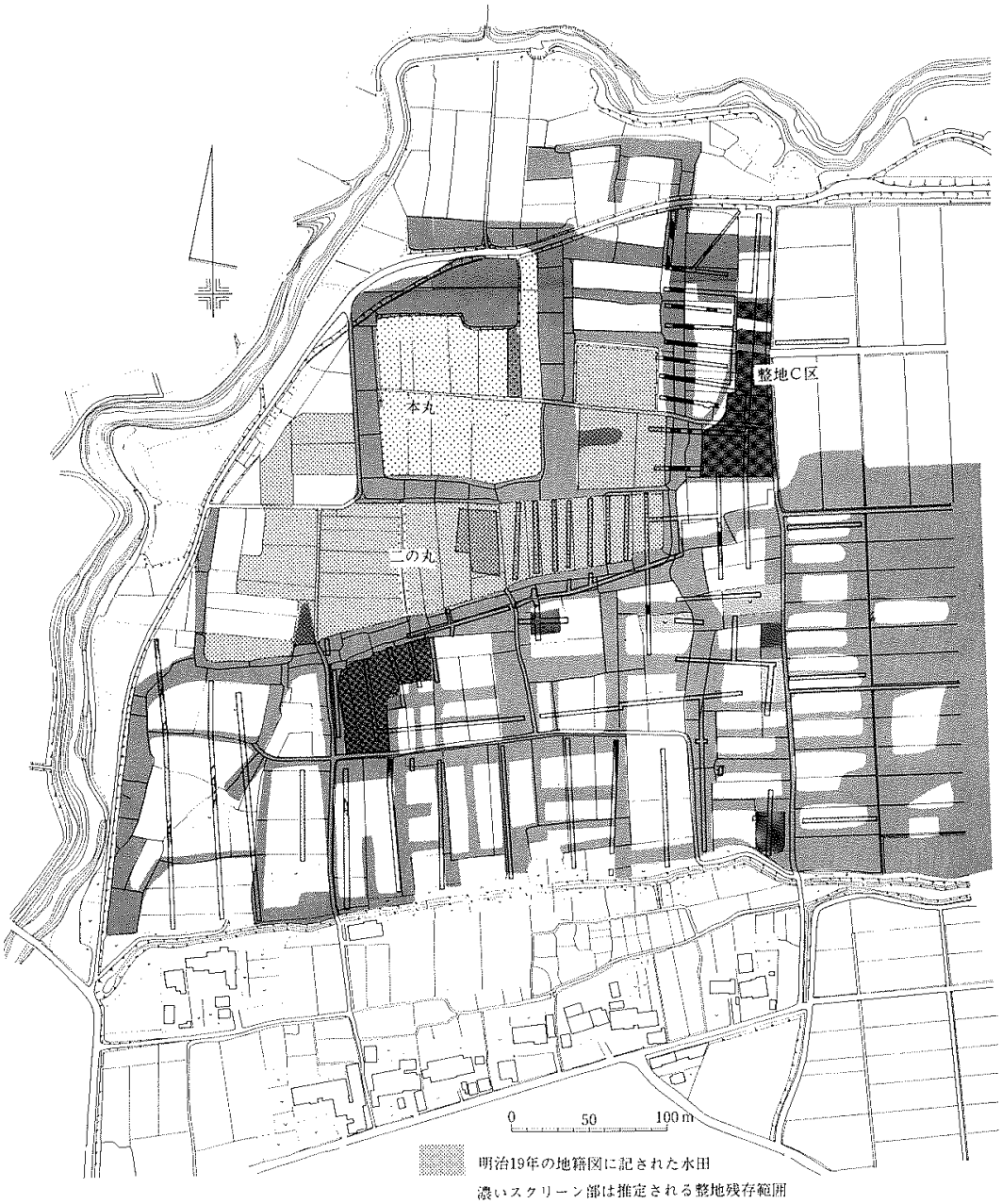
第 2 章　調査の方法・経過

1．調査の方法と経過（第 3 図）

今回の調査の対象地域は、先に二の丸と推定した地域よりも外側、遺跡範囲の東側と南側に当たる。この地域を圃場整備するにあたり、まず初年度事業として道水路部分が工事対象となったため、この部分を対象として発掘調査をおこなった。

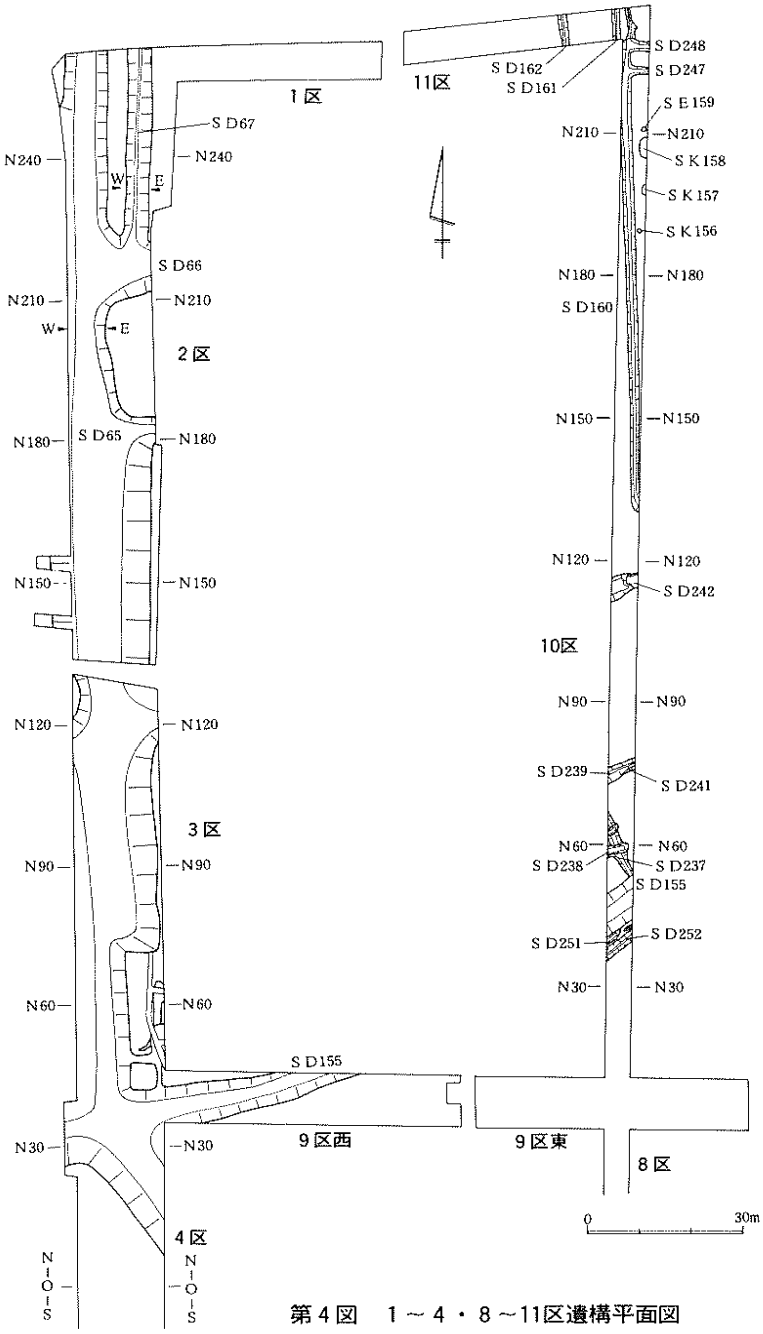
調査区は調査着手順に 1 区・2 区・3 区・・というように数字を付した。1 区は遺跡北東の東西道水路部分、2～5 区は遺跡東側を南北に貫く町道および水路部分で、2 区は東西農道まで、4 区は遺構の集中するところからである。6・7 区は遺跡西側の水路部分で、6 区は南北部分、7 区は東西部分である。8・10 区は遺跡東端の南北水路部分で、東西道水路部分である 9 区を境に、南が 8 区、北が 10 区である。11 区は 1 区の東延長部分、12 区は遺跡南西端の水路部分である。これらのうち、調査期間の都合上、5 区は東側の水路部分のみを調査し、7 区も遺構確認を行なったのみである。

調査は 4 月 13 日に開始し、11 月 14 日には一般の人々を対象とした現地説明会を開催し、12 月 17 日に調査を終了した。



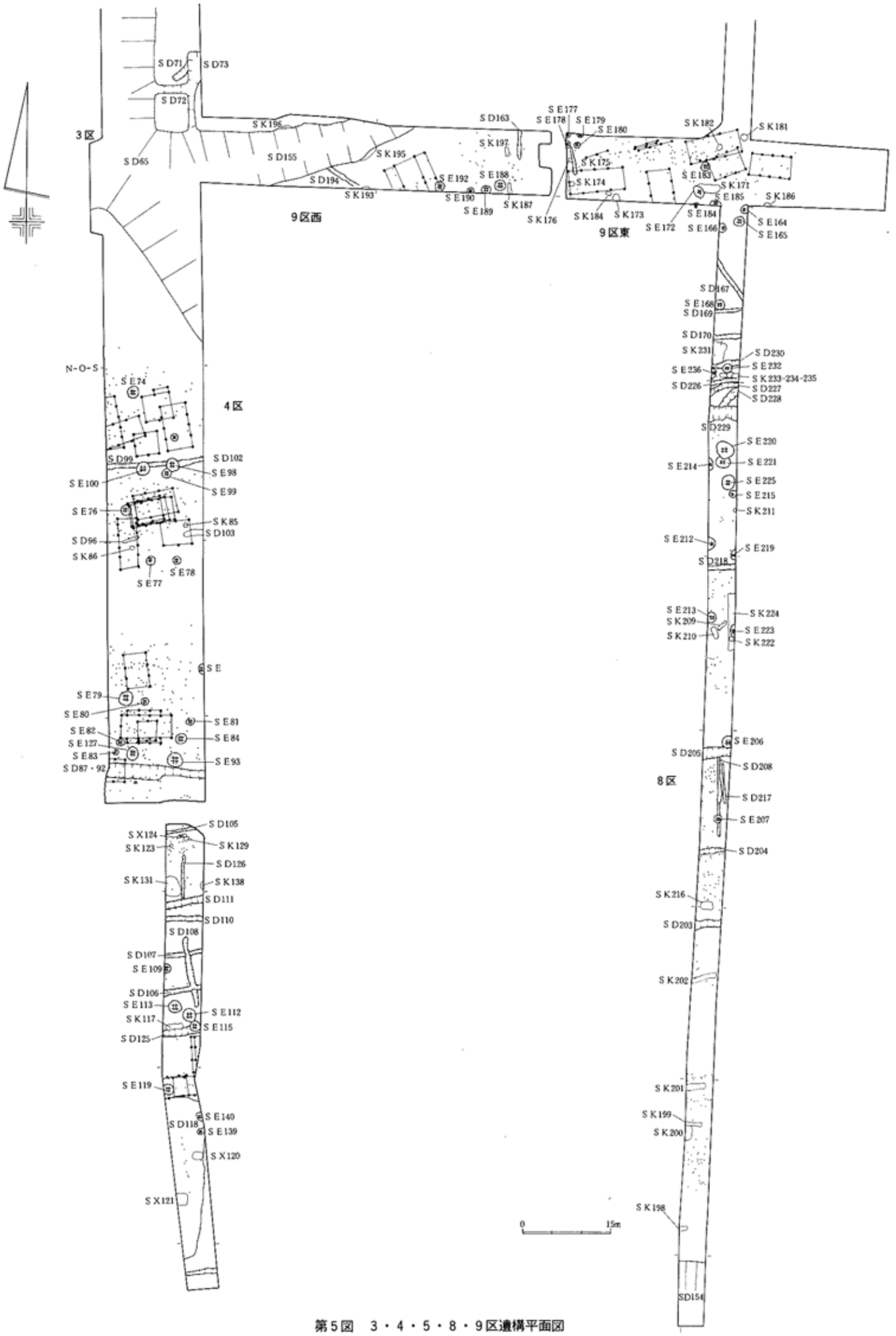
第２図　遺跡の全景と明治19年の地籍図に記された水田

第３図　今年度の調査区



第４図　１～４・８～11区遺構平面図

1～5 区・6 区・8 区～11 区については、それぞれほ場整備事業計画の基準点をもとに簡易遣り方・平板測量による平面図を作成し、精査した遺構については必要に応じて断面図を作成した。写真記録については 35㎜ 白黒写真、カラー・リバーサル写真によって行なった。



第5図　3・4・5・8・9区遺構平面図

第３章　発見された遺構と遺物

１．発見された遺構

今回の調査では、多数の掘立柱建物跡、井戸、溝、土壙、焼け面遺構、炭化物集中遺構、ピットなどが確認された。特に井戸は数多く見つかったが、すべて素掘りである。調査区は標高が低く、出水や堆積土の崩壊で井戸の底まで発掘することは不可能であった。堆積土も下部は水の影響でグライ化しており、堆積の状況は不明である。

また 12 区では遺構は認められなかった。

以下、区ごとに遺構の説明を行なうが、井戸、溝、土壙については一覧表（第１表～第３表）を作成したため、区ごとの特徴、特筆すべきことのみ記述するにとどめる。

Ａ．１区

掘立柱建物跡１棟、井戸３基、溝４条、土壙７基、ピットが地山上面で確認された。

１区は整地層も残存せず、遺跡の北東端にあたるためか遺構の分布は稀薄である。

掘立柱建物跡

｛ＳＢ61 建物跡｝桁行２間×梁行１間の東西棟である。ＳＥ59 井戸と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 3.4m、梁行が 2.9～3.1m、桁行の柱間はいずれも 1.7mである。柱穴は径 25～45ｃｍの円形もしくは一辺が 30ｃｍの隅丸長方形を呈し、深さは北東隅のピットで 17ｃｍ、柱痕跡は径 10～15ｃｍの円形である。

Ｂ．２区

南北に長く伸びる調査区に平行する大溝とそれから分流する大溝が地山上面で確認された。そのほかピットなどの遺構は確認されていない。

溝

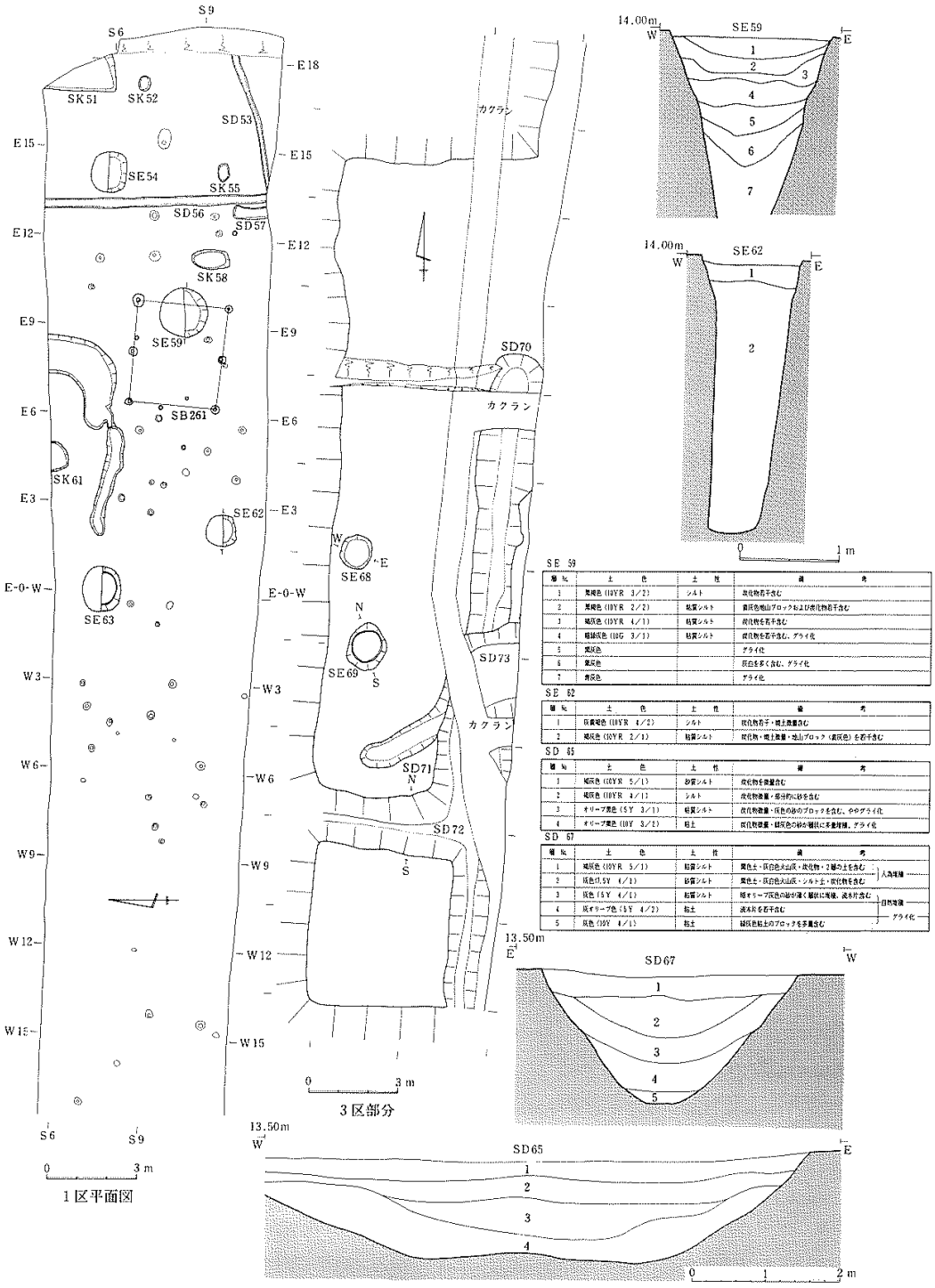
｛ＳＤ65 溝｝2 区と平行する大溝で、北端では幅 8mであるが、南は幅 19mに広がっている。調査区中央付近でＳＤ67 及び東に延びる２本の溝と合流する。深さは 1.6mで、下部は粘土と砂が互層になり水成堆積の状況を呈する。

｛ＳＤ67 溝｝ＳＤ65 の東を平行する大溝で、調査区中央付近でＳＤ65 及び東に延びる溝と合流する。幅は 4.5～5m、深さは 1.8mで、下部は粘土と砂が互層になる水成堆積、上部は人為堆積の状況を呈する。

ＳＤ65・ＳＤ67 と合流する東西溝は、調査区東端で幅 10mである。また、さらにその南のＳＤ65 と合流する東西溝は、調査区東端で幅 5.5mである。

Ｃ．３区

２区のＳＤ65（大溝）の南延長が確認された。ＳＤ65 は二の丸と推定される部分の東南端において西から延びてきた大溝（推定二の丸の南辺を画する堀）と合流し、さらに４区



SE 59

層 No.	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	炭化物若干含む
2	黒褐色 (10YR 2/2)	粘質シルト	黄灰色地山ブロックおよび炭化物若干含む
3	褐灰色 (10YR 4/1)	粘質シルト	炭化物を若干含む
4	暗緑灰色 (10G 3/1)	粘質シルト	炭化物を若干含む、グライ化
5	黒灰色		グライ化
6	黒灰色		灰白色を多く含む、グライ化
7	青灰色		グライ化

SE 62

層 No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	炭化物若干・焼土微量含む
2	褐灰色 (10YR 2/1)	粘質シルト	炭化物・焼土微量・地山ブロック（黄灰色）を若干含む

SD 65

層 No.	土色	土性	備考
1	褐灰色 (10YR 5/1)	砂質シルト	炭化物を微量含む
2	褐灰色 (10YR 4/1)	シルト	炭化物微量・部分的に砂を含む
3	オリーブ黒色 (5Y 3/1)	粘質シルト	炭化物微量・灰色の砂のブロックを含む、ややグライ化
4	オリーブ黒色 (10Y 3/1)	粘土	炭化物微量・緑灰色の砂が縞状に多数堆積、グライ化

SD 67

層 No.	土色	土性	備考	
1	褐灰色 (10YR 5/1)	粘質シルト	黒色土・灰白色火山灰・炭化物・2層の土を含む	人為堆積
2	灰色 (5Y 4/1)	砂質シルト	黒色土・灰白色火山灰・シルト土・炭化物を含む	人為堆積
3	灰色 (5Y 4/1)	粘質シルト	暗オリーブ灰色の砂が薄く層状に堆積、炭を所々含む	自然堆積
4	暗オリーブ色 (5Y 4/2)	粘土	炭を所々含む	グライ化
5	灰色 (10Y 4/1)	粘土	緑灰色粘土のブロックを多量含む	グライ化

第６図　１・３区遺構平面図・断面図

の遺構密集地域を避けるように南東方向に向きを変えて調査区外に伸びてゆく。ＳＤ65 は、昨年の確認調査の結果や、溝を反映した現状の水田形態の観察により、4 区のすぐ東側を南下するものと思われる。また調査区中央、ＳＤ65 の幅が狭くなる地点の張り出し部の地山上面において、井戸 2 基、溝 6 条が確認された。しかしここにおいてもピット類は確認されなかった。

Ｄ．4 区

掘立柱建物跡 13 棟、井戸 5 基、溝 7 条、土壙 4 基、焼土遺構 1 基、炭化物集中遺構 4 基、ピット多数が確認された。

調査区北端では、畑として利用されていた高まりの厚さ 70～80ｃｍの近代盛土の下位から厚さ 10ｃｍ前後の整地が部分的に確認された。しかしここで確認された遺構はいずれも整地下位の地山上面である。

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡を含むピット類は、Ｎ－0－Ｓ～Ｓ15、Ｓ18～Ｓ36、Ｓ45～Ｓ69 の 3 つのブロックに分けられる。北ブロックの北側は水田の耕作により攪乱を受けているが、3 区の、東に向きを変えたＳＤ65 までは遺構は延びていない。北ブロックと中央ブロックはＳＤ99・102 の東西溝が境界となっている。中央ブロックと南ブロックの間には水田による攪乱が認められるが、元来遺構分布密度の低いところであったと考えられる。南ブロックの南端はＳＤ87・92 の東西溝で区画されている。北ブロックにはＳＢ262～265、284 建物跡の 5 棟、中央ブロックにはＳＢ266～271 建物跡の 6 棟、南ブロックにはＳＢ272～274 建物跡の 3 棟が認められる。

｛ＳＢ262 建物跡｝桁行 4 間×梁行 1 間の南北棟である。ＳＢ263、ＳＢ75 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 7.7m、梁行が 4.3m、桁行の柱間は 1.8～2.0m である。柱穴は長軸径 0.5～1.0m、短軸 40～50ｃｍの楕円形を呈し、深さは北東隅のピットで 54ｃｍ、柱痕跡は径 14～18ｃｍの円形である。

｛ＳＢ263 建物跡｝北に張り出しを持つ桁行 2 間×梁行 1 間の東西棟である。ＳＢ262 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 4.7m、梁行が 4.4mである。身舎の桁行の柱間は 2.3～2.4m、張り出し部の柱間は北側で 2.5m、東側で 0.8mである。柱穴は長軸径 40～50ｃｍ、短軸 35～40ｃｍの楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 54ｃｍ、柱痕跡は径 12～18ｃｍの円形である。

｛ＳＢ264 建物跡｝桁行 2 間×梁行 1 間の東西棟である。建物総長は桁行が 4.0m、梁行が 3.7m、桁行の柱間は 1.8～2.2mである。柱穴は長軸径 40～70ｃｍ、短軸 35～40ｃｍの楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 55ｃｍ、柱痕跡は径 10～18ｃｍの円形である。

｛ＳＢ265 建物跡｝桁行５間×梁行２間以上の南北棟である。建物総長は桁行が 8.9m、桁行の柱間は 1.7～1.9m、梁行は 2.2mである。柱穴は長軸径 35～65ｃｍ、短軸 25～40ｃｍの楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 31ｃｍ、柱痕跡は径 12～15ｃｍの円形である。

｛ＳＢ266 建物跡｝桁行３間×梁行１間の東西棟である。ＳＢ267～ＳＢ270 と重複し、ＳＢ270 よりも新しいがその他の遺構との前後関係は不明である。建物総長は桁行が 7.0m、梁行が 4.0m、桁行の柱間は 2.0～2.7mである。柱穴は長軸径 40～80ｃｍ、短軸 30～45ｃｍの楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 30ｃｍ、柱痕跡は径 12～17ｃｍの円形である。

｛ＳＢ267 建物跡｝桁行３間×梁行１間の東西棟である。ＳＢ266、ＳＢ268～ＳＢ270、ＳＥ76 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 5.7m、梁行が 4.0m、桁行の柱間は 1.8～2.1mである。柱穴は長軸径 30～50ｃｍ、短軸 20～40ｃｍの楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 46ｃｍ、柱痕跡は径 8～14ｃｍの円形である。

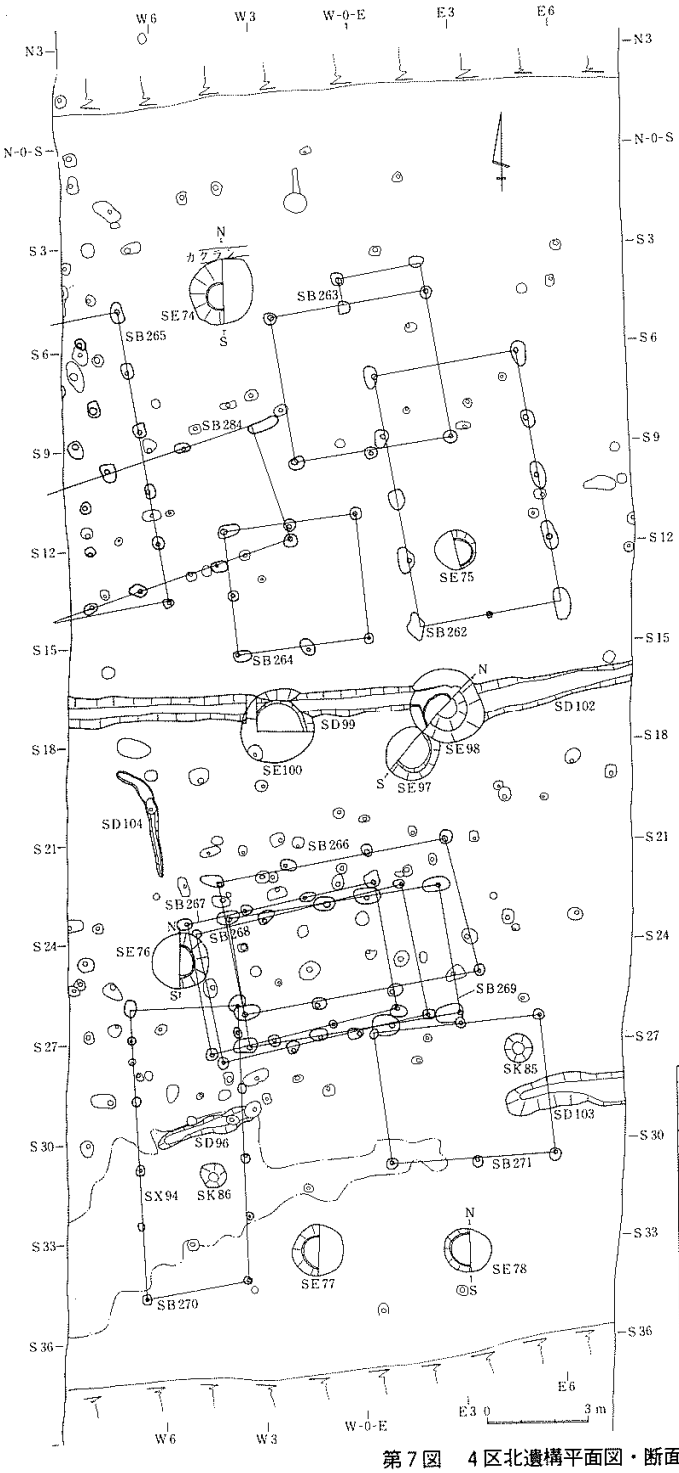
｛ＳＢ268 建物跡｝桁行３間×梁行１間の東西棟である。ＳＢ266、ＳＢ267、ＳＢ269、ＳＢ270、ＳＥ76 と重複し、ＳＥ76 よりも古いがその他の建物との前後関係は不明である。建物総長は桁行が 6.3m、梁行が 4.0m、桁行の柱間は 1.9～2.3mである。柱穴は長軸径 30～65ｃｍ、短軸 25～40ｃｍの楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 55ｃｍ、柱痕跡は径 10～18ｃｍの円形である。

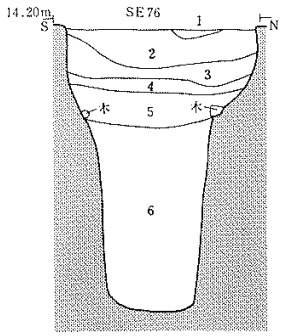
｛ＳＢ269 建物跡｝桁行３間×梁行１間の東西棟である。ＳＢ266～ＳＢ268、ＳＢ270、ＳＥ271 と重複し、ＳＢ271 よりも古いがその他の建物との前後関係は不明である。建物総長は桁行が 6.3m、梁行が 3.9m、桁行の柱間は 2.0～2.2mである。柱穴は長軸径 60～80ｃｍ、短軸 35～60ｃｍの楕円形を呈し、深さは北東隅のピットで 50ｃｍ、柱痕跡は径 12～16ｃｍの円形である。

｛ＳＢ270 建物跡｝桁行５間×梁行１間の南北棟である。ＳＢ266～ＳＢ269・ＳＤ96・ＳＸ94 と重複し、ＳＸ94 よりも新しくＳＢ266 よりも古いがその他の遺構との前後関係は不明である。建物総長は桁行が 8.3～8.7m、梁行が 3.2m、桁行の柱間は 1.7～2.2m、北端で 0.9mである。横穴は長軸径 25～50ｃｍ、短軸 20～40ｃｍの楕円形もしくは円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 30ｃｍ、柱痕跡は径 8～12ｃｍの円形である。

｛ＳＢ271 建物跡｝桁行２間×梁行１間の東西棟である。ＳＢ269・ＳＸ94 と重複し、これよりも新しい。建物総長は梁行が 4.9m、梁行が 4.0m、桁行の柱間は 2.3～2.6mである。柱穴は長軸径 30～40ｃｍ、短軸 25～35ｃｍの楕円形を呈し、深さは北東隅のピットで 60ｃｍ、柱痕跡は径 10～12ｃｍの円形である。

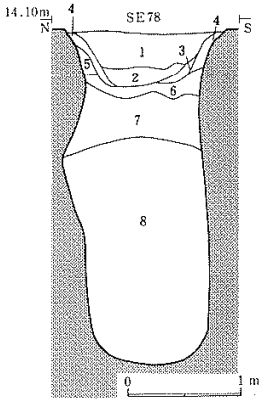
｛ＳＢ272 建物跡｝桁行３間×梁行１間の南北棟である。ＳＸ90 と重複しこれよりも新しい。建物総長は桁行が 5.8m、梁行が 3.8m、桁行の柱間は 1.7～2.3mである。柱穴は長軸径





SE 76

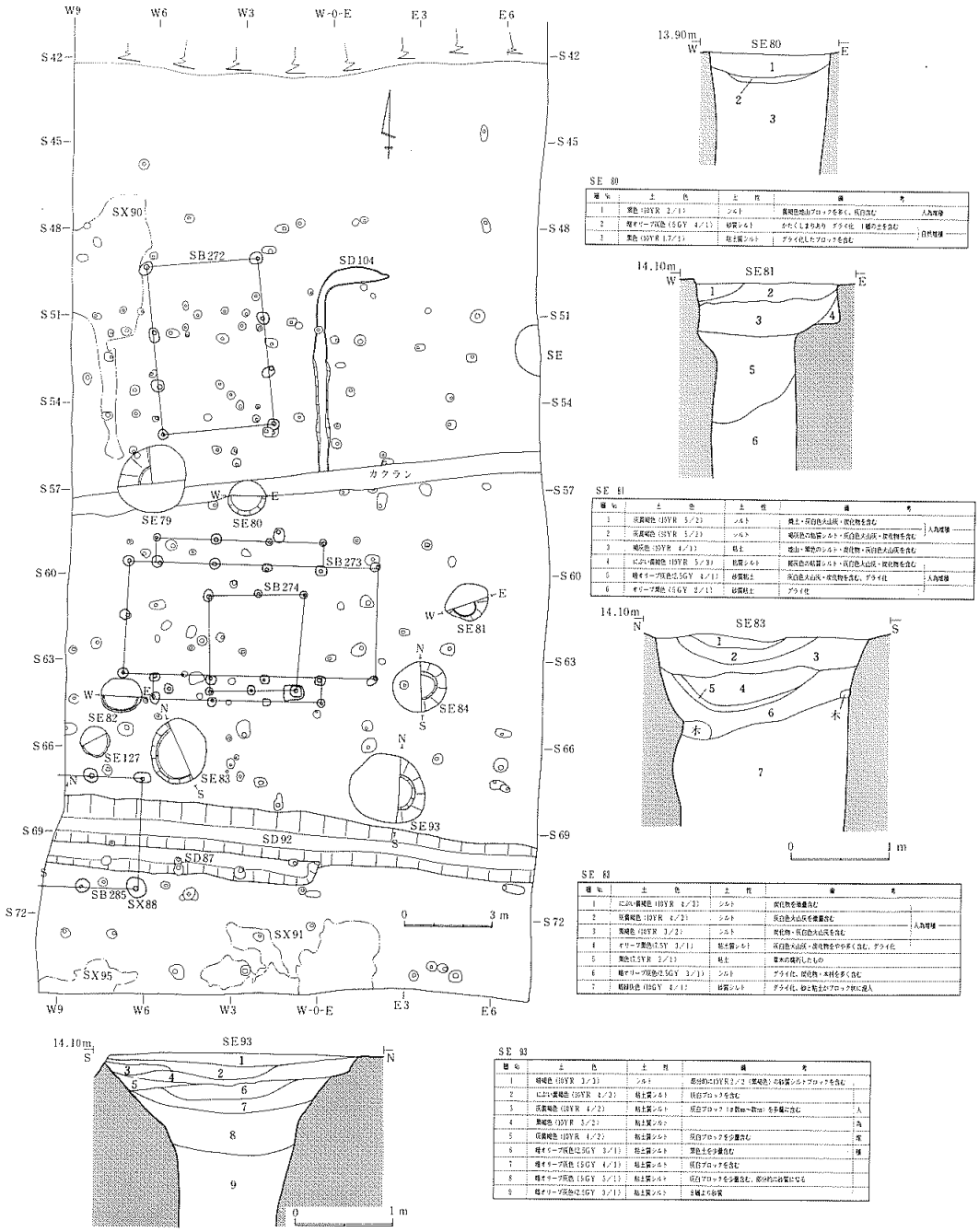
層No.	土色	土性
	備考	
1	褐色 (10YR 3/2)	シルト
		人為堆積
2	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト
炭化物・粘土をブロック状に含む		人為堆積
3	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト
黄褐色(地山)ブロックを多く含む、炭化物も含む		人為堆積
4	オリーブ黒色(5Y 3/2)	シルト質粘土
3層よりも地山ブロックを多く含む		人為堆積
5	暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)	シルト質粘土
		グライ化
6	暗オリーブ灰色(5GY 3/1)	シルト質粘土
		グライ化



SE 78

層No.	土色	土性
	備考	
1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト
10YR 4/2 (灰黄褐色) の地山ブロックを多量に含む、炭化物を微量含む		人為堆積
2	褐灰色 (10YR 4/1)	粘土質シルト
3層及び4層の土を多量に含む		人為堆積
3	黄灰色(2.5Y 4/1)	粘土質シルト
炭化物を微量含む		
4	黒褐色 (10YR 3/1)	シルト
炭化物を多量含む、地山粒を微量含む		廃棄土か?
5	褐灰色 (10YR 3/3)	シルト
地山粒を微量含む。		廃棄土か?
6	暗緑灰色(7.5GY 3/1)	砂質粘土
2層の土を少量含む、ややグライ化		人為堆積か?
7	暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)	砂質粘土
炭化物を少量含む、グライ化		自然堆積
8	オリーブ黒色 (10Y 3/1)	砂質粘土
炭化物を微量含む、グライ化		自然堆積

第７図　４区北遺構平面図・断面図



SE 80

層No.	土色	土性	備考	
1	黒色（10YR 2/1）	シルト	黄褐色粘土ブロックを多く、炭を含む	人為堆積
2	暗オリーブ灰色（5GY 4/1）	砂質シルト	かたくしまりあり　グライ化　1層のとき含む	自然堆積
3	黒色（10YR 1.7/1）	粘土質シルト	グライ化したブロックを含む	

SE 81

層No.	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色（10YR 5/2）	シルト	焼土・炭を含む	人為堆積
2	灰黄褐色（10YR 5/2）	シルト	暗灰色の粘質シルト・炭を含む	
3	暗灰色（10YR 4/1）	粘土	焼土・黒色のシルト・炭を含む	
4	にぶい黄褐色（10YR 5/3）	粘質シルト	暗灰色の粘質シルト・炭を含む	
5	暗オリーブ灰色（5GY 4/1）	砂質粘土	炭を含む	人為堆積
6	オリーブ黒色（5GY 2/1）	砂質粘土	グライ化	

SE 83

層No.	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐色（10YR 4/3）	シルト	炭化物を微量含む	
2	灰黄褐色（10YR 4/2）	シルト	炭・白色火山灰を微量含む	人為堆積
3	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	炭化物・炭・白色火山灰を含む	
4	オリーブ黒色（5Y 3/1）	粘土質シルト	白色火山灰・炭化物をやや多く含む、グライ化	
5	黒色（5YR 2/1）	粘土	草本の腐朽したもの	
6	暗オリーブ灰色（5GY 3/1）	シルト	グライ化、炭化物・木材を多く含む	
7	褐灰色（10GY 4/1）	砂質シルト	グライ化、粘土粒がブロック状に混入	

SE 93

層No.	土色	土性	備考	
1	暗褐色（10YR 3/3）	シルト	焼土的な10YR 5/2（黒褐色）の砂質シルトブロックを含む	
2	にぶい黄褐色（10YR 4/3）	粘土質シルト	炭白ブロックを含む	
3	灰黄褐色（10YR 4/2）	粘土質シルト	炭白ブロック（3 mm～数cm）を多量に含む	人
4	黒褐色（10YR 3/2）	粘土質シルト		為
5	灰黄褐色（10YR 4/2）	粘土質シルト	炭白ブロックを少量含む	堆
6	暗オリーブ灰色（5GY 3/1）	粘土質シルト	黒色土を少量含む	積
7	暗オリーブ灰色（5GY 4/1）	粘土質シルト	炭白ブロックを含む	
8	暗オリーブ灰色（5GY 3/1）	粘土質シルト	炭白ブロックを少量含む、部分的に砂質になる	
9	暗オリーブ灰色（5GY 3/1）	粘土質シルト	3層より砂質	

第８図　４区南遺構平面図・断面図

40～60ｃｍ、短軸 35～45ｃｍの楕円形を呈し、深さは北東隅のピットで 44ｃｍ、柱痕跡は径10～16ｃｍの円形である。

｛ＳＢ273 建物跡｝南北に張り出しを持つ桁行 5 間×梁行 2 間の東西棟である。ＳＢ274 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 8.6m、梁行が 3.8mである。身舎の桁行の柱間は 1.8～2.0m、西端では 1.1m、梁行の柱間は 1.9～2.0m、北側張り出し部の柱間は北側柱列で 1.8～2.0m、東側で 0.9m、南側張り出し部の柱間は南側柱列で 1.8～2.0m、東側で 0.8mである。柱穴は径 25～40ｃｍの円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 31ｃｍ、柱痕跡は径 8～12ｃｍの円形である。

｛ＳＢ274 建物跡｝桁行 2 間×梁行 1 間の東西棟である。ＳＢ273 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 3.0～3.3m、梁行が 2.9～3.3mである。桁行の柱間は 1.5～1.7mである。柱穴は長軸径 25～45ｃｍ、短軸 25～35ｃｍの楕円形もしくは円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 39ｃｍ、柱痕跡は径 8～14ｃｍの円形である。

｛ＳＢ284 建物跡｝桁行 3 間以上×梁行 1 間の東西棟である。ＳＢ264・265 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 7.0m以上、梁行が 3.6mである。桁行の柱間は 2.2～2.4mである。柱穴は長軸径 40～90ｃｍ、短軸 30～40ｃｍの楕円形もしくは円形を基調とし、深さは南東隅のピットで 34ｃｍ、柱痕跡は径 8～14ｃｍの円形である。

｛ＳＢ285 建物跡｝桁行 2 間以上×梁行 1 間の東西棟である。ＳＤ97・92 と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 3.3m、梁行が 3.8mである。桁行の柱間は 1.8mである。柱穴は長軸径 50～70ｃｍ、短軸 35～40ｃｍの円形もしくは楕円形を呈し、深さは北東隅のピットで 39ｃｍ、柱痕跡は径 10～14ｃｍの円形である。

焼け面遺構

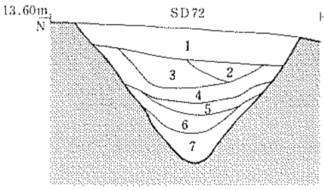
｛ＳＸ88 焼け面遺構｝ＳＤ87・92 の南西側で確認され、ピットにより南側を壊されているが、直径 50ｃｍ以上の円形を基調としていたと思われる。やや皿状に窪んだ部分が厚さ 6ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。ＳＢ285 と重複し、これよりも古い。

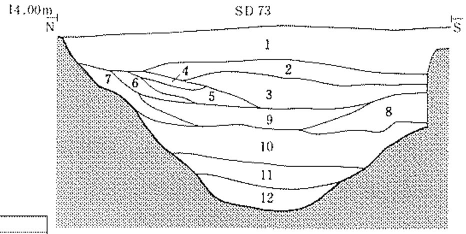
炭化物集中遺構

いずれもやや窪んだ部分に炭化物が集中したものである。ＳＸ95 を除いて中心部の厚いところで数ｃｍの厚さがあり、周囲はその分布が稀薄となる。また分布範囲は不整形で、これに伴う遺構は認められない。

｛ＳＸ90 炭化物集中遺構｝調査区中央西端で確認された。ＳＢ272 と重複し、これよりも古い。炭化物は集中部の北西端が最も厚い。範囲は南北 7m、東西 3m以上に広がり、底面は皿状を呈し深さ 10ｃｍである。

｛ＳＸ91 炭化物集中遺構｝調査区南端で確認され、炭化物は集中部の南西端が最も厚い。



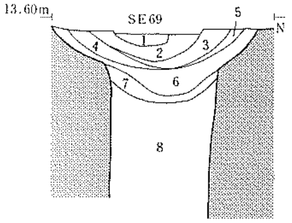


SD 72

層No	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色（10YR 4/2）	シルト	地山・黒褐色シルト・炭化物・灰白色火山灰を含む	
2	褐灰色（10YR 4/1）	シルト	地山ブロックを多量に含む	
3	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト	炭化物を微量含む	自然堆積
4	暗オリーブ灰色（2.5GY 3/1）	粘土質シルト	ややグライ化	
5	オリーブ黒色（5Y 3/1）	シルト	炭化物を微量含む、スクモ	
6	灰色（10Y 4/1）	粘土質シルト		水成堆積
7	暗オリーブ灰色（5GY 3/1）	粘土質シルト	炭化物を微量含む	

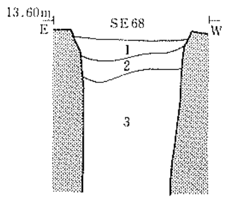
SD 73

層No	土色	土性	備考	
1	暗褐色（10YR 3/3）	シルト	炭化物を微量含む	
2	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物を微量含む	
3	褐灰色（10YR 4/1）	シルト	炭化物を微量含む	
4	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト	炭化物を微量含む	
5	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物を微量含む	
6	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト	炭化物を微量含む	
7	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物を微量含む（5層に同じ）	
8	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物を微量含む、にぶい黄色の地山ブロックを少量含む	
9	黒褐色（2.5Y 3/1）	シルト	炭化物を微量含む	
10	灰色（10Y 4/1）	粘土質シルト	炭化物を微量含む	
11	灰色（7.5Y 4/1）	砂質粘土	10GY（緑灰色）の粘土ブロックを微量含む	グライ化
12	灰色（7.5Y 4/1）	砂質粘土	緑灰色の粘土ブロックを多量に含む	



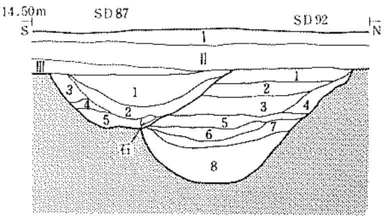
SE 69

層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	炭化物を少量・灰白色火山灰及び焼土を微量含む	
2	黒褐色（10YR 3/1）	シルト	炭化物を層状に多量・地山ブロックを多量に含む	
3	黒色（10YR 1.7/1）	シルト	炭化物を多量に含む、地山ブロックを若干含む	人為堆積
4	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	砂質シルト	地山ブロックを若干含む、6層との境に炭化物の層	
5	黒褐色（10YR 3/1）	シルト	2層に類似、炭化物・地山ブロック・焼土を含む、古銭出土	
6	灰オリーブ色（5Y 5/2）	砂質	炭化物を微量含む	
7	緑灰色（10GY 5/1）	粘土質シルト	ややグライ化	自然堆積
8	暗オリーブ灰色（2.5GY 4/1）	砂質粘土	グライ化	



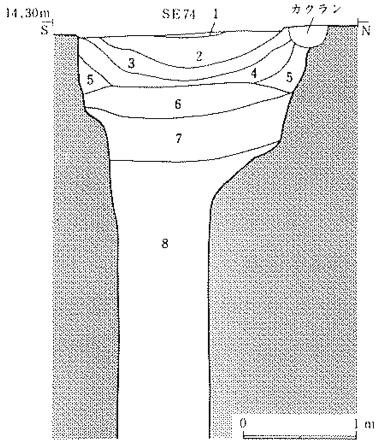
SE 68

層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色（10YR 3/1）	シルト	炭化物を若干含む、灰白色火山灰ブロックも少量含む	
2	褐灰色（10YR 4/1）	砂質シルト	炭化物を微量含む、灰白色火山灰ブロックも少量含む	人為堆積
3	暗オリーブ灰色（2.5GY 3/1）	砂質シルト		



SD 87 SD 92

層No	土色	土性	備考	
I	暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）	シルト質砂		
II	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト		耕作土
III	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト	炭化物など含む	
SD87 1	オリーブ褐色（2.5Y 4/3）	シルト	小円礫・炭化物・焼土や灰白色・火山灰など地山を含む	人為堆積
2	オリーブ黒色（5Y 3/1）	シルト	小円礫・炭化物を含む	
3	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物・灰白を含む	
4	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト	炭化物・灰白を含む	自然堆積
5	オリーブ黒色（10Y 3/1）	シルト	炭化物・灰白を含む	
SD92 1	オリーブ黒色（10Y 3/1）	シルト	炭化物・灰白・植物遺存体を含む	
2	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物・灰白・地山粒を含む	
3	暗灰黄色（2.5Y 4/2）	シルト	炭化物・小石・地山粒を含む	人為堆積
4	黄灰色（2.5Y 4/1）	シルト	炭化物・地山粒を含む	
5	灰色（7.5Y 4/1）	シルト	炭化物を含む	
6	オリーブ黒色（7.5Y 3/1）	シルト	炭化物を含む	自然堆積
7	オリーブ黒色（5Y 3/1）	シルト	炭化物・植物遺存体を含む	
8	オリーブ黒色（10Y 3/1）	シルト	炭化物・灰白・植物遺存体を含む	



SE 74

層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色（10YR 2/2）	シルト	炭化物を多量・焼土を若干・地山ブロックを少量含む	
2	黒褐色（10YR 2/3）	シルト	炭化物・焼土を微量・地山ブロックを若干含む	自然堆積？
3	黒褐色（10YR 2/3）	シルト	炭化物を多量含む	
4	黒褐色（10YR 3/1）	シルト	炭化物を微量・地山ブロックを少量含む	
5	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	炭化物を若干・地山粒かブロックを多量に含む	崩落土か？
6	オリーブ黒色（7.5Y 3/1）	粘土質シルト	炭化物を微量・炭化物を薄く層状に含む（流れ込み）、グライ化	自然堆積？
7	暗オリーブ灰色（2.5GY 3/1）	砂質シルト	地山のグライ化したブロックを多量含む、グライ化	人為堆積？
8	暗オリーブ灰色（2.5GY 4/1）	砂質粘土	木材を含む	

第９図　４区遺構断面図

範囲は南北 3m以上、東西 6mに広がり、深さ最大 10ｃｍで底面は凹凸が激しい。

｛ＳＸ94 炭化物集中遺構｝調査区中央で確認された。ＳＢ270・271・ＳＤ96 と重複し、これらよりも古い。炭化物は集中部の中央が最も厚い。範囲は非常に広く南北 7m以上、東西 12m以上に広がり、深さ最大 17ｃｍで底面は凹凸が激しい。

｛ＳＸ95 炭化物集中遺構｝調査区南西端で確認され、炭他物は特に集中することなく分布する。範囲は南北 1.5m以上、東西 4m以上に広がり、深さ最大 7㎝で底面は凹凸が激しい。

Ｅ．５区

掘立柱建物跡 3 棟、井戸 7 基、溝 2 条。土壙 6 基、焼け面遺構 6 基、炭化物集中遺構 1 基、ピット多数が確認された。

調査区北側ではＳＸ130 炭化物集中遺構の上に、10～20ｃｍの厚さでにぶい黄褐色から黒褐色を呈する砂質シルトの整地層が認められ、この整地層の上下両面で溝、焼け面遺構、炭化物集中遺構、ピットなどの遺構が確認された。上下層ともに焼け面遺構の周囲には多数のピットが認められる。これらは焼け面遺構に伴う覆屋などのピットと思われるが、その構造などは不明である。また、整地層が残存するのは調査区北端の一部であり、南側に分布する掘立柱建物跡、井戸、溝などが上下いずれの層に属するのかは不明である。

また調査区南半分では大溝ＳＤ118 などが確認されたのみで、遺構の分布は稀薄となる。

＜上層＞

焼け面遺構

いずれも調査区北西端に位置する。

｛ＳＸ123 焼け面遺構｝長軸 70ｃｍ、短軸 50ｃｍの楕円形を呈し、深さ 30ｃｍである。底面に厚さ 10ｃｍの炭化物や焼土を含む黒褐色のシルトが堆積し、その上面の皿状に窪んだ部分が厚さ 5ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。

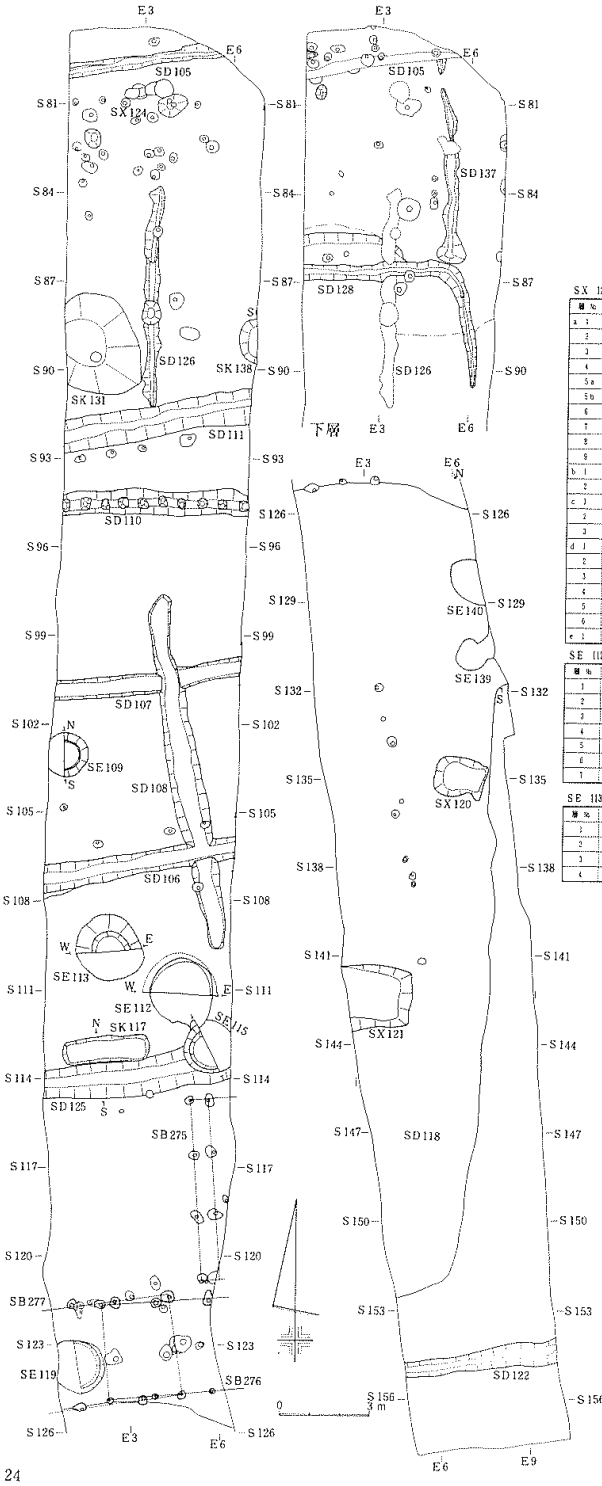
｛ＳＸ124 焼け面遺構｝ａ～ｅの 5 基の土壙からなり、ａ・ｂ→ｃ・ｄ→ｅの順に古くなる。いずれも長軸 40～70ｃｍ、短軸 30～60ｃｍの楕円形を基調とし、底面に厚さ 4～10ｃｍの炭化物や焼土を含む黒褐色のシルトが人為的に堆積し、その上面の皿状に窪んだ部分が厚さ数ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。

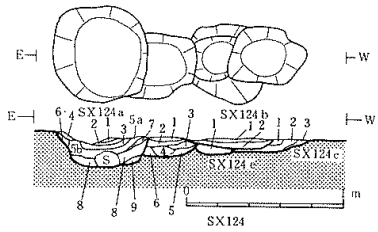
＜下層＞

焼け面遺構

これらもすべて調査区北西端に位置する。

｛ＳＸ132 焼け面遺構｝長軸 40ｃｍ以上、短軸 20ｃｍの不整楕円形を呈し、深さ 3ｃｍの皿状に窪んだ部分の上面が厚さ 2ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。





SX 124

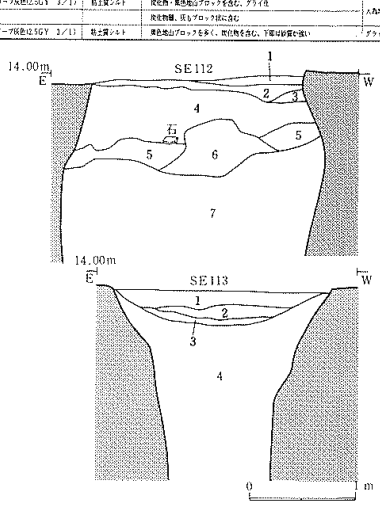
層 No	土色	土性	備考	
a 1	黒褐色(7.5YR 3/2)	シルト	焼け面	
2	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	灰まじりの層、炭化物・焼質を少量含む	
3	にぶい赤褐色(5YR 4/4)	シルト	焼け面(非常によく焼けている)	
4	にぶい赤褐色(5YR 5/4)	シルト	焼け面(3層より焼成が良くない)	
5a	黒褐色(7.5YR 3/1)	シルト	焼け面	人為堆積
5b	黒褐色(5YR 2/2)	シルト	焼土・炭化物・灰を少量含む	
6	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	焼成をうけた層(非常に弱い火熱)	自然堆積
7	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	炭化物層	人為堆積
8	暗オリーブ灰色(2.5Y 3/3)	粘質シルト	少量の炭化物・焼土を含む	人為堆積
9	暗オリーブ灰色(2.5Y 3/3)	粘質シルト	8層に同じ	
b 1	黒褐色(7.5YR 2/2)	シルト	上層に比べ火熱の影響は少ないが、やや赤褐色を呈する	
2	黒褐色(10YR 2/2)	砂	少量のシルト質土を含む	人為堆積
c 1	明褐色(7.5YR 5/6)	粘質シルト	非常に火熱をうけた焼け面	
2	暗褐色(7.5YR 2/3)	シルト	1層に比して火熱の影響は少ない	
3	黒褐色(10YR 2/3)	砂質シルト	焼土・炭化物を若干含む	
d 1	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	炭化物・焼質を含む、炭化物層	
2	褐色(7.5YR 4/4)	シルト	非常に火熱をうけた面、焼成面	
3	暗褐色(7.5YR 2/3)	粘質シルト	2層に比して火熱の影響は少ない	
4	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	砂質シルト	炭化物・焼土を若干含む	
5	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	炭化物を少量含む	人為堆積
6	灰黄褐色(10YR 4/2)	粘質シルト	灰・炭化物を少量含む	
e 1	黒褐色(10YR 3/1)	砂質シルト	炭化物・焼土を少量含む	

SE 112

層 No	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR 4/2)	砂質シルト	灰白ブロック含む	
2	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	砂質シルト	黒色・黄褐色地山ブロックを多く含む	人
3	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト(やや砂質)	黄褐色・グライ化土ブロックを多く含む	為
4	暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)	粘土質シルト	灰白・炭化物・黒色ブロックを多く含む	堆
5	暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1、砂質シルト)と暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1、粘質シルト)の混ざったもの		グライ化	積
6	暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)	粘土質シルト	黒色ブロックを多く・灰白ブロックを少し含む	
7	2.5GY 4/1(粘土質シルト)と10YR 1.7/1黒色(粘土質シルト・地山)の互層状に堆積、灰白わずかに含む			

SE 113

層 No	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	炭化物を多く含む、灰白わずか	
2	暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)	粘土質シルト	炭化物・黒色地山ブロックを含む、グライ化	人為堆積
3			炭化物層、灰白ブロック状に含む	
4	暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)	粘土質シルト	黒色地山ブロックを多く、炭化物を含む、下層は砂質が強い	グライ化



第10図　5区遺構平面図・断面図

｛ＳＸ133 焼け面遺構｝直径 30ｃｍ程の円形を呈していたと推定され、深さ 8ｃｍの皿状に窪んだ部分の上面が厚さ 2ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。

｛ＳＸ134 焼け面遺構｝直径 45ｃｍ程の円形を呈していたと推定され、深さ 5ｃｍの皿状に窪んだ部分の上面が厚さ 2ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。

｛ＳＸ135 焼け面遺構｝長軸 50ｃｍ、短軸 40ｃｍの楕円形を呈し、平坦な面が厚さ 4ｃｍにわたり硬く焼け締まっている。

炭化物集中遺構

｛ＳＸ130 炭化物集中遺構｝調査区北端から南に 7～10mにわたり、厚いところで 3ｃｍ程の厚さで炭化物が集中していた。南側はその分布が稀薄となるが、調査区外の西と東に広がって分布している。

＜不明＞

掘立柱建物跡

調査区中央付近、ＳＤ118 の北に位置する。

｛ＳＢ275 建物跡｝桁行 3 間×梁行 1 間以上で、西に廂をもつ南北棟である。建物総長は桁行が 6.1m、柱間は身舎の桁行で 1.8～2.0m、廂の西側柱列で 1.9～2.2m、北側で 0.6mである。柱穴は長軸 30～50ｃｍ、短軸 25～40ｃｍの不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 30ｃｍ、柱痕跡は径 10～14ｃｍの円形である。

｛ＳＢ276 建物跡｝桁行 3 間以上×梁行 1 間の東西棟である。ＳＢ277 建物跡と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 3.9m以上、梁行が 3.2m、桁行の柱間は 1.6～1.9mである。柱穴は長軸径 20～50ｃｍ、短軸 15～35 ㎝の不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 35ｃｍ、柱痕跡は径 8～18ｃｍの円形である。

｛ＳＢ277 建物跡｝桁行 3 間以上×梁行 1 間の東西棟である。ＳＢ276 建物跡と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が 4.1m以上、梁行が 3.3m、桁行の柱間は 1.3～2.0mである。柱穴は長軸径 30～45ｃｍ、短軸 25～40ｃｍの不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 38ｃｍ、柱痕跡は径 8～14ｃｍの円形である。

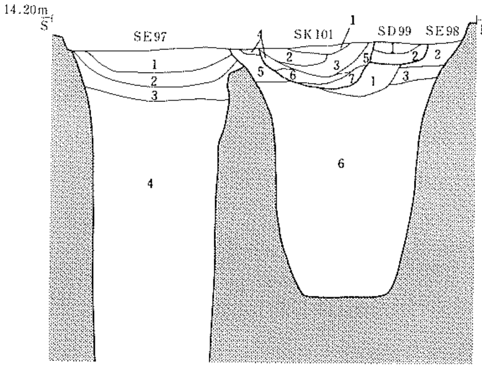
Ｆ．6 区

井戸 2 基、溝 7 条、土壙 2 基、そして少数のピットが地山上面で確認された。

6 区は遺跡の南西端にあたり遺構の分布は非常に稀薄である。溝は北東－南西方向のものが多い。

Ｇ．7 区

溝 6 条の他に、ＳＤ144 とＳＤ145 の間に土壙、ピットなどが確認された。ここでは調査期間の都合上ＳＤ145 を除き平面形を確認したのみである。溝は調査区の幅が狭かったもの



SK 101

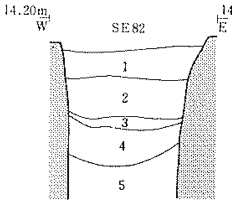
層 No.	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色（10YR 4／2）	やや砂質シルト		
2	暗オリーブ褐色（2.5Y 3／3）	やや砂質シルト	φ数mmの炭化物をやや多く含む	
3	（10YR 4／2.5）	やや砂質シルト	φ数mmの炭化物を少量含む	
4	暗褐色（10YR 3／3）	シルト	φ1cm前後の炭化物をやや多く含む	人為堆積
5	暗褐色（10YR 3／3）	シルト	4層と同じ	
6	黒褐色（2.5Y 3／1）	粘土質シルト	φ2cm前後の炭化物をやや多く含む	
7	暗オリーブ褐色（2.5Y 3／3）	粘土質シルト	φ数mmの炭化物を少量含む	

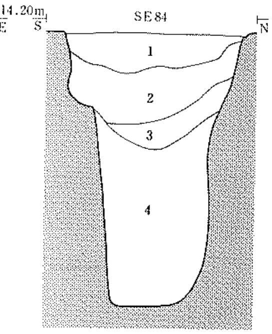
SD 99

層 No.	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色（10YR 4／2）	やや砂質シルト	炭化物を極微量含む、軟くと非常に硬い	
2	にぶい黄褐色（10YR 4／3）	シルト	炭化物を多量に含む	人為堆積

SE 98

層 No.	土色	土性	備考	
1			炭化物層、根なども多く含む	
2	褐灰色（10YR 4／1）	シルト	炭化物を少量含む	
3	灰黄褐色（10YR 4／2）	粘土質シルト	黄褐色地山ブロック・炭化物を少量含む	
4	にぶい黄褐色（10YR 4／3）	シルト	炭化物・多量に含む	人為堆積
5	灰黄褐色（10YR 4／2）	粘土質シルト	3層と同じ	
6	暗灰黄色（2.5Y 4／2）	粘土質シルト	下部はややグライ化	





SE 97

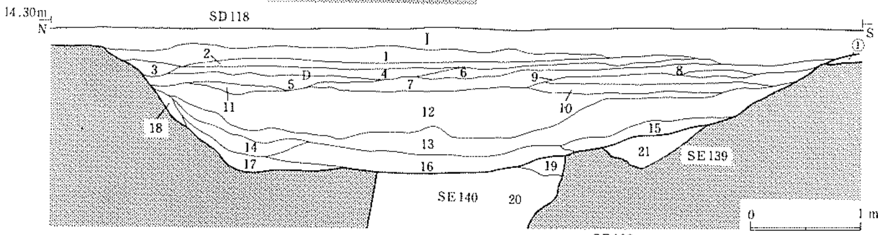
層 No.	土色	土性	備考	
1	暗灰黄色（2.5Y 4／2）	シルト		
2	黒褐色（10YR 2／2）	粘土質シルト	炭化物（φ数cm角状）を多く含む	人為堆積
3	オリーブ黒色（5Y 3／1）	粘土質シルト	黄褐色地山ブロックを多く含む	
4	灰色（5Y 4／1）	粘土質シルト	下部はややグライ化	

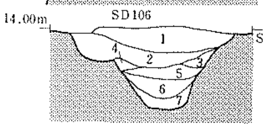
SE 82

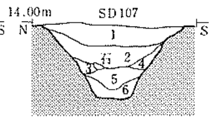
層 No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色（2.5Y 3／2）	シルト	炭化物を含む	
2	オリーブ黒色（10Y 3／1）	シルト	下部にφ数cmの灰白色火山灰ブロックを多く含む部分あり、炭化物を含む	
3	黒褐色（2.5Y 3／1）	粘土		グライ化
4	オリーブ黒色（5Y 3／1）	シルト質粘土		
5	灰色（10Y 4／1）	粘土		

SE 84

層 No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色（2.5Y 3／2）	シルト	地山ブロックを多量・炭化物・上面に灰白を若干含む	人為堆積
2	灰色（5Y 4／1）	粘土質シルト	木が横位に堆積、上面に地山ブロックを若干・炭水化物を微量含む、ややグライ化	自然堆積？
3	暗オリーブ灰色（2.5GY 3／1）	シルト	グライ化	
4	オリーブ黒色（5Y 3／1）	シルト	グライ化、スクモ	







SD 118

層 No.		土色	土性	備考
	Ⅰ	オリーブ褐色（2.5Y 4／3）	シルト	耕作土
SD118	1	黄褐色（2.5Y 5／3）	砂質シルト	
	2	〃（〃）	〃	
	3	暗灰黄色（2.5Y 5／2）	〃	炭化物を少量含む
	4	〃（〃）	シルト	炭化物・灰白を少量含む
	5	灰オリーブ色（5Y 4／2）	〃	〃
	6	暗灰黄色（2.5Y 5／2）	〃	灰白を少量含む
	7	灰オリーブ色（2.5Y 4／2）	〃	〃、黄灰色粘土質シルトブロックを多量に含む
	8	暗灰黄色（2.5Y 5／2）	〃	灰白を少量含む
	9	黄褐色（2.5Y 5／3）	〃	灰白粒を少量含む
	10	灰色（5Y 4／1）	砂質シルト	〃、黄灰色粘土質シルトブロックを少量含む
	11	暗灰黄色（2.5Y 4／2）	シルト	灰白を少量含む
	12	黄灰色（2.5Y 5／1）	砂質シルト	〃・炭化物を少量含む
	13	暗灰黄色（2.5Y 4／2）	シルト	〃・〃 を極少量含む、黄褐色シルトブロックを含む
	14	灰色（10Y 4／1）	粘土質シルト	炭化物を少量含む
	15	黄灰色（2.5Y 4／1）	〃	地山ブロック・灰白ブロックを含む、炭化物を少量含む
	16	オリーブ黒色（2.5Y 3／1）	砂質シルト	炭化物を多量に含む
	17	灰色（5Y 4／1）	粘土質シルト	炭化物を少量含む、地山ブロックを多量に含む
	18	暗灰黄色（2.5Y 4／2）	〃	地山ブロック・灰白ブロックを含む
SE140	19	灰色（10Y 4／1）	シルト	
	20	オリーブ黒色（5Y 3／1）	粘土質シルト	地山ブロックを多量に含む、炭化物・灰白を含む
SE139	21	灰色（7.5Y 4／1）	〃	炭化物・地山ブロック・灰白ブロックを含む
整地	①	黄褐色（2.5Y 5／3）	シルト	炭化物を少量含む　整地層

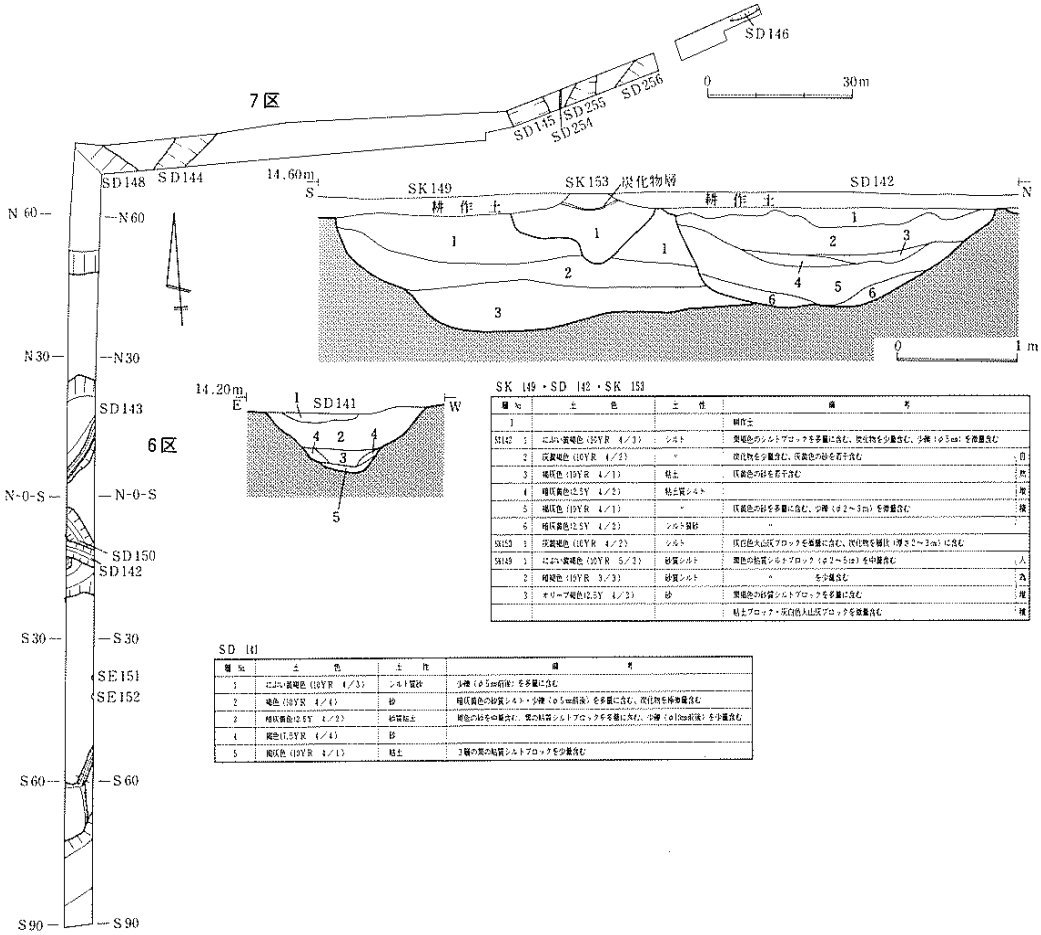
SD 106

層 No.	土色	土性	備考	
1	にぶい黄褐色（10YR 4／3）	シルト	小礫を少量含む	人為堆積
2	にぶい黄褐色（10YR 4／3）	シルト	小礫を多量に含む	
3	暗褐色（10YR 3／3）	シルト		
4	暗褐色（10YR 3／3）	シルト	3層に同じ	
5	灰色（7.5Y 4／1）	シルト	炭化物を少量含む	
6	灰色（10Y 4／1）	シルト	炭化物を中量含む	グライ化
7	灰色（7.5Y 4／1）	シルト	炭化物を少量含む	自然堆積

SD 107

層 No.	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色（10YR 5／2）	粘土	部分的に砂を含む	人為堆積
2	灰黄褐色（10YR 4／2）	粘土	部分的に灰白色の火山灰を含む	
3	黄褐色（2.5Y 5／4）	シルト		自然堆積
4	黄褐色（2.5Y 5／4）	シルト	3層に同じ	
5	黄灰色（2.5Y 4／1）	砂まじりシルト	炭化物を少量含む	自然堆積
6	オリーブ黒色（10YR 3／1）	粘土質シルト	灰白火山灰を含む	

第11図　4・5区遺構断面図

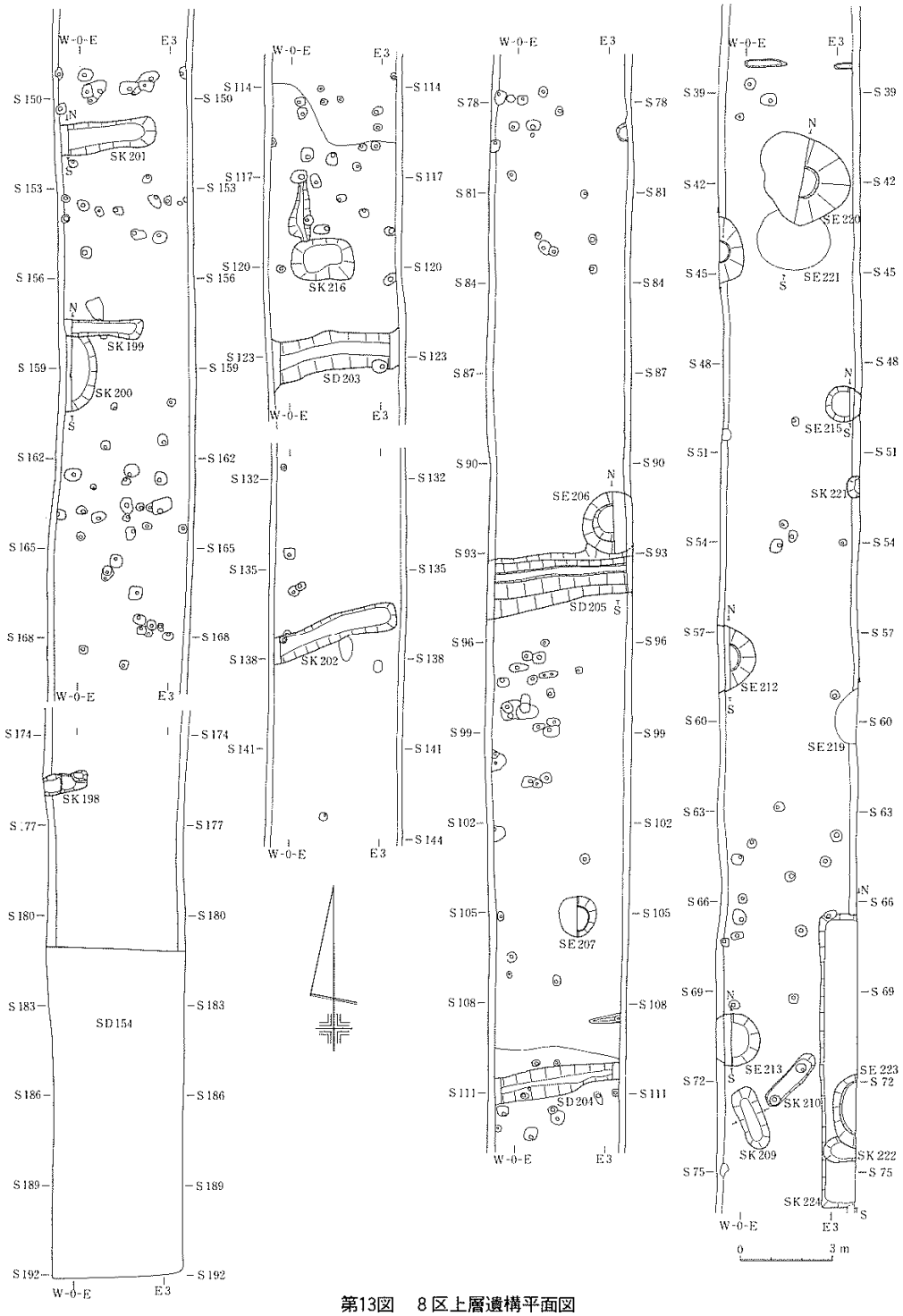


第12図　6・7区遺構平面図・断面図

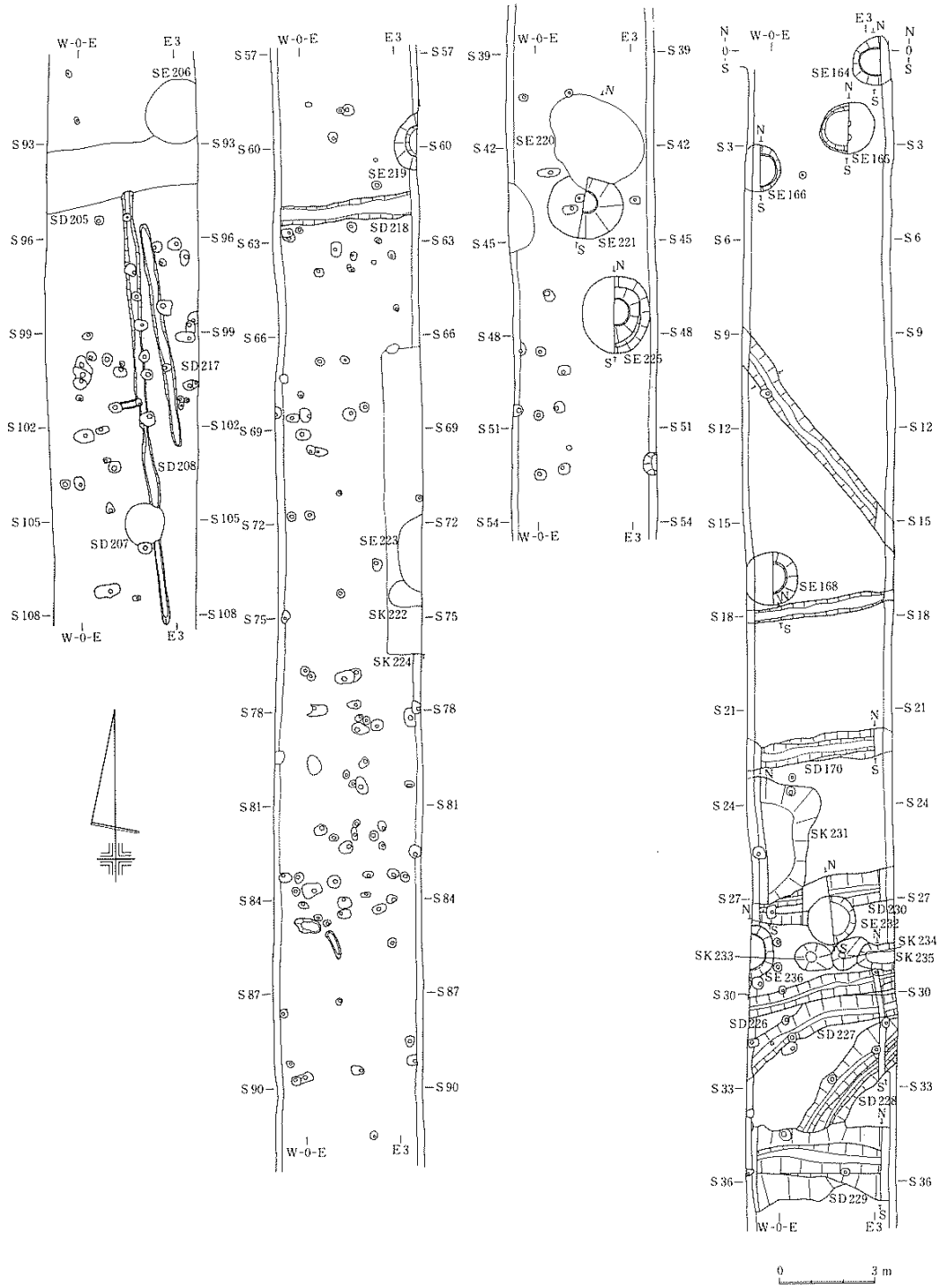
の、すべて南北方向を基本としている。

H．8区

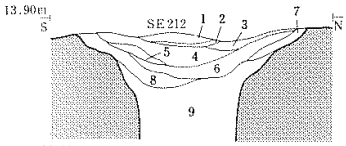
ここでは、S－23～122 の範囲で厚さ 5～15ｃｍの整地層が断続的に認められ、その上下両面から多数の遺構が確認された。また整地層の残存しない部分からも遺構が確認されたが、これらがどちらの時期に含まれるかは不明である。整地層上面からは、井戸８基、溝２条、土壙６基、ピット多数、整地層下面からは、井戸５基、溝８条、土壙４基、ピット多数、不明なものは井戸４基、溝６条、土壙５基、ピット多数である。またここでは多くのピットも確認されたが、調査区の幅が 4.7mと狭く、掘立柱建物跡については明確にはできなかった。



第13図　8区上層遺構平面図

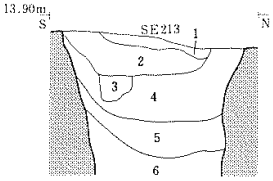


第14図　8区下層遺構平面図



SE 212

層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	暗灰黄色シルトブロックを含む、炭化物を含む	人為堆積
2	黒色(5Y 2/1)	粘質シルト	炭化物・炭化材を少量含む	自然堆積
3	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	シルトブロックを少量含む、炭化材を少量含む	人為堆積
4	黄褐色(2.5Y 5/3)	〃	シルトブロック・炭化ブロックを多量に含む、炭化物を極多量に含む	人為堆積
5	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃	シルトブロックを含む、炭化物を少量含む	
6	〃 (10YR 2/2)	〃	スクモと互層をなす	自然堆積
7	暗灰黄色 (2.5Y 4/2)	〃	シルトブロックを含む	
8	黒褐色 (2.5Y 3/1)	〃	炭化物を少量含む	
9	〃 (10YR 2/2)	粘土質シルト		

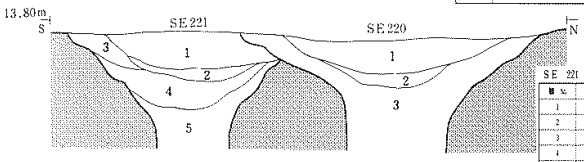


SE 213

層No.	土色	土性	備考
1	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	暗オリーブ褐色粘質シルトブロックを含む、炭化物・炭化材を少量含む
3	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃	粘質シルトブロック・炭化物を少量含む
4	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	粘質シルト	
5	黒褐色(2.5Y 3/1)	スクモ	木炭・植物の茎・根が多量に入っている
6	黒色(10YR 2/1)	〃	〃

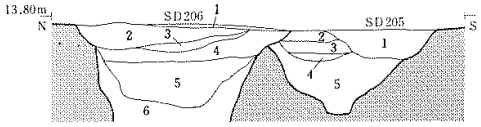
SE 220

層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色 (10YR 3/1)	粘土質シルト	炭化物を多量に含む、地山ブロック・炭化ブロックを含む	
2	〃 (10YR 3/1)	〃	1層よりも粒細い、炭化物・炭化材を少量含む	自然堆積
3	〃 (2.5Y 3/1)	〃	炭化物を少量含む、暗灰にスクモ層が入る	



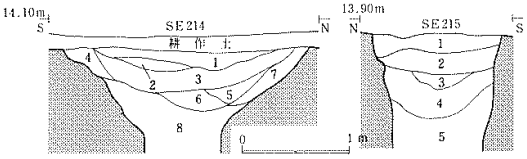
SE 221

層No.	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	炭化物・炭化材を少量含む	
2	灰色(2.5Y 4/1)	粘土質シルト	〃 を極めて多量に含む、赤色粘土質シルトブロックを含む	自然堆積
3	暗灰色 (10YR 4/1)	シルト	〃 ・粒土を極少量含む	
4	灰色 (5Y 4/1)	粘土	〃 炭化ブロックがブライトしたブロック・スクモを含む	自然堆積か?
5	〃 (5Y 4/1)	スクモ	炭化ブロックを含む	



SE 206

層No.	土色	土性	備考	
1	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	シルト		自然堆積
2	〃 (2.5Y 4/2)	〃	炭化物を含む、暗色シルトブロックを少量含む	
3	黄灰色(2.5Y 4/1)	〃	オリーブ褐色シルトブロックを多量に含む、炭化物を少量含む	人為堆積
4	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	〃 を含む、炭化物を含む	
5	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	スクモと互層をなす、炭化物を少量含む	水田堆積
6	黄灰色(2.5Y 4/1)	〃	炭化物を極少量含む	自然堆積



SD 205

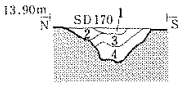
層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	黒褐色シルトブロックを少量含む	人為堆積
2	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	〃	褐色シルトブロックを含む	
3	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃		
4	〃 (2.5Y 5/2)	〃	3層よりやや粗っぽい	自然堆積
5	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト		

SE 214

層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色 (10YR 3/2)	シルト	炭化物・炭化材を少量含む、オリーブ褐色シルトブロックを少量含む	
2	黒褐色 (10YR 4/2)	〃	にぶい黄褐色シルトブロック・炭化物を少量含む	
3	黒褐色 (10YR 3/2)	〃	炭化物・炭化ブロックを少量含む、にぶい黄褐色シルトブロックを多量に含む	人為堆積
4	〃 (〃)	〃	炭化物・褐色シルトブロックを少量含む	
5	〃 (2.5Y 3/2)	〃		
6	オリーブ黒色(2.5Y 3/1)	粘土質シルト		
7	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	シルトブロックを少量含む	自然堆積
8	黒褐色(2.5Y 3/1)	粘土質シルト	黒色スクモを含む	

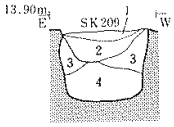
SE 215

層No.	土色	土性	備考	
1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	シルトブロックを少量含む、炭化物・炭化材を含む	人為堆積
2	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃	炭化物を少量含む	自然堆積?
3	〃 (2.5Y 3/2)	粘土質シルト	暗灰黄色粘土質シルトブロックを多量に含む	人為堆積
4	〃 (2.5Y 3/1)	〃		自然堆積?
5	〃 (10YR 3/1)	〃		



SD 170

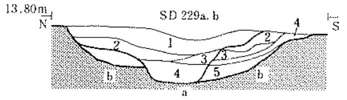
層No.	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色 (10YR 4/2)	シルト	黄褐色のブロックを少量含む、炭化物少量含む	
2	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃	〃	人為堆積
3	〃 (2.5Y 3/2)	〃	暗灰黄色のシルトブロックを多量に含む	
4	〃 (2.5Y 3/2)	粘土質シルト	〃 少量含む	



SK 209

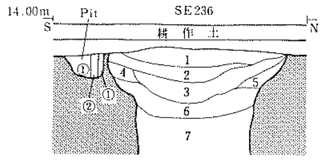
層No.	土色	土性	備考
1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	
2	暗灰色 (10YR 4/1)	粘土	炭化物を多く極めに含む、地山ブロックを多量に含む
3	黒褐色 (10YR 3/1)	〃	〃 を多量に含む、 〃
4	〃 (10YR 3/2)	粘土質シルト	〃 ブライトした地山ブロックを多量に含む、全体にわたってスクモ化

第15図　8区遺構断面図（1）



SD 229

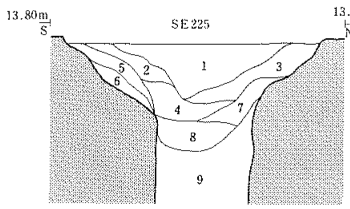
層No.	土色	土性	備考	
a 1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	砂質シルト	小礫・灰白粒を極少量含む	
2	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	シルト	灰白粒を少量含む	
3	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	砂質シルト		
4	〃 (2.5Y 4/2)	シルト	中粒砂が層状に堆積している	
b 1	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	〃	粘土質シルトを少量含む	自然堆積
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	黄灰色粘土質シルトブロックを多量に含む、灰白粒・炭化物を含む	
3	〃 (2.5Y 5/2)	〃	砂質シルトを多量に含む	
4	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	粘土質シルト	炭化物を少量含む、黒褐色粘土質シルトが薄く層状に入る	
5	黄褐色(2.5Y 5/3)	〃		

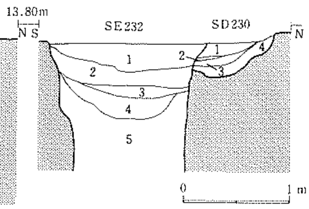


① 掘り方埋土
② 柱痕跡

SE 236

層No.	土色	土性	備考	
1	黄褐色(2.5Y 5/3)	シルト	炭化物・灰白粒を少量含む	
2	暗オリーブ色(2.5Y 3/3)	〃	炭化物を少量含む、オリーブ褐色シルトブロックを含む	自然堆積
3	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	〃 、灰白粒を少量含む	
4	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	〃	2.5Y4/2シルトを多量に含む、灰白粒を含む	人為堆積
5	〃 (〃)	〃		
6	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	粘土質シルト		自然堆積
7	黄灰色(2.5Y 4/1)	〃		



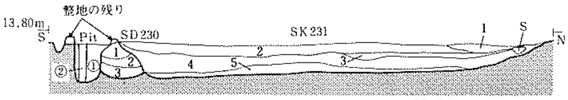


SE 225

層No.	土色	土性	備考	
1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	炭化物・灰白粒・黄褐色シルトブロックを少量含む	
2	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	〃 を極少量含む	
3	褐灰色(10YR 4/1)	〃	〃 ・灰白粒を極少量含む	
4	黄灰色(2.5Y 4/1)	〃		
5	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	炭化物・灰白粒を極少量含む	自然堆積
6	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃	スクモを少量含む	
7	黄灰色(2.5Y 4/1)	〃	〃	
8	オリーブ黒色(5Y 3/1)	〃	スクモを含む	
9	灰色(5Y 4/1)	〃		

SE 232　SD 230

層No.	土色	土性	備考	
SE232 1	暗灰黄色(2.5Y 3/2)	シルト	炭化物を含む	
2	褐灰色(10YR 4/1)	〃	〃 を少量含む	
3	黄灰色(2.5Y 4/1)	粘土質シルト	〃 を極少量含む	
4	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃	〃	
5	灰色(5Y 4/1)	〃		自然堆積
SD230 1	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	シルト	炭化物を少量含む	
2	黄褐色(2.5Y 5/3)	粘土質シルト		
3	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	砂質シルトを含む	
4	〃 (〃)	粘土質シルト		



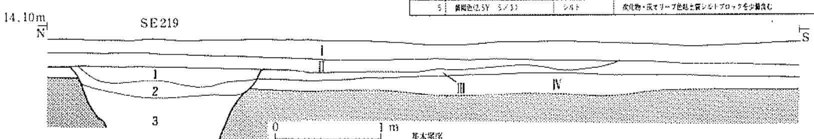
① 掘り方埋土
② 柱痕跡

SD 230

層No.	土色	土性	備考	
1	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	シルト	炭化物を少量含む	
2	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	〃 を含む、砂質シルトを少量含む	自然堆積
3	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	〃 を少量含む	

SK 231

層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	灰白粒・シルトを少量含む	
2	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	〃	シルトを含む	
3	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃		
4	黒色(2.5Y 2/1)	〃	炭化物・オリーブ褐色シルトブロックを少量含む	自然堆積
			暗褐色のスクモが薄く層状に入っている	
5	黄褐色(2.5Y 5/3)	シルト	炭化物・灰オリーブ色粘土質シルトブロックを少量含む	

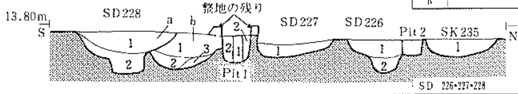


SE 219

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	炭化物・灰白粒シルトブロックを少量含む
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	〃 を少量含む
3	〃 (2.5Y 5/2)	〃	黒褐色粘土質シルトブロックを含む

基本層序

層No.	土色	土性	備考	
Ⅰ			耕作土	
Ⅱ	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	炭化物を多量に含む、小礫・焼土を極少量含む	整地
Ⅲ	〃 (〃)	〃	〃 は非常に少ない、地山ブロックを多量に含む	
Ⅳ			地山	



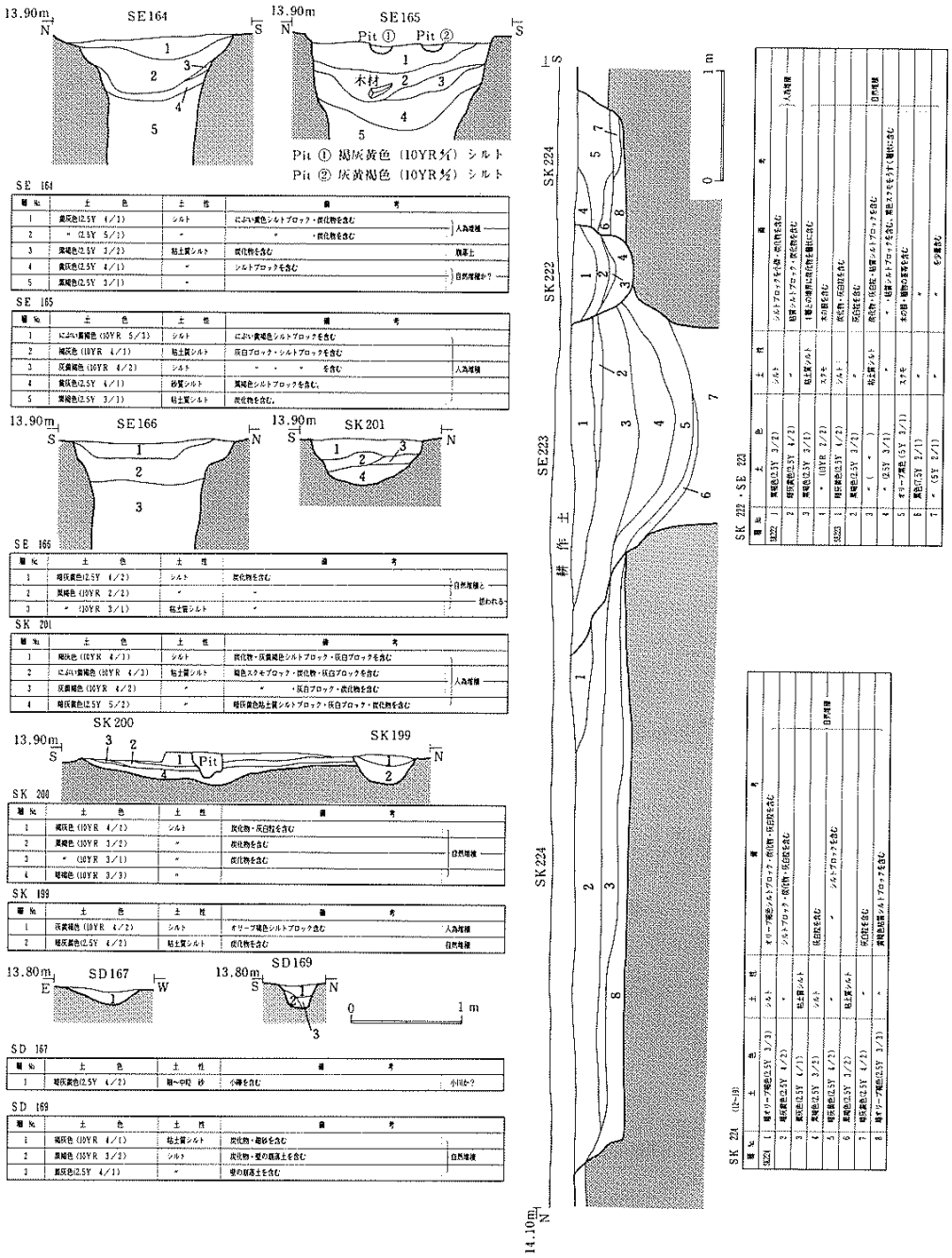
SK 235・Pit

層No.	土色	土性	備考	
SK235	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	炭化物・シルトブロックを多量に含む	人為堆積
Pit 1 1	〃 (〃)	〃		
2	〃 (〃)	〃	灰白粒を少量含む	
Pit 2	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃		

SD 226・227・228

層No.	土色	土性	備考	
SD228 a 1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	炭化物・灰白粒を少量含む	
2	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	砂質シルト	灰白粒を少量含む、オリーブ褐色シルトブロックを含む	
SD228 b 1	黄灰色(2.5Y 4/1)	シルト	〃	
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃		自然堆積
3	〃 (2.5Y 5/2)	〃		
SD227 1	〃 (2.5Y 4/2)	〃	シルトブロックを含む	
SD226 1	〃 (〃)	〃	灰白粒を少量含む	
2	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを含む	

第16図　8区遺構断面図（2）



第17図　8区遺構断面図（3）

Ⅰ．9区

9区は農道を挟んで東区と西区に別れる。以下、東区、西区の順に説明する。

＜東区＞

掘立柱建物跡5棟、井戸8基、土壙8基、ピット多数が地山上面で確認された。整地層は残存していない。調査区東側には遺構はまったく分布せず、遺跡の東端部分と考えられるが、区画溝のような施設は認められない。また9区東区と接する10区南側にもまったく遺構は認められない。

掘立柱建物跡

｛ＳＢ278建物跡｝桁行4間×梁行1間の東西棟である。建物総長は桁行が6.8～7.1m、梁行が3.6m、桁行の柱間は1.4～1.9mである。柱穴は長軸20～40ｃｍ、短軸20～40ｃｍの不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで40ｃｍ、柱痕跡は径10～16ｃｍの円形である。

｛ＳＢ279建物跡｝桁行4間×梁行1間の東西棟である。ＳＢ280建物跡と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が9.0m、梁行が3.8m、桁行の柱間は2.0～2.9mである。柱穴は長軸径20～80ｃｍ、短軸15～30ｃｍの不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで30ｃｍ、柱痕跡は径10～15ｃｍの円形である。

｛ＳＢ280建物跡｝桁行3間×梁行1間の東西棟である。ＳＥ183・ＳＢ279建物跡と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が5.7m、梁行が3.8m、桁行の柱間は1.8～1.9mである。柱穴は長軸径30～70ｃｍ、短軸25～60ｃｍの不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで48ｃｍ、柱痕跡は径12～20ｃｍの円形である。

｛ＳＢ281建物跡｝桁行3間以上×梁行1間の南北棟である。建物総長は桁行が6.0m以上、梁行が3.9m、桁行の柱間は2.0～2.1mである。横穴は径30前後の円形を基調とし、深さは北東隅のピットで28ｃｍ、柱痕跡は径8～12ｃｍの円形である。

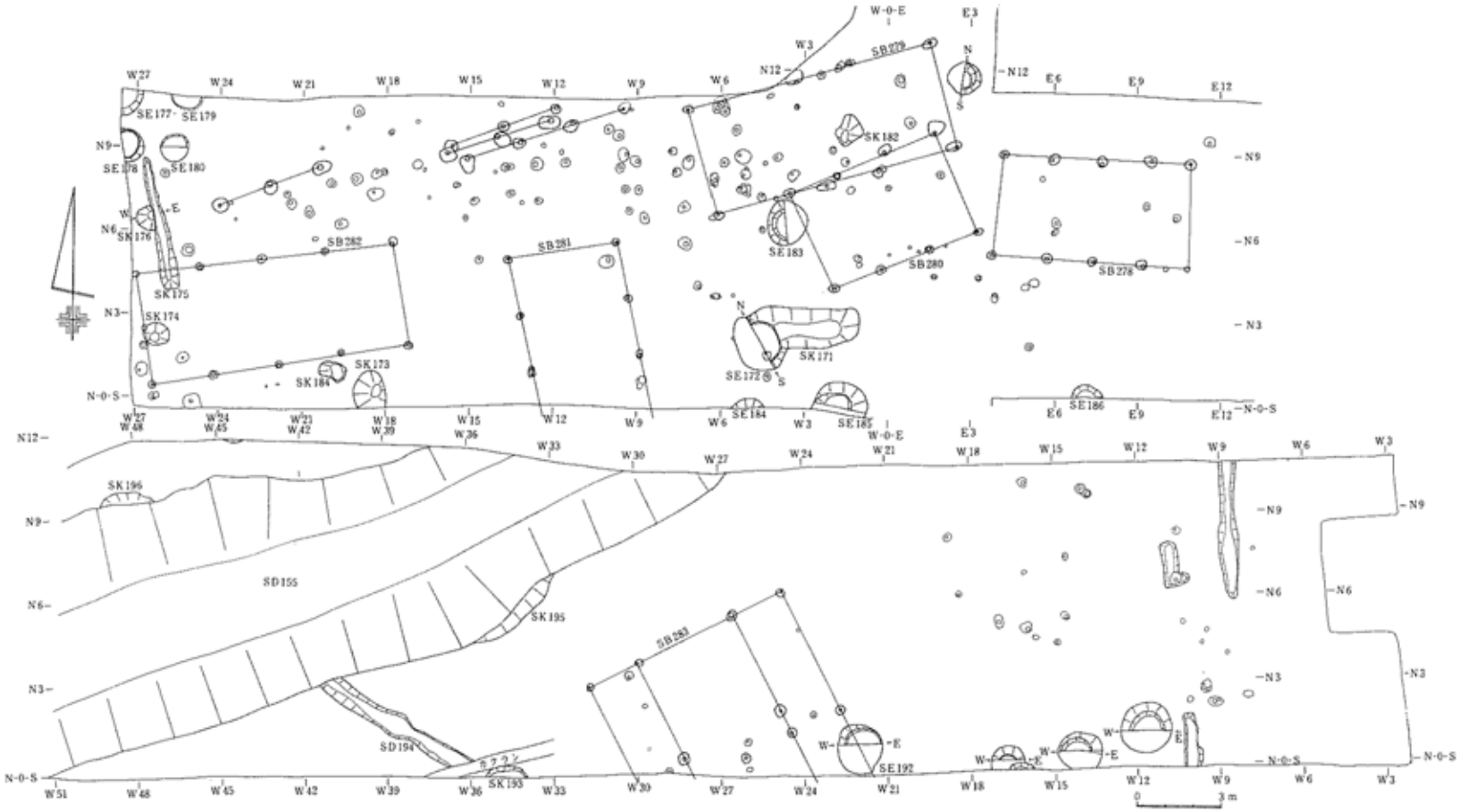
｛ＳＢ282建物跡｝桁行4間×梁行1間の東西棟である。ＳＫ174・175と重複するが前後関係は不明である。建物総長は桁行が9.3m、梁行が3.8～4.0m、桁行の柱間は2.2～2.4mである。柱穴は長軸径25～40ｃｍ、短軸20～35ｃｍの不整楕円形を基調とし、深さは北東隅のピットで43ｃｍ、柱痕跡は径10～18ｃｍの円形である。

＜西区＞

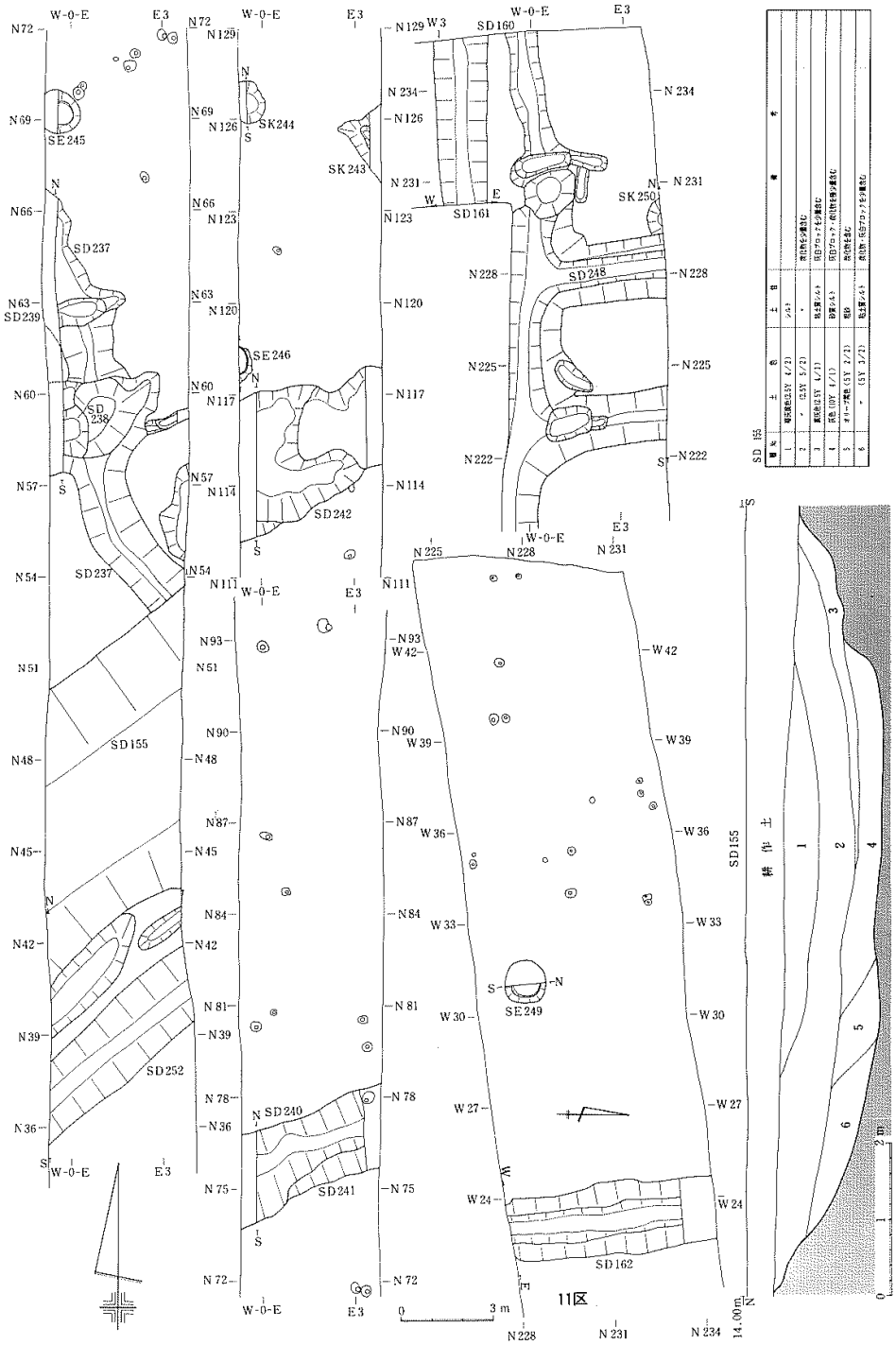
掘立柱建物跡1棟、井戸5基、溝3条、土壙5基、ピット多数が地山上面で確認された。整地層は残存していない。2・3区のＳＤ65から分流する大溝ＳＤ155が調査区西半分に、西南西－東北東の方向に認められる。遺構の分布密度は稀薄である。

掘立柱建物跡

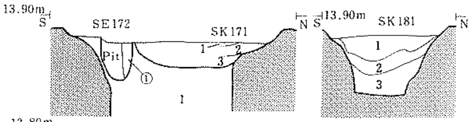
｛ＳＢ283建物跡｝桁行2間以上×梁行1間で東西に廂を持つ南北棟である。建物総長は



第18図　9区遺構平面図



第19図　10・11区遺構平面図・断面図



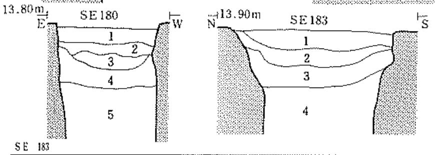
SE 172・SK 171

層No	土色	土性	備考	
SK171 1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	オリーブ褐色シルトブロック・炭化物を含む	人為堆積
2	〃 (10YR 3/1)	粘土質シルト	褐色シルトブロック・炭化物を含む	
3	黄灰色(2.5Y 4/1)	シルト	シルトブロックを少量含む	
Pit	黒褐色(10YR 3/2)	〃	炭化物を少量含む	掘り方埋土
SE172 1	オリーブ黒色(5Y 3/1)	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む	

① 柱痕跡

SK 181

層No	土色	土性	備考	
1	褐灰色(10YR 4/1)	シルト	炭化物・にぶい黄褐色シルトブロックを含む	人為堆積
2	黒色(2.5Y 2/1)	〃	暗灰黄色シルトブロックを含む	
3	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃	シルトブロックを含む	人為堆積

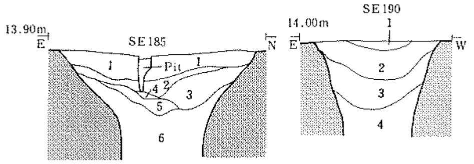


SE 183

層No	土色	土性	備考	
1	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト	炭化物・にぶい黄褐色シルトブロックを含む	人為堆積と思われる
2	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	粘土質シルト	暗オリーブ褐色シルトブロック炭化物・灰白粒を含む	
3	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	〃	黒褐色粘質シルトブロック・灰白ブロックを含む	
4	オリーブ黒色(5Y 3/1)	〃	黒褐色シルトブロックを少量含む	

SE 180

層No	土色	土性	備考	
1	暗オリーブ褐色(2.5YR 3/3)	シルト	暗灰黄色シルトブロックを含む	人為堆積と思われる
2	黄灰色(2.5Y 5/1)	砂質シルト	砂質シルトブロックを含む	
3	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	黒色シルトブロック・中粒砂を含む	
4	灰色(5Y 4/1)	粘土質シルト	灰色粘質シルトブロックを含む	
5	黒褐色(10YR 3/1)	〃	〃 含む	

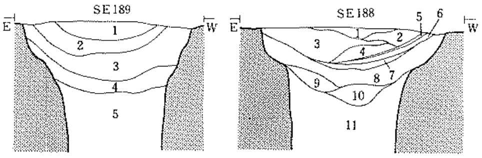


SE 185

層No	土色	土性	備考	
Pit	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	粘土質シルト	黒褐色粘質シルトブロックを含む	
1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	灰黄褐色シルトブロック・炭化物・焼土をブロックで含む	人為堆積
2	オリーブ褐色(2.5Y 4/4)	粘土質シルト	粘質シルトブロック・焼土・炭化物を含む	
3	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	炭化物・焼土をブロックで含む	
4	黄灰色(2.5Y 4/1)	粘土質シルト	シルトブロック・炭化物を含む	
5	黒褐色(2.5Y 3/1)	〃	炭化物・粘質シルトブロックを含む	
6	黒色(2.5Y 2/1)	〃		

SE 190

層No	土色	土性	備考	
1	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	シルト	炭化物・灰白粒を含む	自然堆積
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	〃	
3	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	粘質シルトブロックを含む	
4	オリーブ黒色(7.5Y 3/1)	〃		

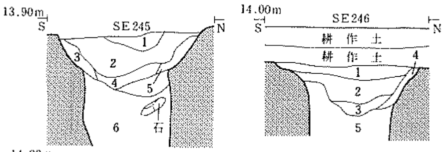


SE 189

層No	土色	土性	備考	
1	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	シルト	炭化物・灰白粒を含む	自然堆積
2	黒褐色(2.5Y 3/2)	〃	シルトブロックを含む	人為堆積
3	〃 (10YR 2/3)	〃	炭化物を含む	自然堆積
4	〃 (2.5Y 3/1)	粘土質シルト		
5	オリーブ黒色(5Y 3/1)	〃		

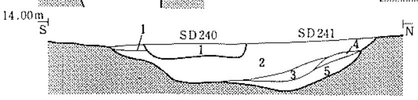
SE 188

層No	土色	土性	備考	
1	黄褐色(2.5YR 5/3)	シルト	暗灰黄色シルトブロック・灰白ブロックを含む	人為堆積
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃	シルトブロックを含む	
3	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	〃	オリーブ褐色シルトブロックを含む	
4	黒褐色(2.5Y 3/2)	粘土質シルト	黄褐色粘質シルトブロックを含む	
5	〃 (2.5Y 3/1)	〃	粘質シルトブロックを含む	自然堆積
6	暗オリーブ褐色(2.5Y 3/3)	〃	にぶい黄褐色スクモを含む	
7	黒褐色(10YR 2/2)	スクモ	木くず・植物の茎等を含む	
8	〃 (2.5Y 3/2)	粘土質シルト	オリーブ褐色粘質シルトブロック・スクモを含む	
9	〃 (2.5Y 3/1)	〃		
10	オリーブ黒色(5Y 3/1)	〃		
11	灰色(5Y 4/1)	〃		



SE 245

層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	炭化物・地山ブロックを含む	
2	褐灰色(10YR 4/1)	〃	炭化物・地山ブロックを多量に含む	
3	黄褐色(2.5Y 5/3)	〃	2層の主体をブロック状に多量に含む	
4	黒色(10YR 2/1)	粘土質シルト	地山ブロックを少量含む	
5	暗灰黄色(2.5Y 5/2)	〃	粘質シルトブロックを多量に含む	全体にしまりがなくボソボソしている
6	灰色(10Y 4/1)	〃	粘質シルトと5層の主体の土が層状に堆積 グライ化	

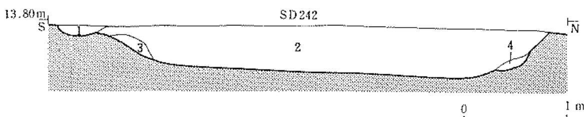


SD 240・241

層No	土色	土性	備考	
SD240 1	褐灰色(10YR 4/1)	シルト	5層の砂質シルトをブロック状に含む	
SD241 1	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	粘土質シルト	砂を層状に含む	水流の跡
2	〃 (2.5Y 5/2)	砂質シルト	4層の主体の土を薄く層状に含む	
3	黒褐色(7.5YR 3/2)	粘土質シルト	砂・スクモを多量に含む	
4	灰褐色(7.5YR 5/2)	〃		
5	灰黄色(2.5Y 6/2)	粘土		

SE 246

層No	土色	土性	備考	
1	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト	炭化物を少量含む	自然堆積
2	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	〃		
3	黒褐色(10YR 3/1)	粘土質シルト		
4	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト	シルトを含む	
5	〃 (〃)	〃	シルトブロックを多量に含む	人為堆積

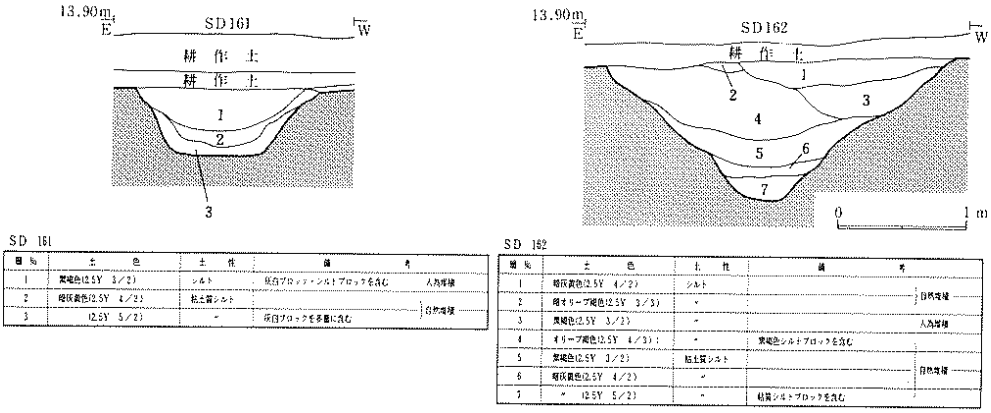


SD 242

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 3/2)	シルト	炭化物を微量含む
2	〃 (10YR 3/1)	粘土質シルト	炭化物・地山ブロック・焼土を含む
3	〃 (〃)	〃	地山ブロックを多量に含む
4	にぶい黄色(2.5Y 6/3)	シルト	灰白色火山灰ブロックを多量に含む

第20図　9・10区遺構断面図

第21図　10・11区遺構断面図



第22図　11区遺構断面図

桁行が 6.4m以上、梁行が 3.8m、柱間は身舎の桁行で 3.8m、廂の東側柱列で 4.7m、北側で 2.0mである。柱穴は径 30～50ｃｍの円形を基調とし、深さは北東隅のピットで 59ｃｍ、柱痕跡は径 8～14ｃｍの円形である。

Ｊ．10 区

井戸 3 基、溝 12 条、土壙 6 基、少数のピットが地山上面で確認された。溝以外の遺構は調査区南側に集中する。整地層は残存していない。9 区のＳＤ155 の延長が調査区の南側にあらわれ、このすぐ南を平行するＳＤ252 の南には遺構は認められない。ＳＤ155 の北には東西方向を基本とした溝が数条認められる。さらに調査区中央付近から南北溝ＳＤ160 が調査区北端まで長く延び、北端でＳＤ247・248 と合流する。

Ｋ．11 区

井戸 1 基、溝 2 条、ピットが地山上面で確認された。1 区の東延長部にあたり、調査区の西側 1 区寄りに遺構が稀薄ながら分布する。調査区東側には南北溝ＳＤ161・162 が 21 mの間隔をおいて平行する。

区	No.	形態	大きさ	深さ	断面	下部の径	切合い	備考
1区	59	円	径1.7	1.75以上	逆円錐			
	62	楕円	1.1×1.0	2.8	o-H状	0.75		
	63	楕円	1.5×1.3	1.8以上	o-H状	1.1		
3区	68	不整楕円	1.2×1.0	1.5以上	o-H状（弱い）	0.9		
	69	不整楕円	1.7×1.3	1.5以上	o-H状（大きく開いた）	0.9		
4区	74	不整楕円	2.2×1.9	3.6以上	o-H状（上部に段あり）	1.0		
	75	円	径1.2	1.05以上	o-H状（片側に弱い段あり）	0.8		
	76	円	径1.7	2.6	o-H状（弱い段あり）	1.0		
	77	不整楕円	1.6×1.5	1.6以上	o-H状（弱い）	1.0		
	78	不整楕円	1.4×1.3	3.0	o-H状（弱い）	1.1		
	79	不整楕円	2.5×2.3	1.6以上	o-H状（上部に段あり）	(1.1)		
	80	楕円	1.3×1.2	1.3以上				壁面垂直に深い
	81	不整楕円	1.5×1.3	1.9以上	o-H状（上部に段あり）	0.8		
	82	楕円	1.4×1.2	1.5以上	o-H状（弱い）	1.0		
	83	楕円	2.3×1.9	2.0以上	o-H状（片側に弱い段あり）	1.7		
	84	楕円	1.9×1.7	2.5	〃	1.0		
	95	不整楕円	2.7×2.4	1.8以上	o-H状（大きく開く）	1.0		
	97	楕円	1.7×1.5	2.8以上	o-H状	1.1	SD98より古い	
	98	楕円	2.3×2.1	2.5	o-H状（大きく開く）	1.3	SD99, SK101より古い, SE97, SD102より新しい	
	100	楕円	2.4×2.1	1.5以上	〃	1.0	SD99より古い	
5区	109	円	径1.5	1.6以上	o-H状（上部に段あり）	0.9		
	112	不整楕円	2.5×2.2	1.8以上			SE115より新しい	上部オーバーハング
	113	楕円	2.4×2.2	1.9以上	o-H状（大きく開く）	1.0		
	115	円	径1.8	1.9以上	o-H状（弱く開く）	1.3	SD125より新し, SE112より古い	
	119	円	径1.9	1.6以上	〃	1.5	SE277と重複	
	139	円	径1.1	1.8以上	o-H状		SD138より古い	
	140	(楕円)	(長1.7)	1.6			〃	
6区	151	(円)	(径1.0)	2.4	o-H状（弱く開く）	0.8		東半分が調査区外
	152	(円)	(径1.5)	3.0				隧口部直下でオーバーハング
8区上	206	円	径2.0	1.00以上	o-H状（上部に段あり）	1.1	SD205より新しい	
	207	楕円	1.4×1.3	0.80以上	〃	0.8		
	212	円	径2.2	1.1以上	o-H状（大きく開く）	0.9		
	213	円	径1.8	1.4以上	o-H状（弱く開く）	1.2		
	214	円	径1.7	1.00以上	o-H状（大きく開く）	0.7		
	215	円	径1.2	〃	o-H状（上部に段あり）	1.1		
	220	不整楕円	3.3×2.8	1.1以上	o-H状（大きく開く）	0.9	SD221より新しい	
	223	不整楕円	3.5	1.4以上	〃	1.8	SK222より古い, 224より新しい	
8区下	219	円	径1.8	0.75以上	o-H状	1.1		
	221	楕円	2.4×2.0	1.1以上	o-H状（大きく開く）	0.7	SE220より古い	
	225	楕円	2.5×2.2	1.5以上	〃	0.9		
	232	円	径1.5	1.20以上	o-H状（上部片側に段あり）	1.1	SD233より新しい	
	236	円	径1.7	1.00以上	〃	1.1		
8区不明	164	円	径1.5	1.25以上	o-H状	0.8		
	165	楕円	1.8×1.6	1.05以上	〃	1.1		
	166	円	径1.5	〃	o-H状（上部片側に段あり）	0.9		
	168	円	径1.7	0.75以上	o-H状（上部に段あり）	0.9		
9区東	172	不整楕円	2.2×1.8	〃	o-H状（大きく開く）	1.2	SK174より古い	
	177	(円)	(径1.8)	0.95以上	o-H状（上部に段あり）			½のみ確認
	178	円	径1.2	1.00以上	o-H状（弱く開く）			
	179	円	径1.0	0.85以上				上部がオーバーハング
	180	円	径1.0	1.60以上				壁面垂直に深い手掘り
	183	楕円	1.6×1.4	0.85以上	o-H状	1.1	SK238と重複	
	184							詳細不明
	185	円	径2.0	0.95以上	o-H状（大きく開く）	0.8		
9区西	188	円	径1.8	1.1以上	〃	1.0		
	189	円	径1.6	1.3以上	o-H状	0.7		
	190	円	径1.2	1.00以上	o-H状（緩やかに開く）	0.7	SK191より古い	
	192	円	径1.3	〃	o-H状（上部に段あり）	1.4	SK238と重複	
10区	150	円	径1.0	0.65以上	o-H状（弱く開く）	0.7		黒褐色粘質シルト(自然)
	245	円	径1.5	1.05以上	o-H状	0.8		
	248	楕円	1.4	0.65以上	〃	0.8		
11区	249	円	径1.4	1.2以上	o-H状（弱く開く）	0.8		

第１表　井戸属性表（単位：m）

区	No.	幅	長さ	深さ	方向	平面形態	堆積土	切り合い	備考
1区	53	0.2～0.3		0.05～0.1	東北東－西南西		褐灰色の粘質シルト		
	56	0.3		0.04～0.08	南－北				
	57	0.4		0.17	南－北				ＳＤ５６の西隅
	60	0.4～0.3		0.13～0.2	北側に延びる	「L」字状を呈する	褐灰色のシルト		
2区	65	北8 南19		1.6	南－北		下部は水成堆積（粘土と砂）		ＳＤ６７と東に延びる２本の溝と合流
	67	4.5～5		1.8	南－北		下部は水成、上部は人為		ＳＤ６５と東に延びる溝と合流
3区	70	1.3～		0.8	南－北		上部は人為	SD73より古い	
	71	0.9		0.33		「J」字状を呈する	ラミナ状に堆積した砂	SD72より新しい	
	72	1.8～2.2		1.2		「L」字状を呈する	粘質シルト、シルト（自然）	SD73・SD155より古い	北東隅でＳＤ７３と合流
	73	3.3以上		1.7	西－東	「L」字状を呈すると推定	シルト、粘質シルト（自然）		
4区	87	1.6		0.5	東－西		下部は自然、上部は人為	SD92より新しい	
	92	1.2～1.7		1.0	〃		下部は自然（水成の痕跡） 上部は人為	SD87より古い	
	96	0.35～0.6	3.0	0.11	〃		黒褐色シルト（自然）	SX94より新しい	
	99	0.7～0.9		0.4	〃		人為	SE98・100より新し, SK101より古い	
	102	0.6～1.1		0.15	〃		灰黄色砂質シルト（自然）	SE98より古い	
	103	0.9～1.0		0.2	〃		灰黄色、暗黄褐色砂質シルト（人為）		
	104	0.2～0.4		0.07	南－北	北端が東に屈曲			

第２表(1)　溝属性表（単位：m）

区	No	幅	長さ	深さ	方向	平面形態	堆積土	切り合い	備考
5区	105	0.3～0.5		0.25	東－西		灰黄褐色砂質シルト（人為）		
	106	0.9		0.7	東－西		上部はにぶい黄褐色シルト（人為） 下部は水成堆積	SD108より古い	
	107	1.3		0.7	〃		上部は灰黄褐色粘土（人為） 下部は水成堆積	SD108より古い	ＳＤ１０６の北６ｍを平行
	108	0.6～1.1	12.3	0.5	南－北		下部はグライ化	SD106・1072より新しい	ＳＤ１０６・１０７と直交
	110	0.7～0.9		0.1	東－西		水成作用		底面に60～80cmの間隔で 40cm×20cm×４cmの隅丸長方形の窪み
	111	1.0～1.2		0.4	〃		〃		
	118	6.5(北側東壁)		1.4	西→北→東	西→北→東と屈曲している	下部は水成作用	SE139・1404より新しく、SX120・1214より古い	
	122	0.5～0.8		0.4	東－西				
	125	0.9～1.3		0.5	〃		上部は人為 下部はグライ化	SE108・SK1174より古い	ＳＤ１０６の南７ｍを平行
	126	0.3～0.5		0.1	南－北		暗灰黄色砂質シルト（人為）		
	128	0.2～0.5		0.16	南－西	「L」字状を呈する	底面に最大６cmの厚さで 炭化物が堆積		
	137	0.2～1.0		0.12	南－北	不整形			
6区	141	1.5～1.7		0.5	北東－南西		底面に水流の痕跡		南端が壊されている（水田耕作の為）
	142	3.0～4.1		0.9	東－西		下部に　〃	SD150・SK149より新しい	
	143	1.4～1.8		0.3	北東－南西		中位に炭化物と褐色粘質シルトの互層	SD253より新しい	
	147	18以上		1.2以上	〃		下部に水流の痕跡		
	148	28		2.2以上	東－西		下部に水流の痕跡		
	150	2.3～5.0		1.3	南－北	不整	水流の痕跡、底面や壁の形整が凹凸	SD142・SK149・1584より古い	河川跡か？
	253	最大20			東－西	不整		SD143より古い	〃
7区	144	約5			北東－南西				確認のみ
	145	7.5		1.9	南－北（やや西）				
	146	1以上			東－西				確認のみ
	254	約0.3			南－北（やや東）				〃
	255	約4～6			北東－南西				〃
	256	6以上			〃				〃
8区上	170	0.8～1.1		0.3	東－西		黒褐色のシルト（人為）		
	205	1.5		2.0	〃		下部は水成堆積、上部は人為	SE206より古い	
8区下	208	0.2～0.4		0.2	南－北		黒褐色のシルト（人為）		
	217	0.25～0.4		0.17	〃				ＳＤ２０８の東を平行
	218	0.6～0.8		0.15	東－西				
	226	0.6～0.8		0.3	〃		自然	SD227・SK235と重複	東側で壁に段をもつ
	227	0.7～1.0		0.10	〃	西側でやや南に屈曲	〃	SD226と重複	
	228a	1.0		0.4	北東－南西		〃	SD228bより新しく、SD229aより古い	
	228b	0.7以上		0.35	〃		〃	SD228a・229aより古い	
	229a	1.8		0.55	東－西		〃	SD228・229bより新しい	壁に段をもつ
	229b	2.2		0.55	〃		〃	SD228bより新しく、SD229aより古い	
	230	0.9		0.45	〃		〃	SK231・SE232より古い	
8区不明	154	11以上		1.5以上	東－西		下部に水流の痕跡あり		
	167	0.5～0.8		0.1	北西－南東		細砂が堆積、水流の痕跡あり		
	169	0.4～0.7		0.3	東－西		砂を含むシルト（自然）		
	203	1.1～1.4		0.2	〃		底面に厚さ４cmの炭化物層		
	204	1.1～1.4		0.1	〃				ＳＤ２０３の南12mに位置
9区西	155	最大8.7		2以上	北東－南西		下部は砂が厚く堆積、水流の痕跡あり	SK194・195より新しい	西側がＳＤ６５と合流
	163	0.5～0.8	5以上	0.2	南－北				
	194	0.4～0.9	6以上	0.11	北西－南東			SD155より古い	
10区	155	7.6		1.3	北東－南西			SD251より新しい	９区より続く
	160	1.8	106以上	0.7	南－北		底面に凹凸が激しい		北端でＳＤ２４７・２４８と合流
	237	1.5～1.8	13.6以上	0.3	北西－南東		砂が堆積し水流の痕跡あり	SD238・239より新しく、SD155は不明	河川跡か？
	238	2.8	4以上	0.6	東－西		黄褐色～灰オリーブ色シルト、砂質シルト（自然）	SD237より古い	
	239	1.2	2.8以上	0.4	〃		暗灰黄色シルト（自然）	〃	
	240	1.0		0.14	北東－南西		褐灰色シルト（人為）		ＳＤ２４１の堆積土に上部に位置
	241	2.6		0.5	〃		ラミナ状の砂を含み、水流の痕跡あり		
	242	2.7～4.7		0.5	〃		黒褐色粘質シルト（人為）		底面に凹凸あり
	247	1.7		0.6	東－西				調査区北端でＳＤ１６０と合流
	248	1.9～2.1		0.8	〃			SR250より新しい	〃
	251	最大1.5		0.3	〃	２条に別れる		SD155より古い	底面のみ残存
	252	3.3		1.3	〃		砂がラミナ状に堆積、水流の痕跡あり		
11区	161	1.6～1.8		0.55	南－北				ＳＤ１６０と平行
	162	2.1～2.5		1.1	〃				ＳＤ１６１の西21mの所を平行

第２表(2)　溝属性表（単位：ｍ）

No.	区	長さ	幅	深さ	平面形態	堆積土	切り合い	備考
51	1			0.07	不明			
52	〃	0.5	0.4	0.05	円形			
54	〃	1.5	1.2	0.2	隅丸長方形	褐色、粘土		
55	〃	0.6	0.4	0.08	〃	黒褐色シルト		
58	〃	1.3	0.7	0.15	不整楕円	〃		
61	〃			0.06	不明			北側が調査区外
64	〃			0.4				南側が　〃　、周囲がカクランされている
85	4	径 0.9		0.2	円形	黒褐色、暗褐色シルト、砂		ＳＤ１０３の北側
86	〃	0.8	0.7	0.12	不整楕円		SK94より新しい	ＳＤ９６の南側
101	〃	1.2以上？		0.5	〃 ？	人為	SE98・SD99より新しい	
127	〃	径 1.0		0.7	円形	灰褐色シルトとオリーブ黒色粘土（人為）		ＳＤ８７・９２の北西側
117	5	3.0	0.9	0.2	隅丸長方形			ＳＤ１２５の北側（これより新しい）
120	〃	1.6	1.3	0.15	〃	暗灰黄色砂質シルトと厚さ１～２cmの炭化物層との互層	SD118より新しい	
121	〃	2.2以上	2.2	0.6		底面に厚さ５cmの炭化物層	〃	
129	〃	1.1	0.7	0.13	楕円	〃　２cm　〃	SK124より古く、SK130より新しい	
131	〃	3.7	3.2	0.2	〃			
138	〃		1.5	0.3				ＳＤ１２８の東側（半分は調査区外）
149	6	径 2.7以上？		1.0	円形 ？	黄褐色～暗褐色の砂質シルト	SK153・SD142より古く、SD150より新しい	西側が調査区外
153	〃	径 1.2以上？		0.6	〃	厚さ１～２cmの炭化物層（上部）	SK149・SD150より新しい	〃
209	8上	2.1	0.8	0.7	隅丸長方形	薄く層状に炭化物層を含む		
210	〃	2.2	0.7	0.15	〃	黒色粘質シルト		ＳＫ２０９の脇
211	〃		0.7以上	0.6	不明	黒褐色シルト		
222	〃	0.8以上	0.6以上	0.6以上	不整楕円？	薄く層状に炭化物層を含む	SE223・SK224より新しい	
224	〃	9.8	1.2	0.5以上	方形 ？	自然堆積	SK222・SE223より古い	
231	〃	4.0以上	1.9以上	0.4以上	不整楕円？	薄く層状に暗褐色スクモを含む	SD230より新しい	
216	8下	2.1	1.4	0.12	隅丸長方形	黒褐色粘質シルト		
233	〃	1.2	0.9	0.15~0.2	楕円	黒褐色シルト		
234	〃	〃	〃	〃	〃	〃	重複するが切り合いは不明	
235	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
198	8不明	1.5以上	0.7	0.35	隅丸長方形	暗灰黄色～褐色シルト（人為）		底面は凹凸が激しい
199	〃	2.6	0.7	0.25	長方形		SK200より新しい	
200	〃	径 2.6以上		0.3	円形 ？			
201	〃	3.2以上	1.1	0.4	長方形	にぶい黄褐色～褐灰色の粘質シルト		
202	〃	4.2以上	0.9	0.3	〃	〃　～黒褐色のシルト・粘質シルト		
171	9東	4.0	1.5	0.5	隅丸長方形	人為	SE172より新しい	
173	〃	1.3以上	1.2	0.3	楕円	灰黄褐色シルト（人為）		底面は凹凸が激しい
174	〃	1.0	0.75	0.13	〃	黒褐色シルト（〃）	SB282と重複	
175	〃	4.8	0.3~0.7	0.4	長方形	灰黄褐色シルト（〃）	SK176より古くSB282とは不明	
176	〃	1.0	0.9	0.3	楕円	灰黄褐色、灰褐色シルト（〃）	SK175より新しい	
181	〃	径 1.2		0.7	円形	灰黄褐色～黒色シルト（〃）		井戸の可能性もあり
182	〃	1.2	1.0	0.14	不整形	黒褐色シルト	SB279と重複	
186	〃	径 1.2		0.6	円形	にぶい黄褐色～黒褐色シルト（人為）		
187	9西	1.9以上	0.4~0.7	0.8	不整長方形			
191	〃	径 1.0以上			円形 ？		SE190より新しい	
193	〃	径 1.6以上		0.6	〃	にぶい黄色～黒褐色シルト（人為）		底面は凹凸が激しい
195	〃	径 3.9以上			〃	灰黄褐色～黒褐色シルト（自然）	SD155より古い	
196	〃	1.9以上	1.5以上	0.6以上	不整形	黒褐色～灰色シルト（自然）	SD155より古い	
197	〃	1.7	0.9	0.6	「L」字状	褐灰色～黒褐色粘質シルト（人為）		
156	10	径 1.8		0.25	円形	黒褐色～褐灰色粘質シルト（自然）		
157	〃	径 2.1以上		0.4	円形 ？	黒褐色粘質シルト（自然）		
158	〃	径 5.7以上		1.0	〃	黒褐色～灰黄褐色シルト・粘質シルト		
243	〃	2.3以上	1.6以上	0.2	不整形？	暗灰黄色シルト（自然）		
244	〃	径 1.4		0.3	円形 ？	黒褐色～黄褐色シルト・粘質シルト（自然）		
250	〃	径 1.2以上		0.3	〃	オリーブ褐色シルト（自然）	SD248より古い	

第３表　土壙属性表（単位：m）

2．発見された遺物

発見された遺物には、土師器、須恵器、中世・近世の陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品、木製品、土製品がある。量は非常に少なく、そのほとんどが細かい破片である。また木製品は、すべて井戸・溝から出土している。

A．陶磁器（第 23 図）　陶磁器には無釉陶器、施釉陶器、染付磁器がある。

＜無釉陶器＞15・16・23 は陶器で、15 は甕？の体部破片、16 は摺鉢、23 甕の底部で内面に釉が認められる。17～22 は瓦質土器で、17 は火鉢で口縁直下に菊文が型押しされている。これ以外は表面に炭素が吸着され黒色を呈す。18・20 は摺鉢、19 は鉢、21 は香炉で雷文と渦文が型押しされ、外面に液状の付着物が認められる。

＜施釉陶器＞5 は唐津の皿、6～12・13 は美濃で、6 は折縁菊皿、7 は鉄釉を施した天目茶碗、10 は内面だけに、また 13 は外面上部と内面にそれぞれ鉄釉の認められる天目茶碗の底部と思われる。8・9・11・12 は全面に灰釉を施した皿で、8・9 には内面底部に菊の印花が押印されている。

＜染付磁器＞1～3 は中国産の皿・鉢、4 は国内産の仏飯器である。

＜土器＞土師器、須恵器の細かな破片が少量出土している。24 は土師器の底部である。また 25 は土師質土器の皿である。

B．金属製品（第 24 図）

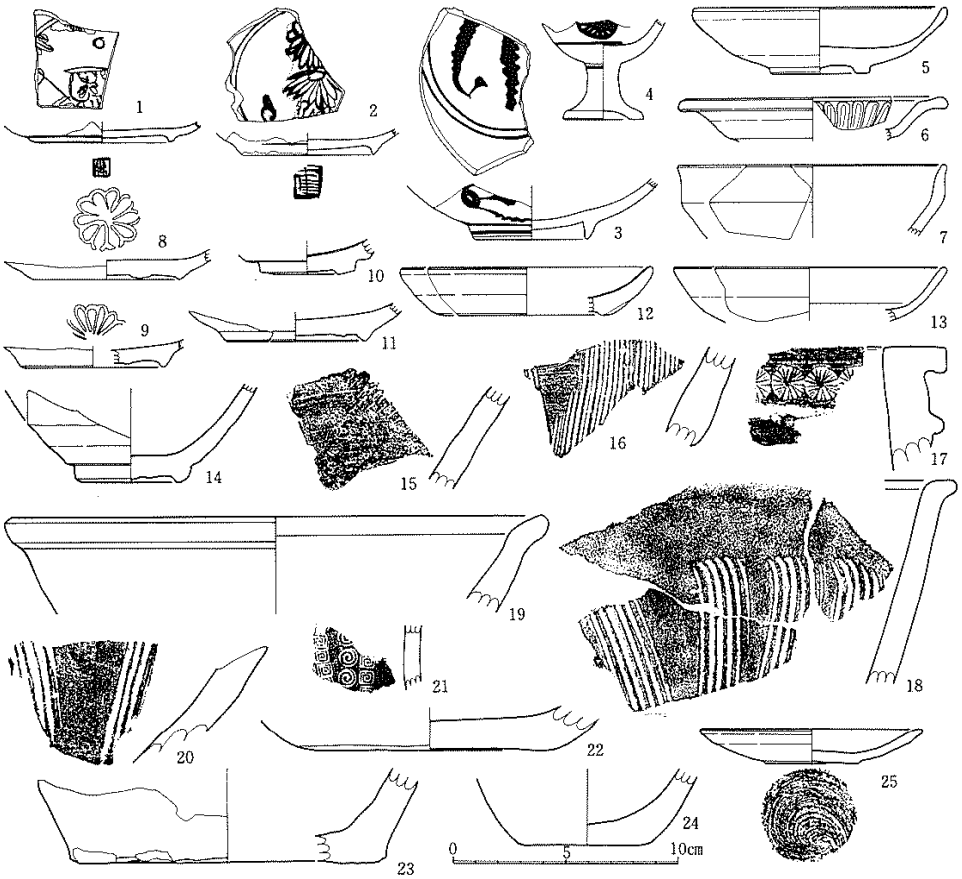
＜鉄製品＞5・6 は釘であるが、7・8 は不明である。7 の上部には木質が付着している。

＜銅製品＞1・2 はキセルの吸い口で、1 には『吉』の字が彫り出されている。また竹製の羅宇の一部も残存している。4 は仏具の器？の底部もしくは口縁部であろう。

C．古銭（第 24 図）洪武通宝・永楽通宝・政和通宝・景徳元宝・元符通宝・紹聖元宝が出土している。

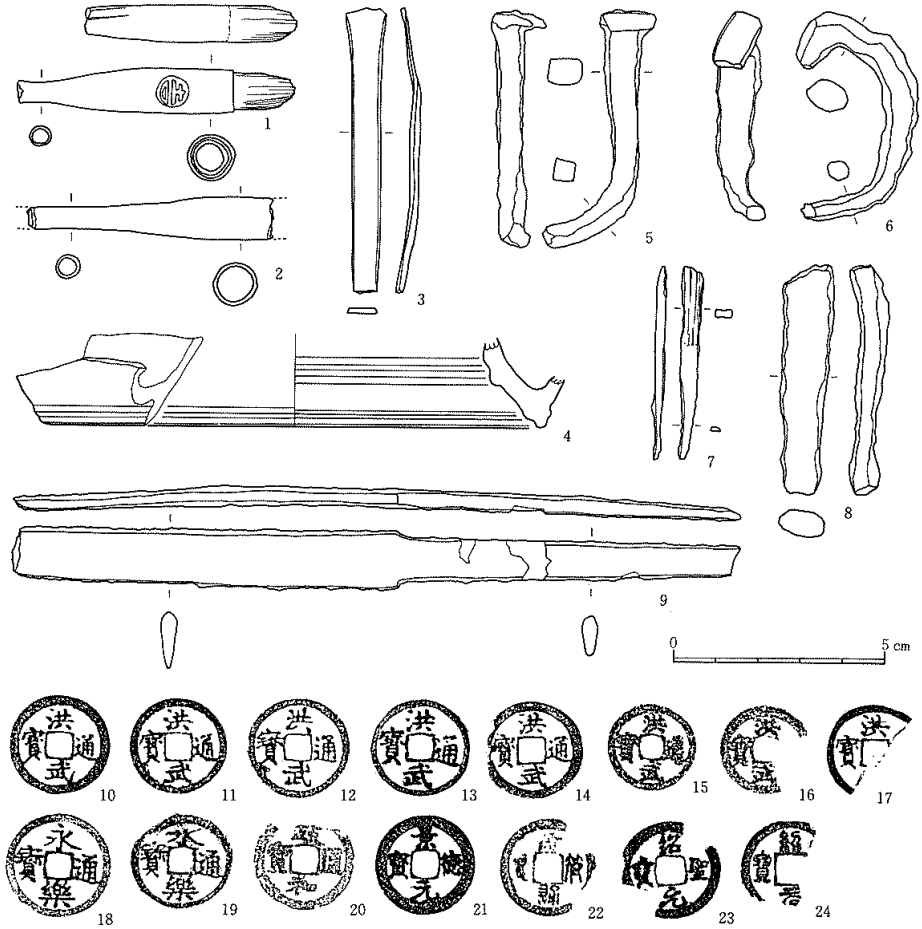
D．石製品（第 25～27 図）第 25 図 1 は硯で外面に液状の付着物が認められる。2～5 は砥石であるが、3 は珪化木、4 は大きな粘板岩の破片、また 5 は凝灰岩の礫をそれぞれ素材としている。第 26 図は石臼で、1 は下臼、2 は上臼である。1 は 4 区のピットから出土しており、柱の礎板として用いられていた。第 27 図 1 は茶臼の上臼である。2 は両面、特に内面にノミ痕の顕著な円形の石製品の一部である。

E．木製品（第 28・29 図）第 29 図 1～3 は底板である。1 には 7 か所の木釘穴が認められる。4 は楔である。5 は両側辺と左上部が残存しており、左側辺に木釘穴が 5 か所認められる。面桶のうち楕円形のメンパの甲板もしくは底板の可能性が考えられる。6 は 2 本の釘が残存する板材である。第 28 図 1～4 は漆器の椀である。8～10 も底部もしくは高台のみであるが椀と思われる。4 を除き内面に朱漆が施されている。4 は内外面、1～3・



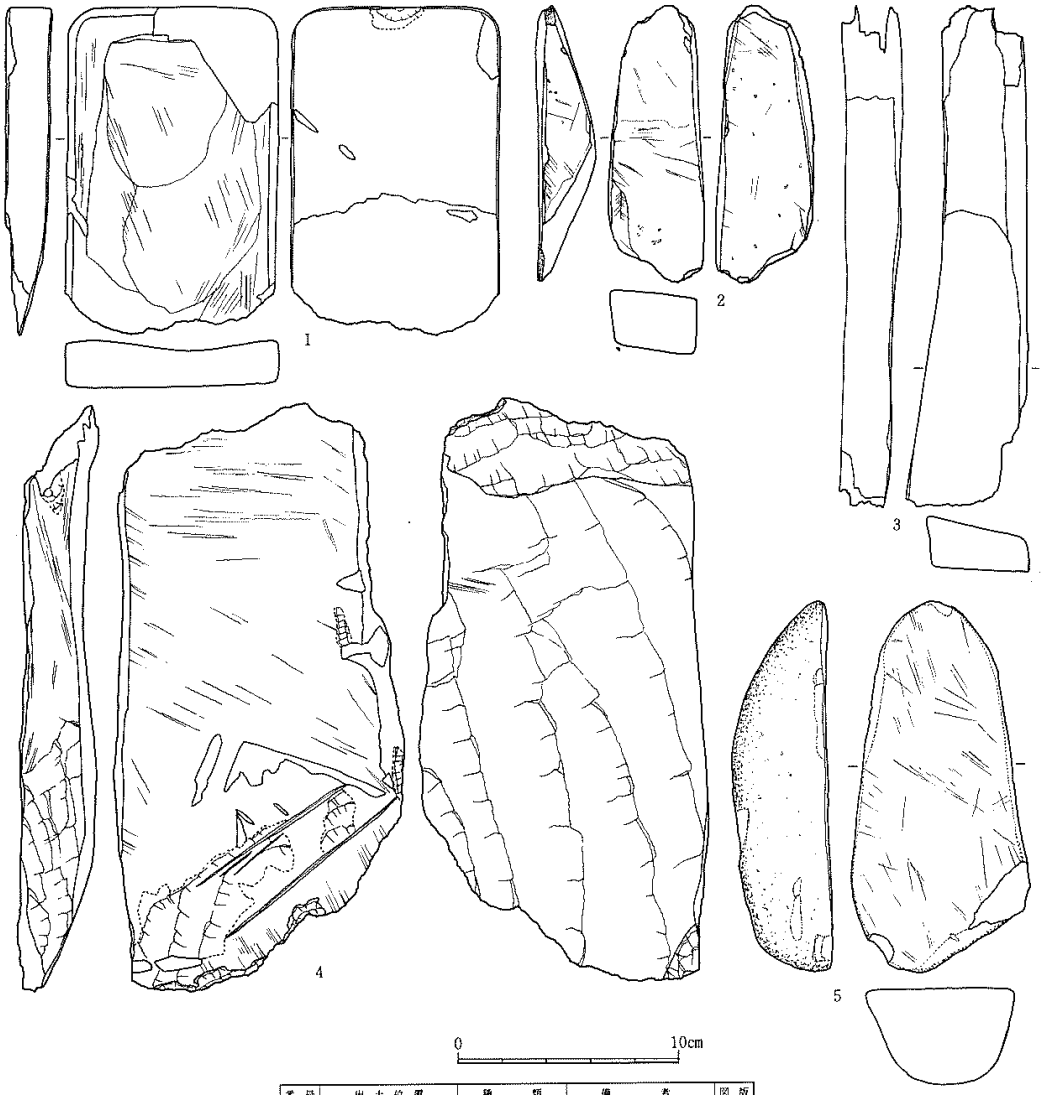
番号	出土位置	種類	備考	図版
1	8区・表土	磁器・皿？	中国産	7-1
2	4区・表土	磁器・皿？	中国産	7-2
3	4区・表土	磁器・鉢？	中国産	7-3
4	10区・表土	磁器・仏飯器	文様3単位	7-4
5	9区・SK182・堆	施釉陶器・皿	唐津	7-6
6	8区・表土	〃・折縁菊皿	美濃・灰釉	7-7
7	4区・SE83・堆	〃・天目茶碗	〃・鉄釉	7-8
8	9区東・SE185・堆	〃・皿	〃・灰釉	7-10
9	4区・SD87・堆	〃・〃	〃・〃	7-11
10	8区・確認面	〃・天目茶碗	〃・鉄釉	
11	1区・SE63・堆	〃・皿	〃・灰釉	7-12
12	4区・表土	〃・〃	〃・〃	7-9
13	8区・表土	〃・〃？	灰釉	7-13
14	1区・SE63・堆	〃・天目茶碗	美濃・鉄釉	7-14
15	3区・SK70・堆	中世陶器・鉢？	無釉	7-15
16	〃・〃	〃・摺鉢	〃・赤褐色	7-16
17	8区・整地層中	瓦質土器・火鉢	口縁直下に菊文の型押	7-17
18	4区・表土	〃・摺鉢	内外面黒色	7-19
19	3区・SK70・堆	〃・鉢	〃	
20	8区・整地層中	〃・摺鉢	〃	
21	4区・Pit堆	〃・香炉	〃・渦文・雷文・外面に漆	7-20
22	8区・確認面	〃・鉢？	〃・底部	
23	11区・〃	施釉陶器・壺	常滑・内面灰釉	
24	6区・灰白下	土師器・壺	外面に木葉痕→ヘラケズリ・風化顕著	
25	8区・確認面	土師質土器・皿	ロクロ調整・回転糸切り	7-25

第23図　陶磁器



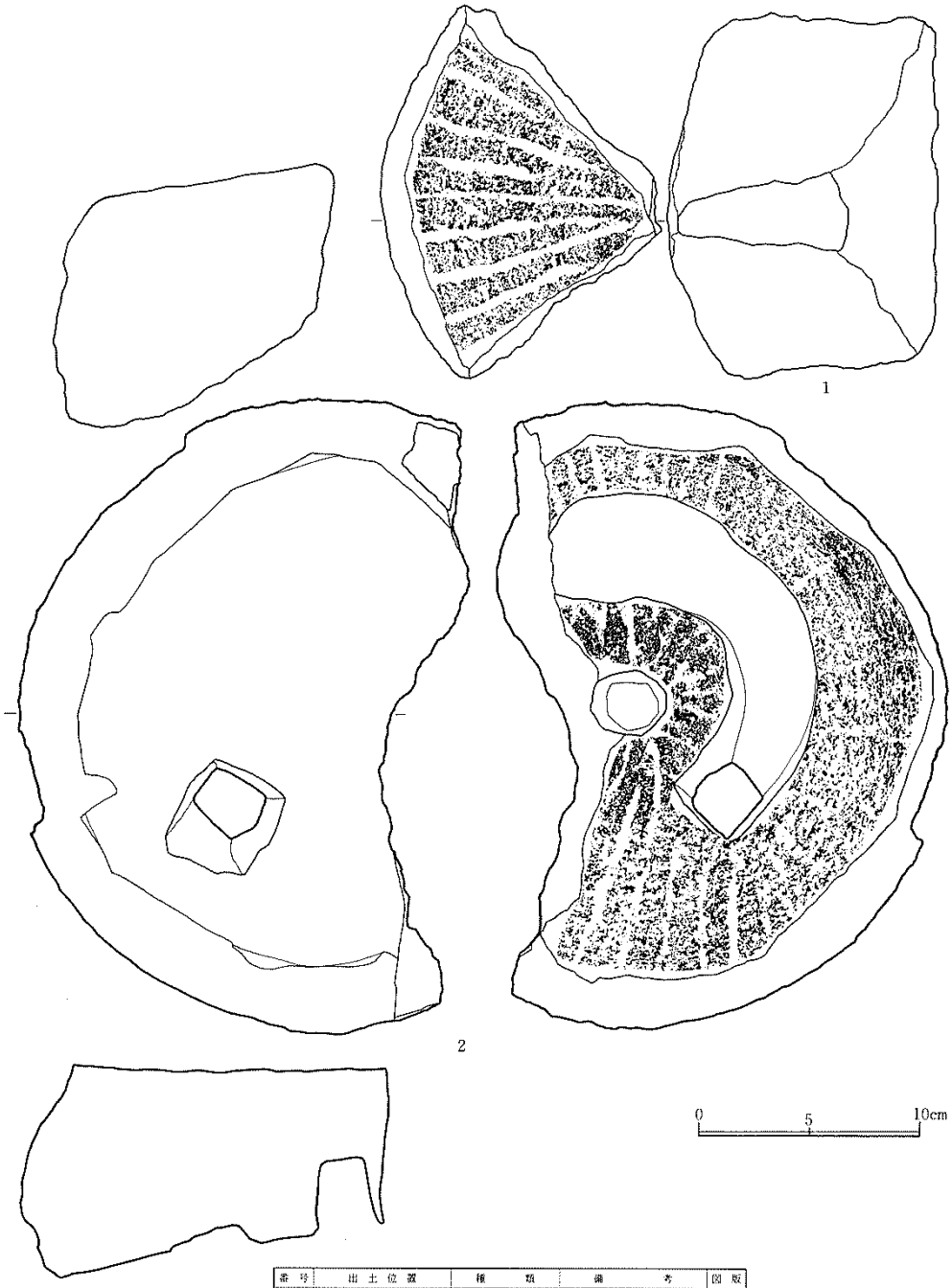
番号	出土位置	種類	備考	図版
1	10区・表土	煙管・吸い口・羅宇	「吉」	8-1
2	1区・確認面	〃　〃		8-2
3	5区・SX121・堆	銅製品・不明		8-8
4	9区・確認面	〃　・仏具？	ゆがみあり	8-3
5	4区・Pit・堆	鉄製品・釘		8-6
6	4区・SX94・堆	〃　・〃		8-5
7	4区・確認面	〃　・不明		8-7
8	8区・　〃	〃　・〃		8-4
9	8～10区・表土	〃　・小刀		
10	4区・SD87・堆	洪武通宝	明	8-14
11	8区・確認面	〃	〃	8-10
12	8区・確認面	〃	〃	8-11
13	9区東・SE185・堆	〃	〃	8-13
14	4区・SE79・堆	〃	〃	8-15
15	10区・確認面	〃	〃	8-12
16	4区・表土	〃	〃	8-17
17	〃　・〃	〃	〃	8-16
18	8区・〃	永楽通宝	〃	8-18
19	4区・Pit　堆	〃	〃	8-19
20	4区・SE79・堆	政和通宝	北宋	8-24
21	4区・表土	景徳元宝	〃	8-25
22	4区・SD87・堆	元符通宝	〃	8-23
23	4区・Pit・堆	紹聖元宝	〃	8-21
24	〃　〃　〃	〃	〃	8-22

第24図　金属製品



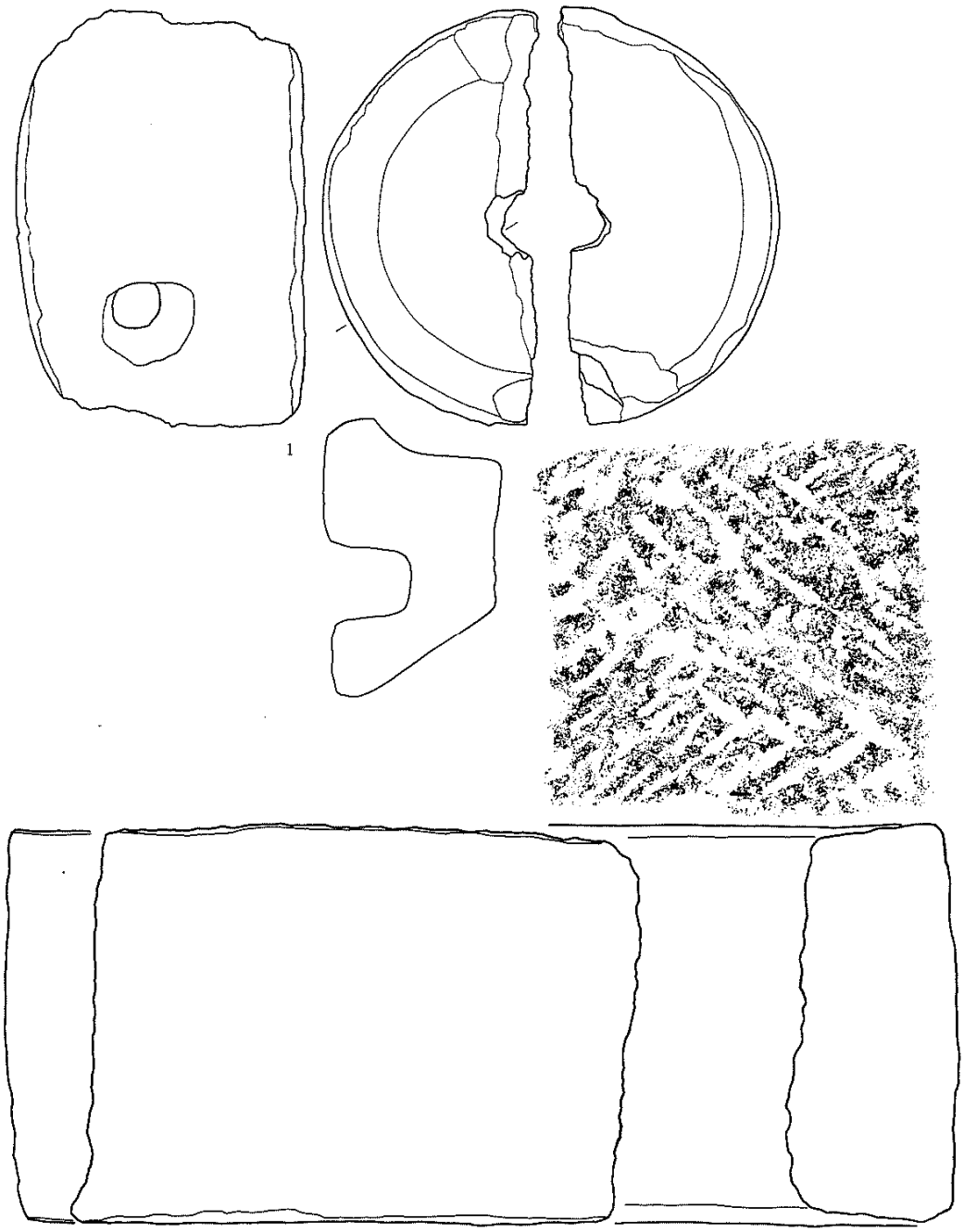
番号	出土位置	種類	備考	図版
1	3区 SD65 ・堆	硯	外面に漆付着・粘板岩	8-29
2	〃 SE63 ・堆	砥石	凝灰岩	8-30
3	5区 SX121 ・堆	〃	珪化木・線痕不明瞭	8-31
4	〃 ・ 〃 ・ 〃	〃	粘板岩	8-27
5	8区・確認面	〃	凝灰岩	8-28

第25図　石製品



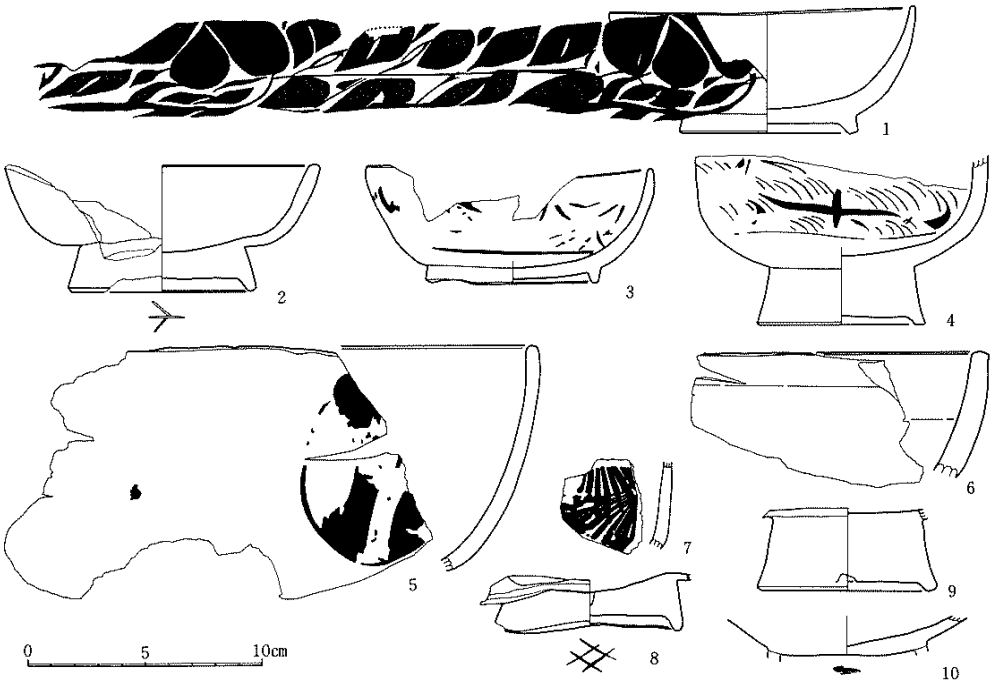
番号	出土位置	種類	備考	図版
1	4区・Pit・堆	石臼・下臼	柱穴の礎板・安山岩	9-3
2	8区・SK209・堆	〃・上臼	安山岩	9-4

第26図　石製品



番号	出土位置	種類	備考	図版
1	11区・SD162・堆	茶臼・上臼	安山岩	9-2
2	10区・SE245・堆	石製品・石塔籠？	〃	9-1

第27図　石製品



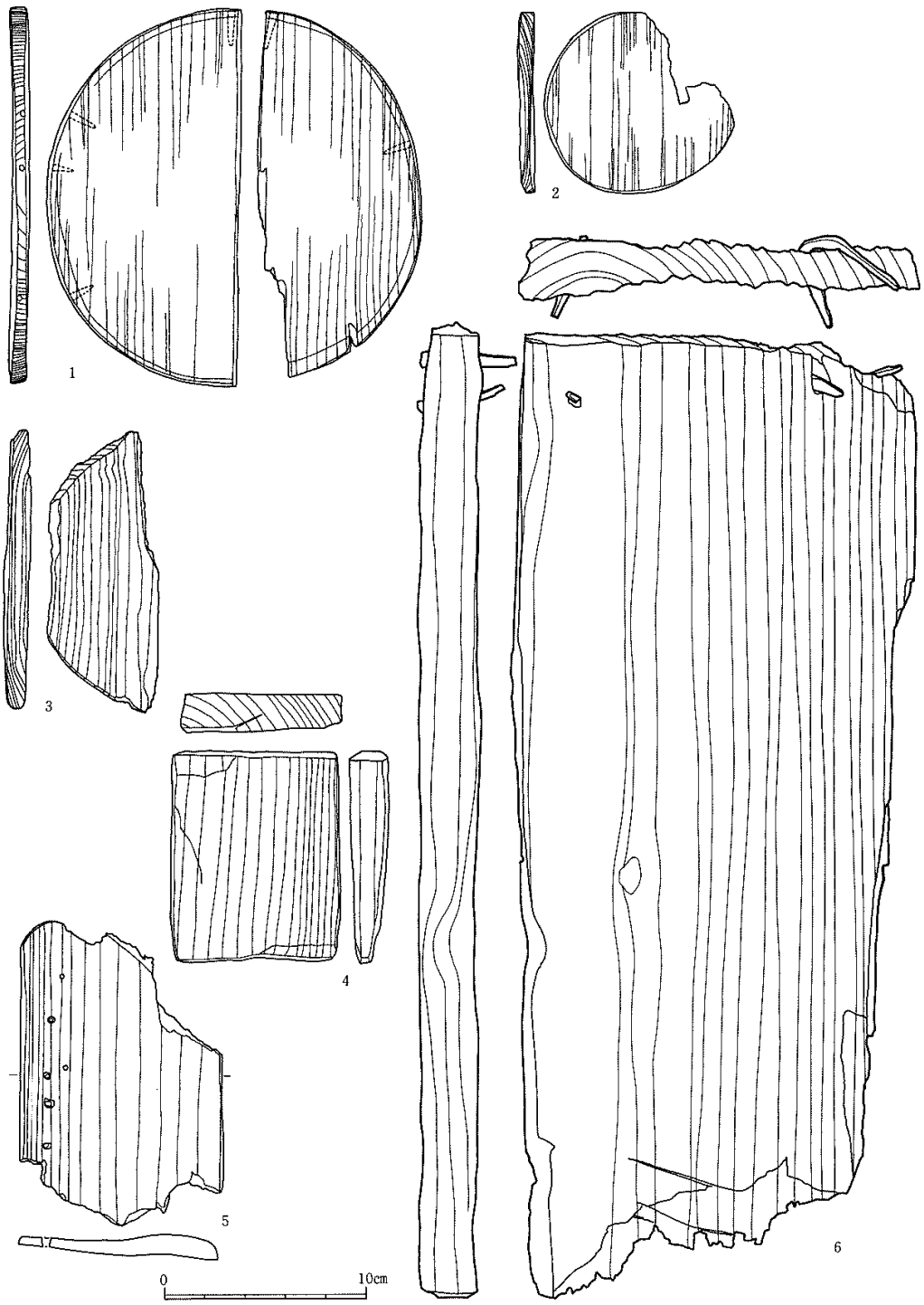
番号	出土位置	種類	備考	図版
1	8区・SE223・堆	漆器・椀	内面朱漆・外面黒漆→朱漆で木葉文	6-1
2	〃・SE206・〃	〃	〃 〃 文様不明・高台底彫込	6-4
3	〃・SE223・〃	〃	〃 〃 〃	6-3
4	〃・SE205・〃	〃	全面黒漆→朱漆で文様・高台底にも不明文字	6-2
5	〃・SE223・〃	漆器・鉢	内面朱漆・外面黒漆→朱漆で文様　家紋？	6-5
6	〃・SE215・廃土中	木製品・〃？	内外面炭化	10-2
7	〃・SE206・堆	漆器・？	内面朱漆・外面黒漆→朱漆で文様	6-9
8	〃・〃・〃	〃・椀	内外面朱漆・高台黒漆・朱漆で「ロ」文	6-7
9	〃・SE223・〃	〃	黒漆・高台底にロクロ穴あり	6-8
10	〃・SE206・〃	〃	内面朱漆・外面黒漆・高台欠損・朱漆で「－」字	6-6

第28図　木製品

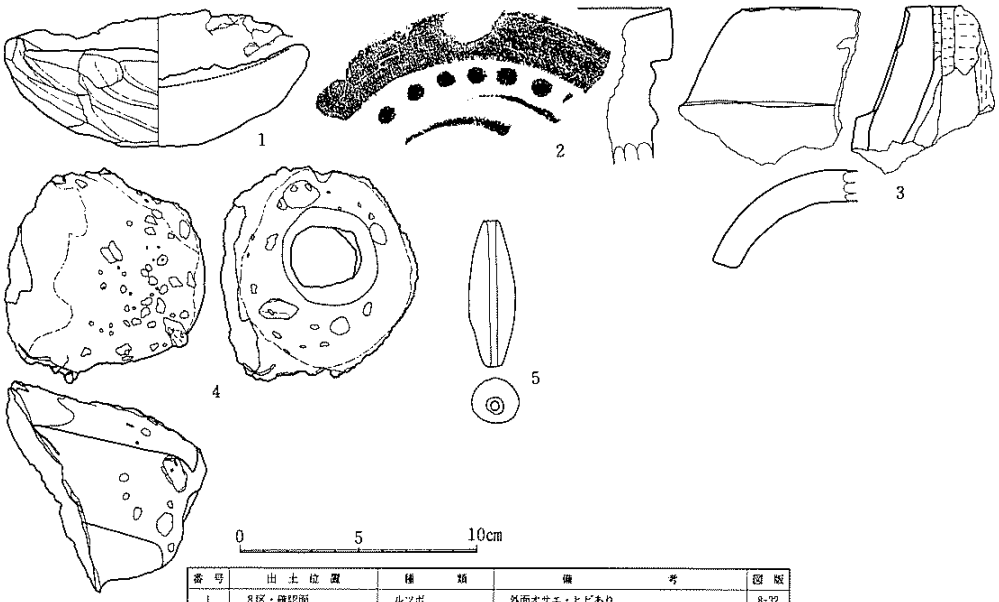
番号	出土位置	種類	備考	図版
1	3区・SE59・堆	木製品・底板	木釘穴7ケ所周囲に側板痕	10-3
2	8区・SE220・〃	〃・〃		10-5
3	〃・〃・〃	〃・〃		10-4
4	4区・SE112・〃	〃・模？	完形	10-6
5	8区・SE223・〃	〃・メンパ？	木釘穴6ケ所	10-1
6	4区・SE112・〃	〃・板材	釘2本残存	10-7

10 は外面に黒漆が施され、朱漆で文様が描かれている。9 は外面にも朱漆が施されている。高台は、体部と同じ厚さの薄いもの、高く厚いもの、中間の厚さの三種類が認められる。8・9 にはロクロ使用時の穴が認められる。5・6 は鉢？の破片であろう。5 も内面に朱漆が施され、外面は黒漆の後に朱漆で家紋（三ツ引両？）らしい文様が描かれている。

F．土製品（第 30 図）1 は砂質の胎土を用いたルツボで内面に厚く残滓が付着している。2 は巴文の軒丸瓦、3 は丸瓦の玉縁部、4 は羽口、5 は土錐である。



第29図　木製品



番号	出土位置	種類	備考	図版
1	8区・確認面	ルツボ	外面オサエ・ヒビあり	8-32
2	2区・SD66・堆	軒丸瓦	巴文	8-34
3	3区・SE63・〃	丸瓦	玉縁部	
4	8区・SE223・〃	羽口		8-33
5	4区・SD108・〃	土錘		8-9

第30図　土製品

No.	遺構名	区	No.	遺構名	区	No.	遺構名	区	No.	遺構名	区	No.	遺構名	区	No.	遺構名	区	No.	遺構名	区	No.	遺構名	区
51	SK	1	83	SE	4	115	SE	5	147	SD	6	179	SE	9東	211	SK	8上	243	SK	10	275	SB	5
52	SK	1	84	SE	4	116	欠		148	SD	6	180	SE	〃	212	SE	〃	244	SK	10	276	SB	5
53	SD	1	85	SK	4	117	SK	5	149	SK	6	181	SK	〃	213	SE	〃	245	SE	10	277	SB	5
54	SK	1	86	SK	4	118	SD	5	150	SD	6	182	SK	〃	214	SE	〃	246	SE	10	278	SB	9東
55	SK	1	87	SD	4	119	SE	5	151	SE	6	183	SE	〃	215	SE	〃	247	SD	10	279	SB	〃
56	SD	1	88	SX	4	120	SK	5	152	SE	6	184	SE	〃	216	SK	8下	248	SD	10	280	SB	〃
57	SD	1	89	SX	4	121	SK	5	153	SK	6	185	SE	〃	217	SD	〃	249	SE	11	281	SB	〃
58	SK	1	90	SX	4	122	SD	5	154	SD	8不明	186	SK	〃	218	SD	〃	250	SK	10	282	SB	〃
59	SE	1	91	SX	4	123	SX	5	155	SD	9～10	187	SK	9西	219	SE	〃	251	SD	10	283	SB	〃
60	SD	1	92	SD	4	124	SX	5	156	SK	10	188	SE	〃	220	SE	8上	252	SD	10	284	SB	4
61	SK	1	93	SE	4	125	SD	5	157	SK	10	189	SE	〃	221	SE	8下	253	SD	6	285	SB	4
62	SE	1	94	SX	4	126	SD	5	158	SK	10	190	SE	〃	222	SK	8上	254	SD	7			
63	SE	1	95	SX	4	127	SK	4	159	SE	10	191	SK	〃	223	SE	〃	255	SD	7			
64	SK	1	96	SD	4	128	SD	5	160	SD	10	192	SE	〃	224	SK	〃	256	SD	7			
65	SD	2～3	97	SE	4	129	SK	5	161	SD	11	193	SK	〃	225	SE	8下	257	欠				
66	SD	2	98	SE	4	130	SX	5	162	SD	11	194	SD	〃	226	SD	〃	258	欠				
67	SD	2	99	SD	4	131	SK	5	163	SD	9西	195	SK	〃	227	SD	〃	259	欠				
68	SE	3	100	SE	4	132	SX	5	164	SE	8不明	196	SK	〃	228	SD	〃	260	欠				
69	SE	3	101	SK	4	133	SX	5	165	SE	〃	197	SK	〃	229	SD	〃	261	SB	1			
70	SD	3	102	SD	4	134	SX	5	166	SE	〃	198	SK	8不明	230	SD	〃	262	SB	4			
71	SD	3	103	SD	4	135	SX	5	167	SD	〃	199	SK	〃	231	SK	8上	263	SB	4			
72	SD	3	104	SD	4	136	欠		168	SE	〃	200	SK	〃	232	SE	8下	264	SB	4			
73	SD	3	105	SD	5	137	SD	5	169	SD	〃	201	SK	〃	233	SK	〃	265	SB	4			
74	SE	4	106	SD	5	138	SK	5	170	SD	8上	202	SK	〃	234	SK	〃	266	SB	4			
75	SE	4	107	SD	5	139	SE	5	171	SK	9東	203	SD	〃	235	SK	〃	267	SB	4			
76	SE	4	108	SD	5	140	SE	5	172	SE	〃	204	SD	〃	236	SE	〃	268	SB	4			
77	SE	4	109	SE	5	141	SD	6	173	SK	〃	205	SD	8上	237	SD	10	269	SB	4			
78	SE	4	110	SD	5	142	SD	6	174	SK	〃	206	SE	〃	238	SD	10	270	SB	4			
79	SE	4	111	SD	5	143	SD	6	175	SK	〃	207	SE	〃	239	SD	10	271	SB	4			
80	SE	4	112	SE	5	144	SD	7	176	SK	〃	208	SD	8下	240	SD	10	272	SB	4			
81	SE	4	113	SE	5	145	SD	7	177	SE	〃	209	SK	8上	241	SD	10	273	SB	4			
82	SE	4	114	欠		146	SD	7	178	SE	〃	210	SK	〃	242	SD	10	274	SB	4			

第４表　遺構番号対照表

第４章　考察

１．遺構

今回の調査で確認された遺構は第５表の通りである。以下、遺構毎に考察を加える。

Ａ．掘立柱建物跡

合計 25 棟確認されたが、いずれも幅広く大きな面積を調査した区で確認されている。8 区でも掘立柱建物跡のものと思われる多数のピットが確認されたが、調査区の幅が狭いため建物跡として認識することはできなかった。ここを含めて特に掘立柱建物跡が集中するのは遺跡の東南の４・５・８・９区である。

建物の方向は真北から数度～数十度西に偏している。建物の規模は桁行が 3、4 間で梁行が１間の長方形を呈する単純なものが多い。廂や張り出しを持つものはわずかに４棟のみである。建物はブロックごとにまとまる傾向がある。ＳＢ266～ＳＢ269 は、同一規模の建物が４回建て替えされているが、今回調査区のそれ以外の場所での頻繁な建て替えは認められない。昨年調査した整地Ｃ区（第２図）では、建物の方向は 3～16 度東に偏し、規模も大きく張り出しや廂を持つものがほとんどであった。整地Ｃ区と今回の４・５・８・９区では、建物の性格が異なる可能性があると思われる。

Ｂ．井戸

合計 62 基と非常に多くの井戸が確認された。分布も調査区のほとんどが溝であった 2 区と精査を行っていない７区を除く各区で確認されている。特に建物跡など他の遺構の集中する４・９区に多く、数個の井戸がややまとまって存在する傾向も認められる。建物跡と重複する例は少なく、建物跡の周囲に分布する。構造はすべて素掘りである。出水や壁土の崩壊の危険性があるため底面まで発掘できたのは非常に少数であるが、底面まで確認できた井戸には水溜めなどの構造物や、祭祀を示す遺物などは認められなかった。断面形は大きく開くものや段を持つ漏斗状を呈するものが多い。これは壁の上部が、井戸に溜まった水の影響などで崩落したためと推定される。規模は下部の直径 0.8～1.2mで、1.5mを越えるものは３基のみである。堆積土は、上部は人為的に埋め戻されることが多く、下部については地下水位が高く堆積土がグライ化しているため堆積の状況は不明であった。井戸がまとまって分布し、さらに埋め戻されているということは、井戸が同一の場所で何回も作り替えられているということを示している。これがどのような理由によるのかは不明であるが、不吉なことがあった場合の作り替え、あるいは単なる気分転換の作り替えなど様々な理由が考えられる。完掘していないためか井戸からの遺物の出土も少なく、井戸をごみ穴として多量の遺物を廃棄したものも認められない。8 区中央付近のまとまった 3 基の井戸（ＳＥ206・215・223）から漆器や曲げ物の底など多くの木製品が出土したが、出土した

遺跡名 区	掘立柱建物跡	井　戸	溝	土　壙	焼け面遺構	炭化物集中遺構
1	1	3	4	7		
2			2			
3		2	6			
4	15	15	7	4	1	4
5	3	7	12	6	6	1
6		2	7	2		
7			6			
8 上層		8 } 17	2 } 17	6 } 15		
下層		5	10	4		
不明		4	5	5		
9 東	5 } 6	8 } 12		8 } 14		
西	1	4	3	6		
10		3	12	6		
11		1	2			
計	25	62	78	54	7	5

第５表　各区で確認された遺構数

層はスクモを多く含む自然堆積層で、洪水などの影響で他の場所から流れ込んできたものである。

C．溝

溝も合計 78 条と多く確認された。規模によって、幅 7m以上の大溝、幅数十ｃｍ～2m のものに分けられる。長さ数m、深さも数ｃｍ程度の小規模のものを除き、後者は平面・断面共に掘り方が明確で壁の立上がりが急なものと平面・断面が不整形で壁の立上がりが緩やかなものに大きく分けられる傾向が認められる。

まず大溝であるが、2～3 区で認められたＳＤ65 は、「コ」状を呈する二の丸と推定される部分の東辺に平行して、そのすぐ外側を南北に伸びる大溝である。従ってこの大溝は二の丸とその外側を画する堀と思われる。6 区南端のＳＤ147、北端のＳＤ148、7 区のＳＤ144・ＳＤ145・ＳＤ146・ＳＤ255・ＳＤ256 は城の上流に当たり、竹林川から城内に水を取り入れる機能を有していたと推定される。これらは二の丸および堀（ＳＤ65）を基準とした、推定される城の軸線に斜行し、周辺からも今のところ多数の遺構も確認されていないことから、区画としての機能は有していないと思われる。5 区の南で確認されたＳＤ118 は遺跡の南辺付近を東流し、5 区で向きを変え 5 区の東を北上してＳＤ65 と合流すると思われる。ＳＤ118 や 9・10 区のＳＤ155、詳細は明確ではないが 2・3 区のＳＤ65 から分流する大溝は区画施設であると共に下流に水を排出する機能も有していたと推定される。また

8 区南端のＳＤ154 は、延びる方向など不明な点が多く性格は明らかではないが、遺跡南端の区画、あるいは下流への放水路の可能性が考えられよう。

掘り方の明確な小規模な溝は、水流の痕跡が顕著なものが多く水路としての機能を有していたと共に、その多くは区画施設の用をなしていたとも推定される。特にこれらの溝が多く確認されている 4・5・8 区では、溝は東西方向がほとんどである。4 区南から 5 区にかけては東西溝が北からＳＤ87・92、ＳＤ105、ＳＤ111、ＳＤ110、ＳＤ107、ＳＤ106、ＳＤ125 の 7 条確認されており、それぞれの間隔は 9m・12m・3m・6m・6m・7mである。9 区においても東西溝が北からＳＤ169、ＳＤ170、ＳＤ230、ＳＤ226、ＳＤ229、ＳＤ218、ＳＤ205、ＳＤ204、ＳＤ203 の 9 条確認されている。間隔はそれぞれ 4.5m、4.5m、3m、4.5m、27m、31.5m、34m、12mである。4・5 区と 8 区の間には、4・5 区のすぐ東側にＳＤ65 の延長の南北大溝（堀）があると推定される。しかしどちらにも東西の溝によって区画された範囲というものが認められるようである。これらは 1.8m（一間）あるいはその倍数を基準とした土地割りの可能性があるが、調査範囲が幅狭く実態は不明である。

掘り方の不明瞭な溝である 3 区のＳＤ71、6 区のＳＤ150・253、10 区のＳＤ237 などは砂を多く含む堆積土の状況などからも河川の痕跡と考えられる。

Ｄ．土壙

土壙は 54 基確認されたが、分布、平面形、断面形、深さ、堆積土などの属性には傾向性は認められず、機能を推定しうる資料も出土しなかった。

Ｅ．焼け面遺構・炭化物集中遺構

焼け面遺構は 4 区の南側で 1 基、5 区の北側で 6 基確認されており、およそ 10mの範囲に集中している。ＳＸ124 は 5 面の焼け面が認められ、何回も作り直されていることが明らかである。平面形は楕円形を基調とし、深さ 20～30ｃｍの掘り方をもつものと、底面が数ｃｍだけ窪んでいるものの 2 種類が認められる。前者は底面が焼土や炭化物を含む黒褐色のシルトによって埋め戻され、その上面の皿状に窪んだ部分が厚さ数ｃｍにわたり堅く焼けて締まっている。後者は下部に掘り方を持たない点が異なるだけで、皿状に窪んだ部分が厚さ数ｃｍ堅く焼けて締まっている状況は前者と同様である。これらに付随する遺物はほとんどなく、周囲にはピット類と炭化物集中遺構が分布している。周囲に認められる多数のピットは焼け面遺構に伴う覆屋などのピットと思われるが、その構造などを明らかにすることはできなかった。

炭化物集中遺構は 4 区の南西側に 4 基、5 区の北側に 1 基確認されている。いずれも範囲が調査区外に伸びているため全体像は明確でほないが、平面形は不整で分布範囲が 12m

以上に及ぶものもある。掘り方などの特定の構造物はなく、底面は凹凸が激しい。これに付随する遺物としては鉄滓があり、焼土が混在する部分も認めらる。

焼け面遺構と炭化物集中遺構はセットをなしており、焼け面遺構の周囲に多量の炭化物が分布している。これと鉄滓の存在から、この場所において小鍛冶が行われていたことを示していると思われる。

Ｆ．まとめ

今回の調査区は広範囲にわたり、遺構の分布範囲やその様相の一端が明らかになった。2・3 区では二の丸と推定される部分の外側を画する堀の様子がある程度明かになり、4・5 区では三の丸に相当する部分の建物や井戸・鍛冶遺構などの様相も明らかとなった。4 区では遺構が大きく 4 ブロックに分けられ、Ｓ16・17 付近のＳＤ99・102 溝、Ｓ40 付近の攪乱、Ｓ69 付近のＳＤ87・92 溝がそれぞれ境界となっている。4 区北端とＳ40 付近は水田耕作による攪乱を受けているが、この周囲は遺構の密度も低く、特にＳ40 付近の攪乱部分には溝などの区画施設が存在した可能性が高い。南端のブロックは 5 区と一連のものであろう。各ブロックの南北幅は 20m前後であり、最高 5 時期の遺構の変遷がとらえられた。6・7・12 区は遺跡の西南端で、城内に水を取り込む溝とわずかな遺構が確認されたのみである。12 区では遺構はまったく確認されなかった。1・8・9・10・11 区は遺跡の東端と北端にあたる。8 区では整地層が残存していることが明らかとなり、整地層の上下二時期の遺構の様子も明らかとなった。さらに、ここにおいても 4・5 区と同様に溝による地割りの存在も推定できた。9 区東側には遺構は分布せず、遺跡の東端を示すものと理解された。1・10・11 区は遺跡の東端と北端にあたり遺構の密度も低く、6・7・12 区と対称をなす下流側の地域である。

以上の点が明確となったが、調査の対象地域は広範囲に渡ったものの調査区の幅が狭く、遺構の全体像や性格を明確にするのには非常に制約が多かった。したがって地割りや場の機能などについても不明な点が多く、今後の調査の結果を期待するものとなった。

2．遺物

今回の調査では土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、銅製品、古銭、石製品、土製品、木製品が出土した。今回も広い面積を調査したにもかかわらず遺物の出土量は非常に少ない。相対的には遺構の集中した 4・5・8・9 区からの出土が多かったが、遺構の年代や性格を明らかにするような出土量、状況ではなかった。ただし、前回の調査では認められなかった漆器を中心とした木製品がややまとまって出土している。

陶磁器には無釉陶器、施釉陶器、染付磁器がある。施釉陶器には、瀬戸・美濃産のものが多く、唐津産の皿も認められた。年代はいずれも 16 世紀中頃から 17 世紀初頭にかけてで

ある。

古銭は洪武通宝・永楽通宝・政和通宝・景徳元宝・元符通宝・紹聖元宝が出土している。いずれも中世に大陸から輸入されたもので、今回も寛永通宝は出土していない。

漆器は椀が 7 個体出土している。内面に朱漆が施され、外面には黒漆が施された後、朱漆で文様が描かれているものが多い。文様は第 28 図 1 の木の葉紋と 4 の植物紋が分かるだけで、その他は剥落が激しく不明瞭である。高台は体部と同じ厚さの薄いもの、高く厚いもの、中間の厚さの三種類が認められる。鉢？の破片と思われるものもあり、外面に朱漆で三ツ引両らしい文様が描かれている。三ツ引両は伊達家の家紋でありこの遺跡の性格を反映していると思われる。

土師器、須恵器など平安時代の遺物も破片が少量出土しているが、これらに伴うと思われる遺構は今回は確認されていない。

3．推定される遺跡の構造と年代

今回の遺跡の東辺と南西側を中心とした調査によって遺跡の構造がある程度明らかとなった。これらの範囲は昨年の調査でも明らかになったように、二の丸と推定される部分の外側を画する堀のさらに外側に位置する。したがってここはいわゆる「城内」ではなく「城下」にあたると考えられる。城下でも中心からより遠くなるに従い遺構の密度は低くなる傾向が伺われる。特に遺跡の北東側と南西側にはそれぞれ、竹林川から城下あるいは城内の堀に水を取り込む溝、排出する溝としての機能を持つものが認められ、この付近では遺構の分布は稀薄であった。今回遺構の集中した遺跡の東南側では、幅 1m前後の溝が一定間隔で東西に延びていることが明らかとなり、これが城下の地割りを示す可能性があることを指摘できた。しかし地割りの基準、規模、範囲などの実態については調査範囲の制約があり明確にはできなかった。

年代については、遺物の量も少なく昨年の調査以上の成果を得ることはできなかった。しかし昨年の整地Ｃ区でとらえられた 10 期以上の遺構の変遷程ではないものの、4・5・8 区では 4 期あまりの遺構の変遷が明らかとなり、遺跡の広い範囲にわたり遺構が長期間存続していたことが明確となった。これは、これらが文献で示された宗清居城の 10 年足らずの間に残されたものではなく、城あるいは城下の構造が宗清以前に存在していたことを示す可能性があると思われる。

第 5 章　まとめ

今回の調査の成果をまとめると以下のようになる。

1　遺跡の東辺と南西側の広い範囲を調査し、「城下」の様子がより明確となった。

2　2・3 区では二の丸の外側を画する堀が確認された。

3　4・5・8・9 区では多くの掘立柱建物跡や井戸、溝、土壙などがみつかり、5 期あまりの遺構の変遷とともに、「城下」における地割りの存在も確認できた。

4　1・10・11 区と 6・7・12 区はそれぞれ遺跡の北東端、南西端にあたり、竹林川からの取水、排水施設と考えられる溝のほかには遺構の分布密度は低く、いわゆる「町外れ」にあたると推定される。

5　発見された遺物の多くは 16 世紀中頃～17 世紀初頭のものであり、伊達宗清が住んだ時期にほぼ一致する。しかし今回の調査や昨年の整地Ｃ区の調査でも推定されたように、長期間にわたり「城下」総体の構造として遺構が存続していたことが明らかとなり、文献に記された宗清以前に、ここにすでに「城下」としての構遺が存在していたことを示すものと思われる。

6　平安時代の遺物も少量出土したが、今回は遺構は確認されなかった。

（謝辞）陶磁器については千葉孝弥氏（多賀城市教育委員会）のご教示をいただいた。

引用･参考文献

伊藤嘉章「瀬戸・美濃における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要』2　1988

遠藤巌・伊藤信他『大和町史』上巻　1975

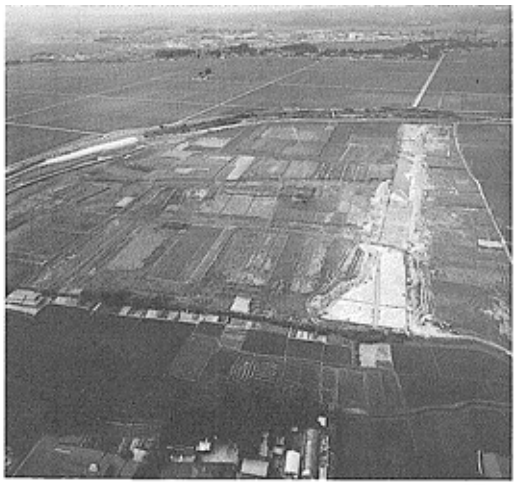
紫桃正隆『史料　仙台領内古城・館』第三巻　1973

田口昭二『美濃焼』ニュー・サイエンス社　1983

藤沼邦彦・小井川和夫他『日本城郭大系』3　1981

渡辺信夫・大藤修他『大和町史』下巻　1977

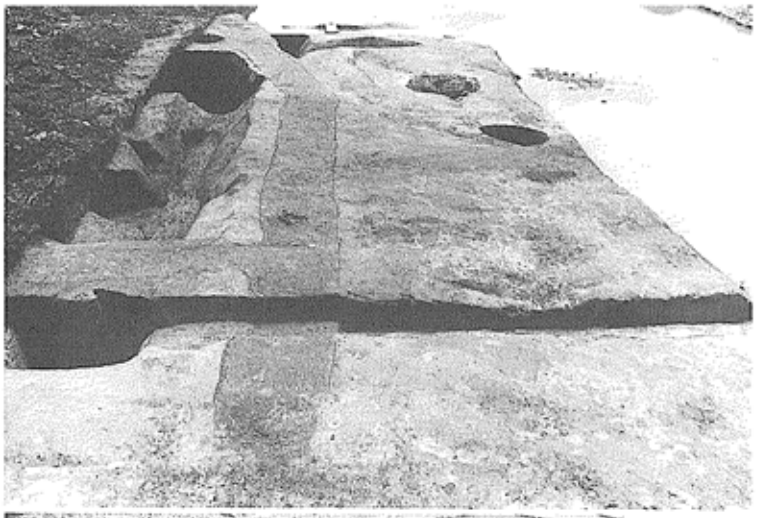
写　真　図　版



1.上左 遺跡全景 南東から
2.上右 4区北側空撮
3. 右 1区全景

4. 2～3区全景

写真図版1



1. 3区部分

2. 4区北側全景

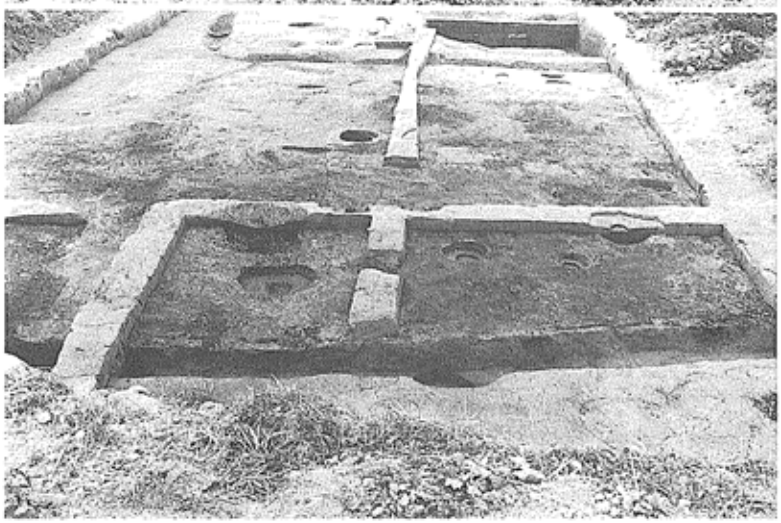
3. 4区SE97・98
SD99・SK101断面

写真図版2

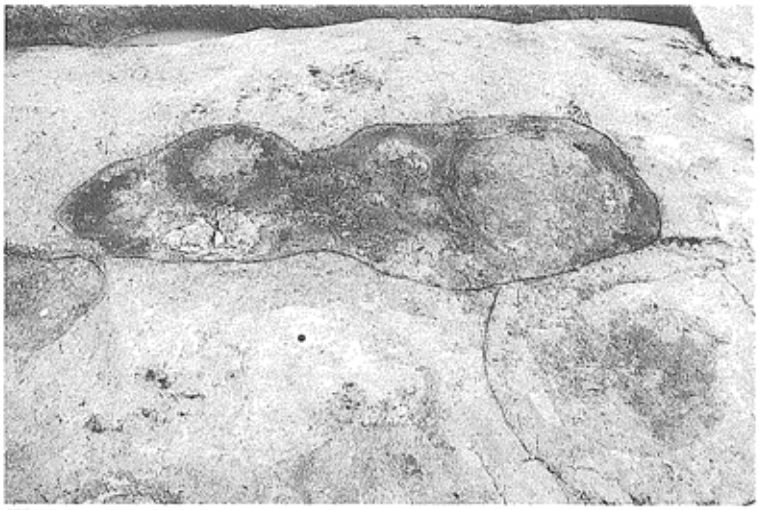
1．4区
ＳＤ87・92完掘状況

2．5区全景

3．5区北側
ＳＸ130



写真図版３



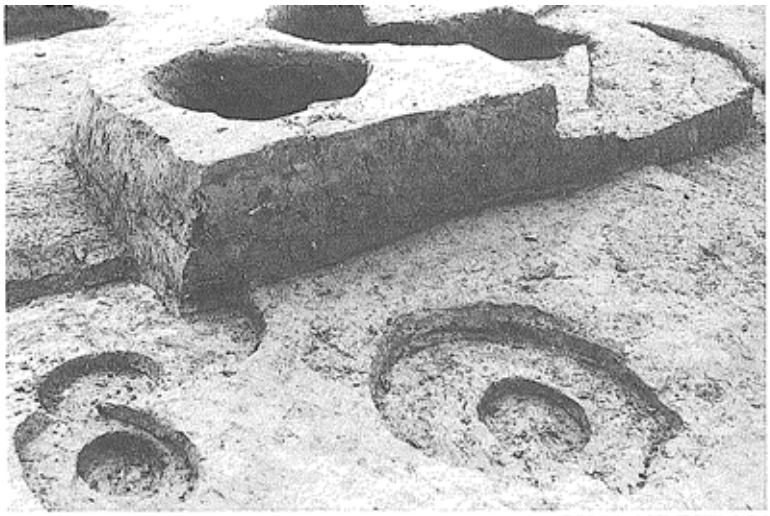
1. 5区北側
SX124

2. 6区発掘状況

3. 8区部分
S-30付近

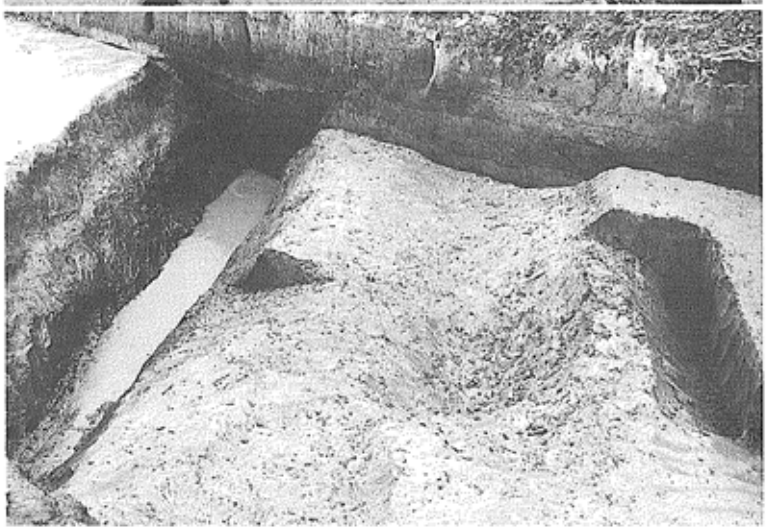
写真図版 4

1. 8区S-78付近
整地層

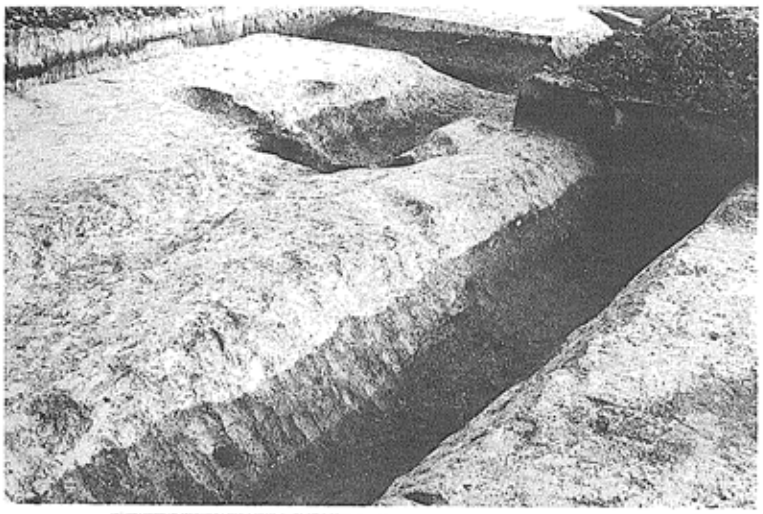


2. 9区東全景

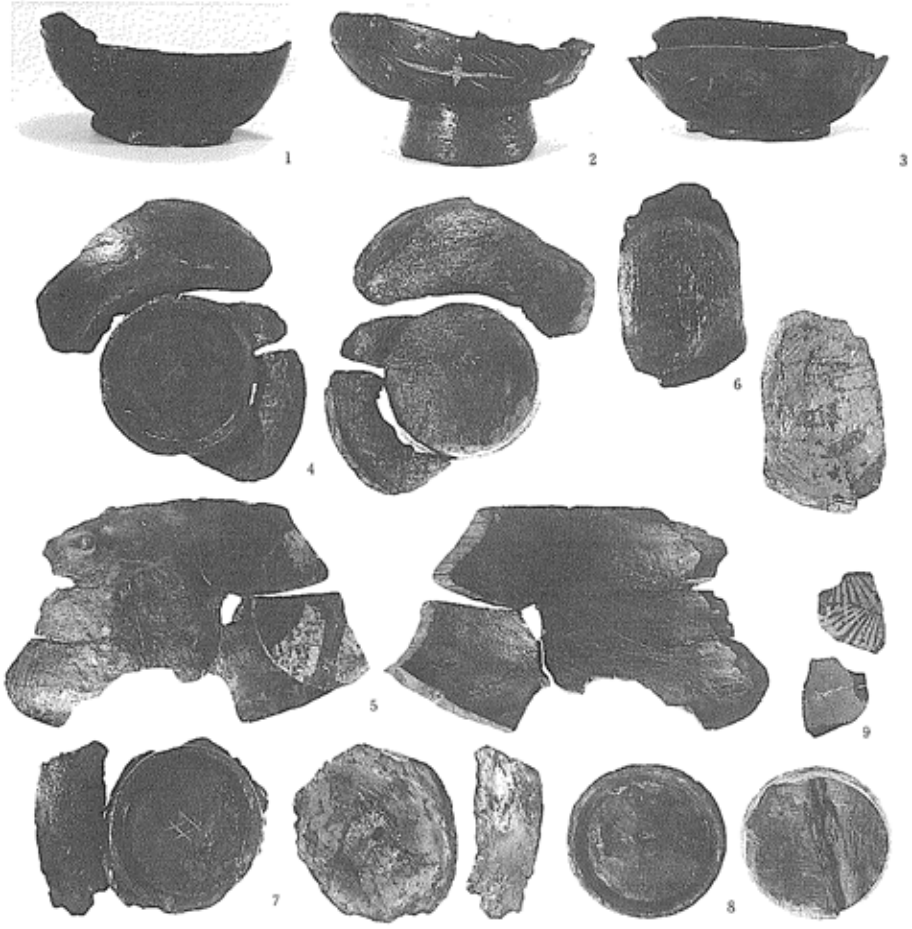
3. 10区
SD251・SD255
SD155



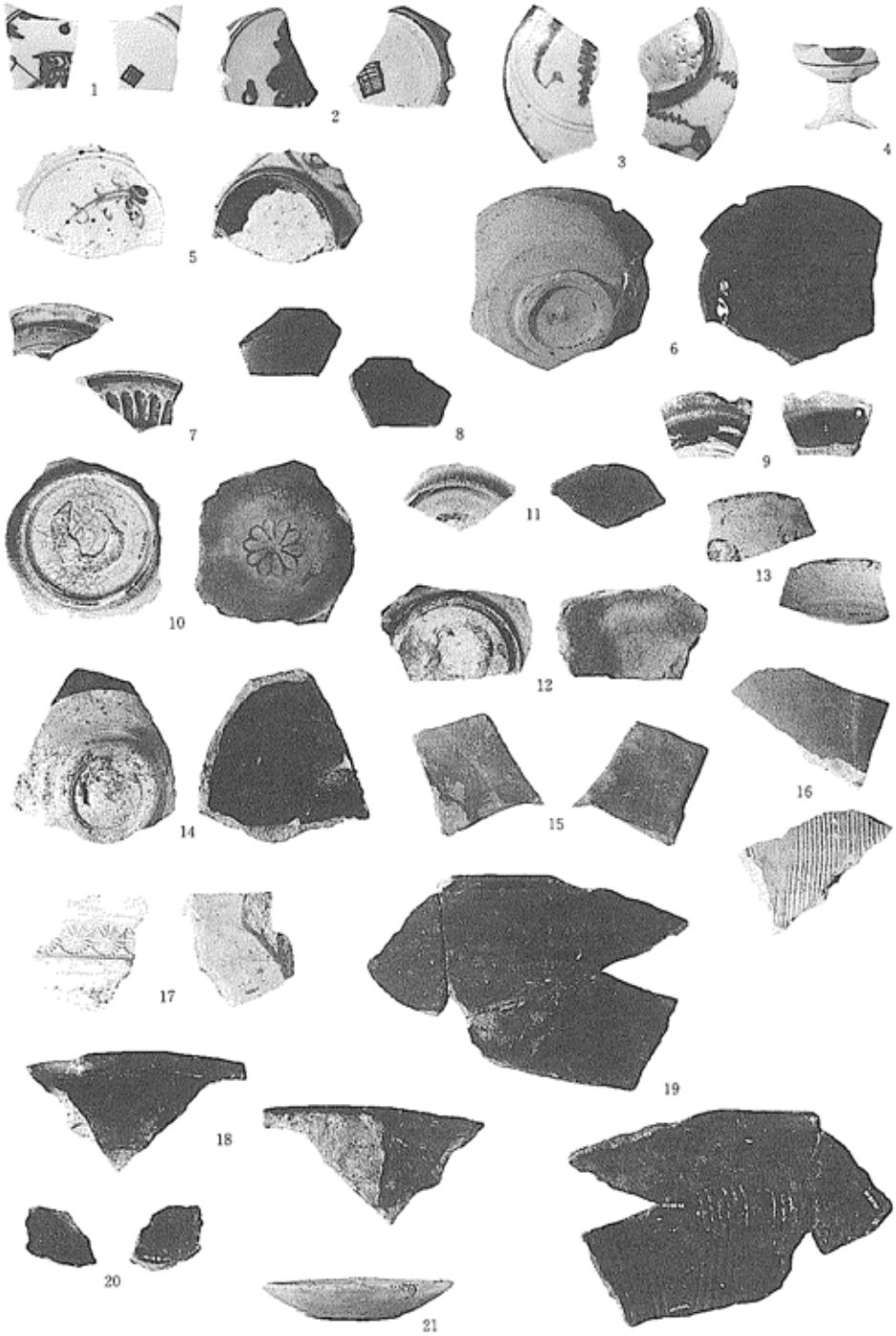
写真図版5



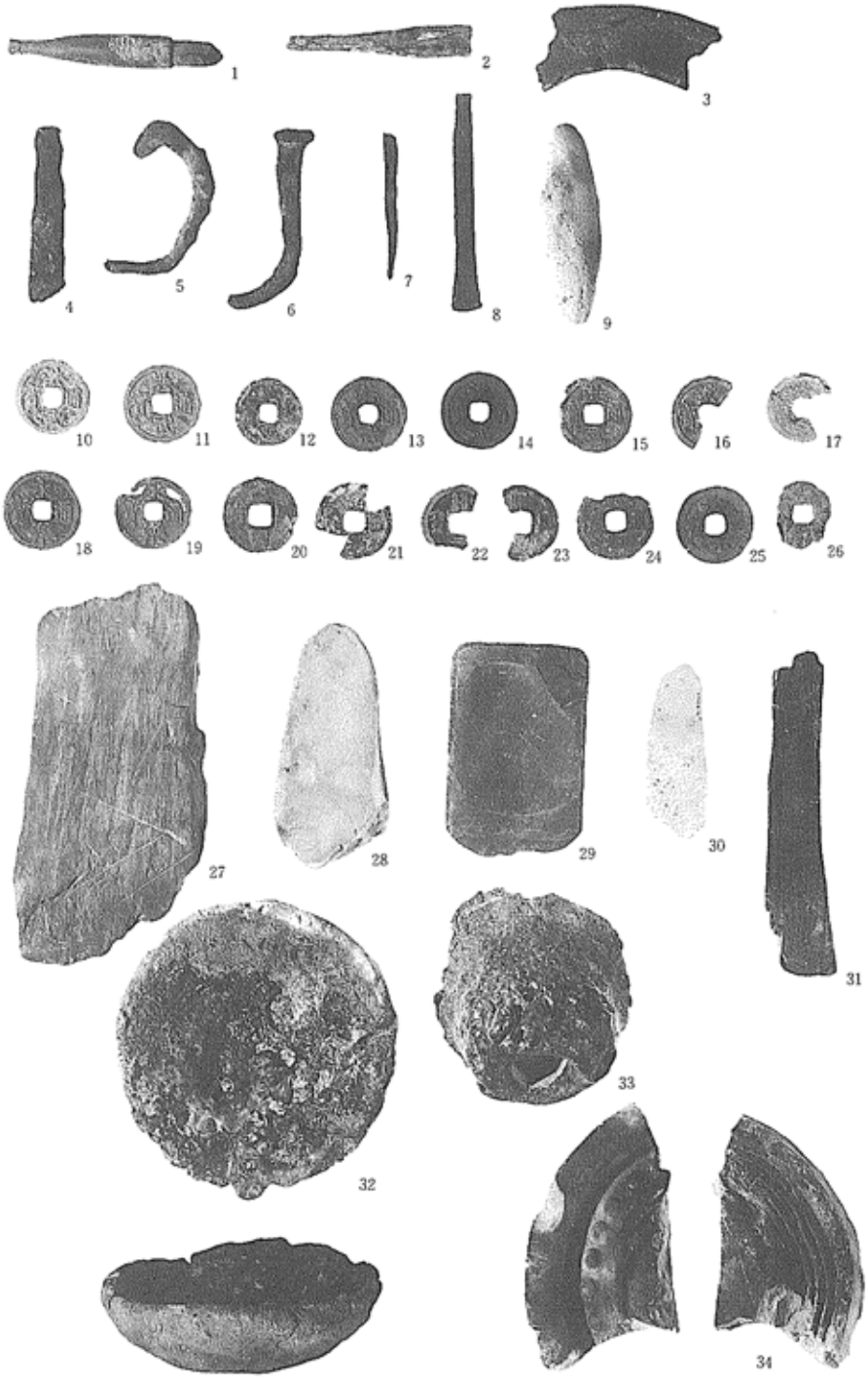
1.10 - 11区
SD160・SD161・SD247
・SD248



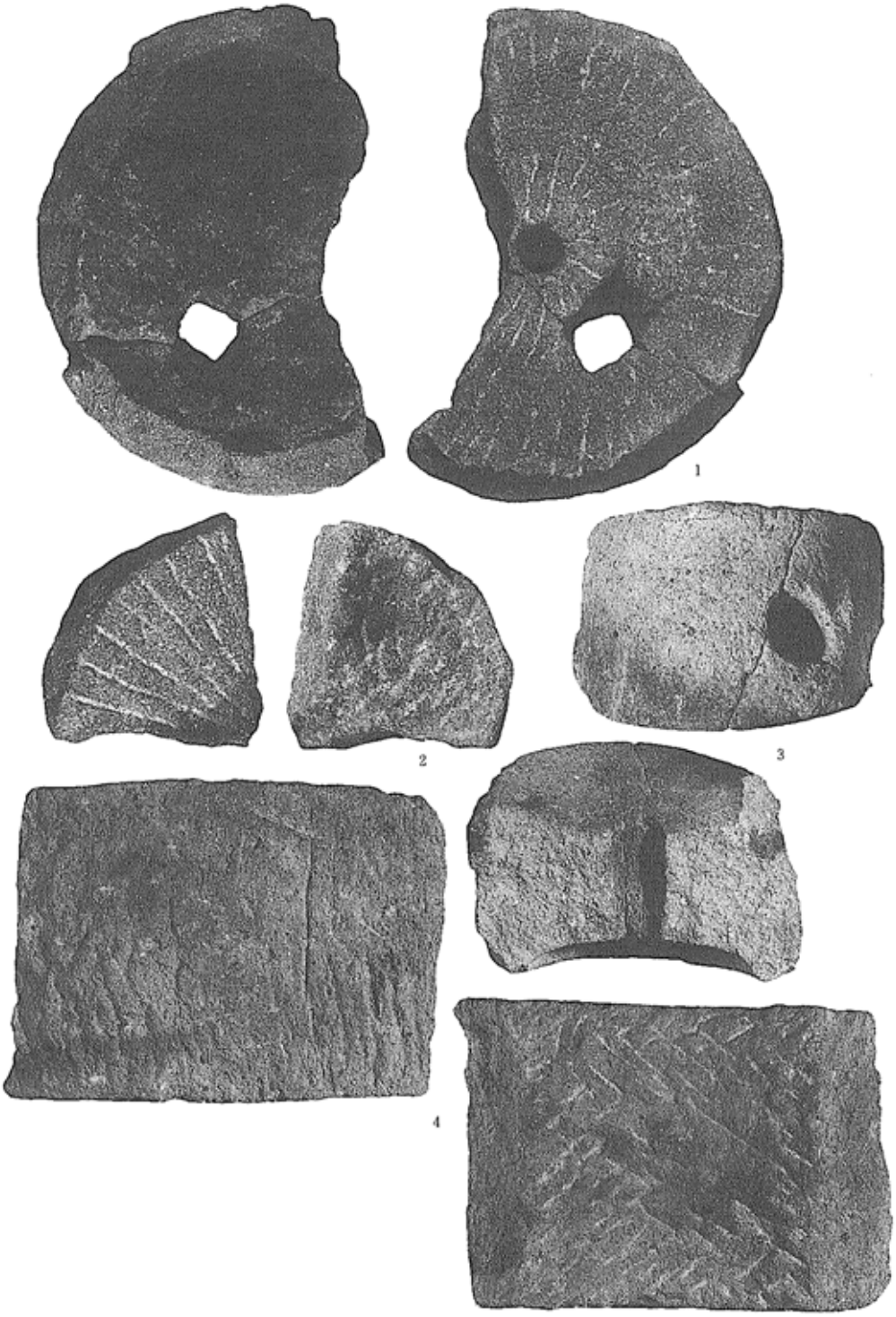
写真図版6



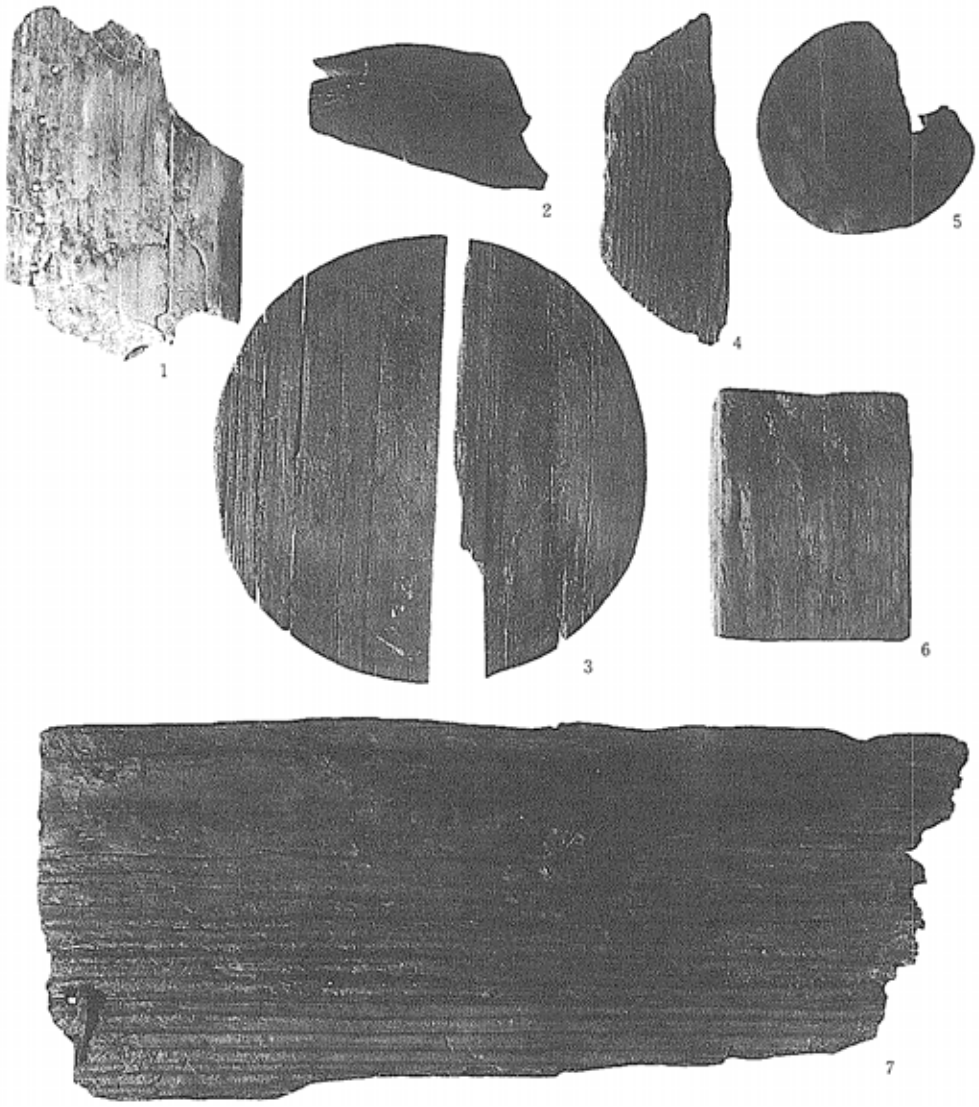
写真図版７　出土遺物・陶磁器



写真図版 8　金属製品・木製品
石製品・土製品・瓦



写真図版９　出土遺物・石製品



写真図版10　出土遺物・木製品

大 泉 遺 跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境 71
Ⅱ　周辺の遺跡 71
Ⅲ　大泉遺跡について 71
Ⅳ　調査の目的と方法・経過 73
Ⅴ　発見された遺構と出土遺物 74
Ⅵ　まとめ 82
引用・参考文献 82
写真図版 85

調 査 要 項

遺 跡 名：大泉遺跡（おおいずみいせき）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：54022
遺跡記号：ＯＹ
所 在 地：宮城県登米郡中田町上沼字本宮
調査原因：県営ほ場整備事業
調査面積：約 68000 ㎡
調査期間：平成 4（1992）年 11 月 11 日～11 月 19 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：小村田達也、三好秀樹
調査協力：中田町教育委員会

大 泉 遺 跡

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境（第１・２図）

大泉遺跡は、登米郡中田町上沼字本宮に所在する。遺跡は国道 342 号線から直線距離にして東へ約 1.5ｋｍの地点、北上川の中流沿いに位置している。

本遺跡が所在する中田町は宮城県の北東部に位置しており、北は岩手県東磐井郡花泉町に接している。町内には並行して南流する北上川と迫川があり、その流域に広い仙北低地帯が形成されている。また、中田町には幾つもの旧河道跡が存在し、この旧河道沿いに自然堤防が発達している。

遺跡は東西に延びる旧河道跡に沿って位置する標高 11m～14mの自然堤防上とその周辺に立地しており、現状は宅地、水田および畑地となっている。

Ⅱ　周辺の遺跡（第１図）

中田町内では旧河道に沿って自然堤防が発達しており、その自然堤防上には縄文時代から中・近世にいたる遺跡が存在している。

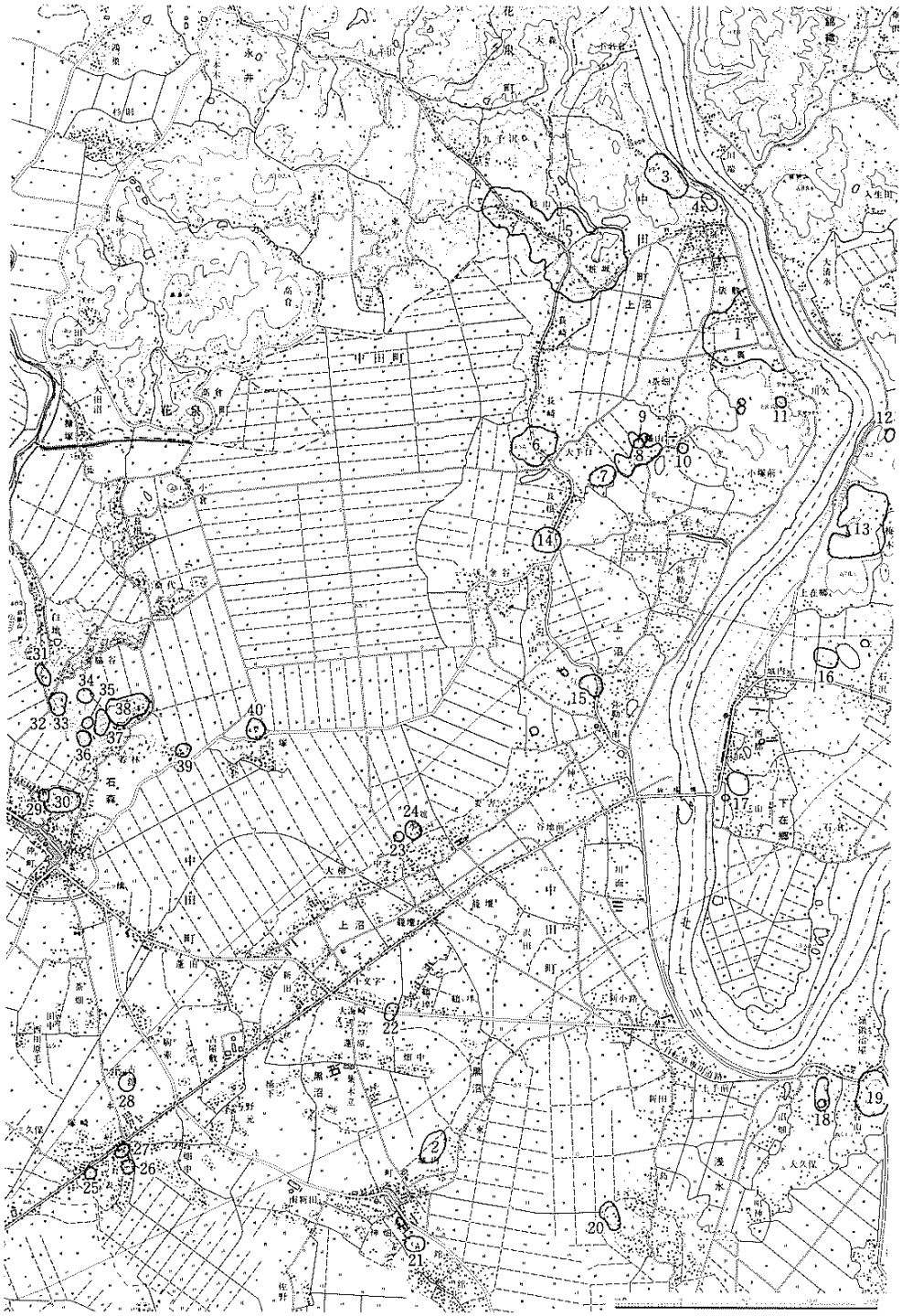
縄文時代の遺跡としては浅部貝塚（中～後期）、二ツ木貝塚（中～晩期）、丸森山遺跡（中～後期）などがある。浅部貝塚は縄文中期から後期を中心とした遺跡で、土器類の他に石器・骨角器・土製品など多くの遺物が出土している。また、弥生時代の遺跡は大泉遺跡を除くとほとんどみられない。

古墳時代から奈良・平安時代の遺跡としては白地古墳群（古墳後期～奈良）、杉山古墳群（古墳後期～奈良）などがある。白地古墳群（中田町教委：1978）は古墳時代後期から奈良時代にかけての横穴墓で、その約 5 基が調査されている。出土遺物は土器・鉄製品・玉類などであり、出土遺物が類似していることや近接して立地していることから石越町の山根前横穴古墳群（奈良・平安）との密接な関係が指摘されている。また、杉山古墳群は大泉遺跡の北東約 1.0ｋｍの丘陵頂部に位置しており、約 150 基の小円墳が確認されている。

中・近世になると遺跡数がかなり増えてくる。特に町内には中世の遺跡が多く、上沼館跡、弥勒寺館跡、石森館跡などの中世城館、円福寺跡などの寺院跡がみられる。また、中世の板碑も数多くみられる。

Ⅲ　大泉遺跡について（写真図版１－1）

大泉遺跡は「上沼遺跡」、「本宮遺跡」とも呼ばれている。昭和 22 年にこの地方を襲った



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	大泉遺跡	沖積平野	包含地	縄文中・晩、弥生、古代	21	新井田新館跡	自然堤防	城館	中世
2	黒沼館跡	自然堤防	城館	江戸	22	伊神館跡	自然堤防	城館	近世
3	大泉館跡	丘陵	城館	中世	23	八幡寺跡	自然堤防	寺院跡	近世
4	補陀落山観音寺跡	丘陵麓	寺院跡	古代、近世	24	桜場館跡	自然堤防	城館	中世
5	杉山古墳群	丘陵頂	円墳	古墳後、奈良	25	西明寺跡	自然堤防	寺院跡	近世
6	朝日館	丘陵	城館	中世	26	加賀野館跡	自然堤防	城館	中世
7	上沼古館跡	沖積平野	城館	近世	27	本遠寺跡	自然堤防	寺院跡	近世
8	上沼館跡	沖積平野	城館	中世	28	石森古館跡	自然堤防	城館	中世
9	玉の墓遺跡	沖積平野	墳墓	中世	29	古塚壇遺跡	自然堤防	塚	近世
10	円福寺跡	丘陵麓	寺院跡	中世	30	石森館跡	分離丘陵	城館	古代、中世、近世
11	七ツ森遺跡	丘陵頂	塚		31	白地横穴古墳群	分離丘陵	横穴古墳	古墳後、奈良
12	洞山古墳	丘陵麓	古墳	古墳末	32	愛宕山寺院	分離丘陵	寺院跡	
13	丸森山遺跡	丘陵	包含地	縄文中・後	33	石森遺跡	分離丘陵	包含地	縄文
14	新内ノ目遺跡	沖積平野	包含地	縄文前	34	二ツ木貝塚	丘陵端	貝塚	縄文中～晩
15	弥勒寺館跡	丘陵端	城館	中世	35	十念仏山遺跡	分離丘陵	包含地	縄文晩
16	湖水館跡	自然堤防	城館	中世	36	双樹山秀山寺跡	分離丘陵	寺院跡	
17	高橋館跡	丘陵	城館	中世	37	大壇遺跡	分離丘陵	祭祀跡	近世
18	観音寺跡	丘陵	寺院跡	近世	38	双樹館跡	分離丘陵	城館・包含地	古代、中世、近世
19	長谷館跡	分離丘陵	城館	中世	39	西方庵跡	沖積平野	寺院跡	
20	小島館跡	分離丘陵	城館	中世	40	小塚館跡	分離丘陵	城館	中世

第1表　周辺の遺跡地名表

キャサリン台風により北上川沿いの堤防が上沼大泉で決壊した。この濁流の落下の勢いで地表面が削られ偶然発見されたのが大泉遺跡である。

『中田町史』によると減水した遺跡部分には建物跡と思われる木列が3列9行に整然と並び、その周辺からは須恵器の大甕や木器・種子類などが出土したとされている。なお、その時出土したとされる遺物の一部は中田町公民館、宮城県佐沼高等学校に収蔵されている。その後、本遺跡の発掘調査が東北大学を中心に行なわれ、その出土遺物は縄文時代から奈良・平安時代に及んでいる。この発掘調査で出土した弥生時代の土器を取り上げて、伊東氏（1957）は「大泉式」を設定した。

また、本遺跡の性格については発見された木列と大甕の状況から倉庫風の建物を想定し、一般の集落とは異なる居住域であることを指摘する考えもある(高橋：1972)。さらに、出土遺物のなかに後北式土器が含まれていることも指摘されている（佐藤：1984）。

Ⅳ　調査の目的と方法・経過（第2図）

今回の調査は、上沼地区県営ほ場整備事業に伴う確認調査である。

調査の対象地域は北上川の中流域沿いに位置し、大泉の集落の南面にあたる。この地域は現在水田または荒地となっており、調査対象面積は約68000㎡である。調査は遺構が分布する範囲を確認することを目的とし、任意の方向・規模のトレンチ調査を11月11日から11月19日にかけて行なった。調査対象地域には湧き水のためトレンチ調査が行なえない部分もあり、旧地形と昭和22年の洪水で削られた部分を考慮しながら可能な範囲内で合計15本、約1500㎡のトレンチ調査を行なった。トレンチ調査部分と遺構については、平板測量によ

る平面図を作成し、必要に応じて断面図も作成した。写真記録については、35mm白黒写真、同カラー・リバーサル写真によって行なった。

V　発見された遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は溝跡３条であり、いずれも地山面で確認された。また、それらの遺構や遺構外からは弥生土器、土師器、須恵器、石器、骨角製品などの遺物が出土している。

【1 号溝跡】（第 2 図）

第 3 トレンチの北端で確認された。トレンチ西壁側の北端からやや南へ弧を描くように東壁へ貫けている。両隣の第 2・4 トレンチではこの溝跡が確認されていないため溝が延びる方向や規模は不明である。また、溝跡の中央には途切れる部分があり、その間隔は約 1.0 mである。この溝の上面はかなり後世の削平を受けており、現存で上幅約 1.8m、下幅約 1.6m、深さ約５ｃｍとなっている。底面は平坦で、側壁は緩やかに傾斜している。堆積土は炭化物を含む暗緑灰色の粘土質シルトで、自然堆積層である。堆積土中からは土師器と北海道系の土器片が出土している。これらのうち図示できたものは土師器壺 2 点、甕 3 点、高坏 1 点、北海道系の土器片 2 点である。

《出土遺物》

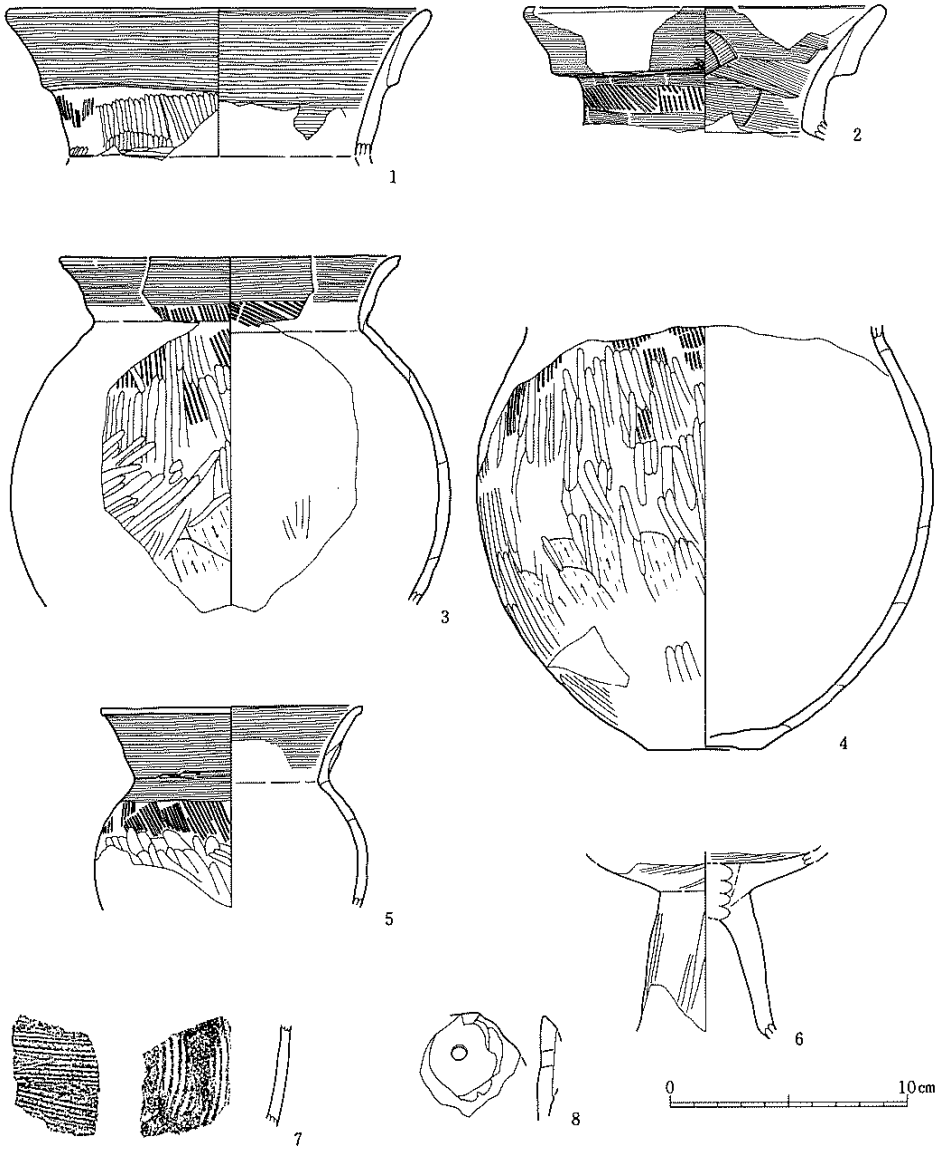
▲土師器壷（第 3 図－1・2）

2 点とも口縁部から頸部のみ残存しており、全体の器形は不明である。口縁部の形態はともに複合口縁で、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外傾している。1 は口径が 18.0 ㎝で、口縁部内外面にヨコナデ、頸部外面にハケメの後ヘラミガキが施されている。また、頸部外面には火を受けた痕跡が見られる。2 は口径が 15.2ｃｍで、口縁部外面にハケメの後ヨコナデ、頸部外面にハケメの後ナデ、口縁部内面にヘラナデが施されている。

▲土師器甕（第 3 図－3・4・5）

3 は「く」の字に外反する単純口縁をもつ甕で、比較的頸部の屈曲が弱く、口径は 14.4 ｃｍである。体部はほぼ球形で、外面の調整は口縁部にハケメの後ヨコナデ、体部上半にハケメの後ヘラミガキ、体部下半にヘラケズリの後ヘラミガキが施されている。また、口縁部のヨコナデは頸部まで及んでいない。内面の調整については摩滅しており不明であるが、口縁部上半にはヨコナデ、下半にはハケメが施されている。4 は体部がほぼ球形の甕の下半部で、底部は平底を呈する。外面の調整は体部上半にハケメの後ヘラミガキ、体部下半にヘラケズリの後ヘラミガキが施されており、内面の調整については摩滅しており不明で

第２図　遺跡の地形とトレンチ配置図



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率	図版No.
1	土師器・壺	第3トレンチ・1号溝跡	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ		18.0			1/4	3－1
2	土師器・壺	第3トレンチ・1号溝跡	口縁部ハケメ→ヨコナデ	口縁部ヘラナデ		(15.2)			1/8	3－2
3	土師器・甕	第3トレンチ・1号溝跡	口縁部 ハケメ→ヨコナデ、体部 ハケメ・ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部ヨコナデ・ハケメ		14.4			1/5	
4	土師器・甕	第3トレンチ・1号溝跡	体部ハケメ・ヘラケズリ→ヘラミガキ				4.9		1/4	3－3
5	土師器・甕	第3トレンチ・1号溝跡	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ→ナデ	口縁部ヨコナデ		11.0			1/5	
6	土師器・高坏	第3トレンチ・1号溝跡	坏部・脚部ヘラミガキ＋赤彩	坏部ヘラミガキ ＋赤彩					1/6	
7	北海道系の土器片	第3トレンチ・1号溝跡	帯縄文	ハケメ						4－2
8	北海道系の土器片	第3トレンチ・1号溝跡								4－1

第3図　1号溝跡出土遺物

ある。体部下半には火を受けた痕跡が見られる。5 は口縁部が比較的長く「く」の字に外反する単純口縁をもつ小形の甕で、口径は 11.0ｃｍ、体部はほぼ球形を呈する。外面の調整は口縁部にヨコナデ、体部にハケメの後ナデが施されている。口縁部内面の調整はヨコナデである。

▲土師器高坏（第 3 図－6）

坏部下半から脚部上半にかけて残存している。坏部下半は内湾気味に外傾しており、脚部は下方に向かってやや開く円筒状を呈している。器面調整は坏部内外面と脚部外面にヘラミガキが施されており、脚部内面にはナデが見られる。また、坏部内外面と脚部外面は赤彩されている。

▲北海道系の土器片（第 3 図－7・8）

7 は体部の破片と思われ、外面には帯縄文、内面にはハケメが施されている。8 は注口付鉢形土器の口縁部の破片と思われる。口縁部は波状口縁を呈し、注口部は欠損しているが、その貼付の痕がみられる。

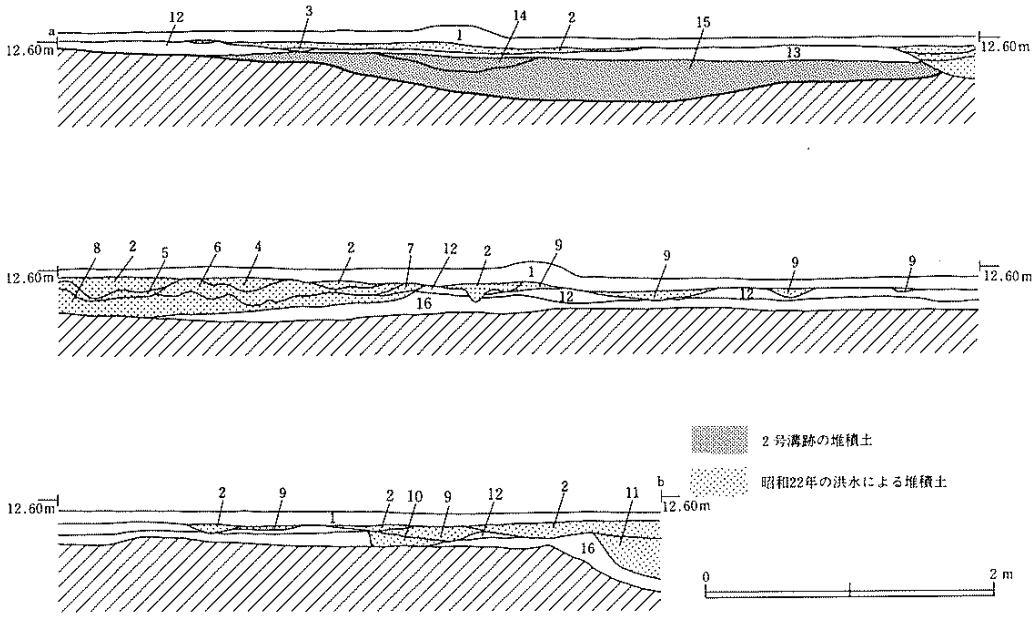
1 号溝跡から出土した遺物のうち、壺・甕はその特徴から塩釜式期から南小泉式期の範疇に納まるものと思われる。また、高坏は山王遺跡第 3 号遺構(高倉：1991)、南小泉遺跡第 12 次調査住居跡(庄子：1985)、新峯崎遺跡土壙(阿部：1991)などから出土したものに類似しており、南小泉式期のものと考えておきたい。

北海道系の土器片は断片的な資料のため型式を限定することは難しいが、8 については後北式の注口付鉢形土器と思われる。

これらの遺物のなかで、土師器が堆積土中からある程度まとまって出土していることや、他の時期の遺物がほとんど見られないことなどから考えると、1 号溝跡の年代は大きく塩釜式期から南小泉式期と推定される。

【2 号溝跡】（第 2・4 図）

第 6・7 トレンチで確認された東西方向に延びる溝である。他のトレンチでは確認されていないため、その前後の延びは不明である。しかし、周辺の地形やトレンチの状況からすると第 3～7 トレンチの北側は旧地形では自然堤防が南側へ張り出していた部分にあたることから、この自然堤防に沿って低いところを巡っている可能性がある。第 6 トレンチでは上幅約 10.0m、下幅約 4.0m、深さ約 0.6mであり、側壁は緩やかに傾斜している。堆積土は炭化物を含む粘土質シルト 2 層からなり、いずれも自然堆積層である。また、第 7 トレンチで溝跡の幅が約 3.0mと狭くなっているのは、この部分の現在の田面が一段低くな



層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	砂質シルト	現水田耕作土	9	灰色 (5Y4/1)	粘土質シルト	8層と同一
2	――――	砂		10	灰色 (10Y4/1)	砂質シルトと粘土質シルトの互層	8層と同一
3	緑灰色(7.5GY5/1)	粘土		11	灰色 (10Y4/1)	砂質シルトと粘土質シルトの互層	8層と同一、洪水の本流
4	黒褐色 (2.5Y3/2)	粘土質シルト		12	灰色 (5Y4/1)	砂質シルト	酸化鉄を多く含む、洪水前の地表近くの土
5	黒褐色 (2.5Y3/1)	粘土質シルト		13	灰色 (5Y4/1)	砂質シルト	12層と同一
6	灰色 (5Y4/1)	粘土質シルト		14	暗緑灰色(7.5GY4/1)	粘土質シルト	2号溝跡の堆積土
7	灰色 (5Y4/1)	粘土質シルト	6層とほぼ同一	15	暗オリーブ色 (5GY4/1)	粘土質シルト	2号溝跡の堆積土、炭化物を含む。
8	灰色 (10Y4/1)	砂質シルトと粘土質シルトの互層		16	暗緑灰色 (10GY5/1)	砂と粘土質シルトの互層	水成堆積層、自然堤防を形成する土

第4図　第6トレンチ東壁断面図

っており、溝の上面がかなり削平を受けているためである。堆積土中からは土師器、須恵器、石器が出土している。これらのうち図示できたものは土師器甕1点、須恵器長長頸瓶1点、石器1点である。

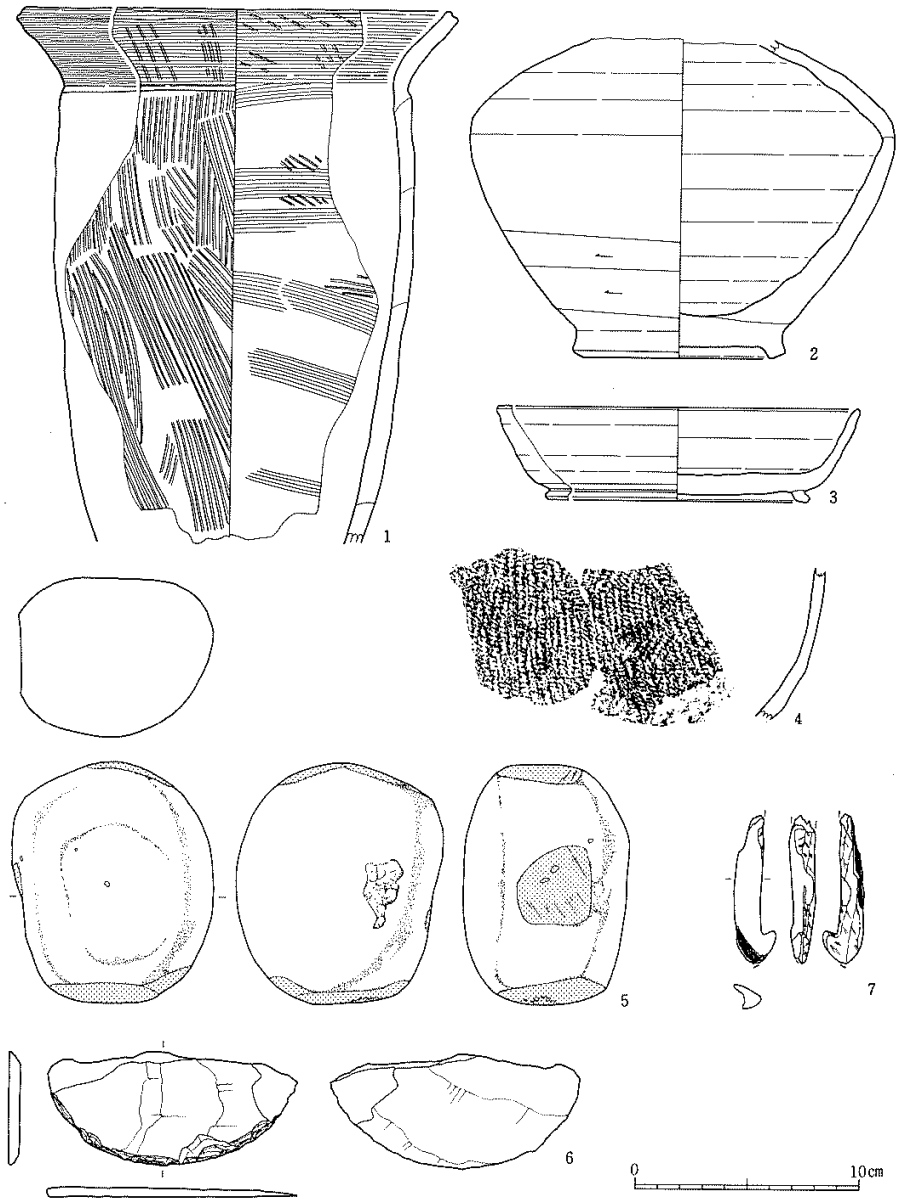
《出土遺物》

▲土師器甕（第5図－1）

長胴形を呈する甕で、底部は欠損している。口縁部は外傾しており、口径19.8cm、頸部には強い稜がみられる。外面の調整は口縁部にハケメの後ヨコナデ、体部にハケメが施されている。内面の調整は口縁部がハケメの後ヨコナデ、体部がハケメの後ナデである。

▲須恵器長頸瓶（第5図－2）

口頸部を欠損しているが、体部の形態から長頸瓶と思われる。体部は肩が張り、調整は内外面ともにロクロ調整であるが、体部外面の下半には回転ヘラケズリが施されている。



番号	種別	出土区・層	外面の調整	内面の調整	底部	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率	図版No.
1	土師器・甕	第6トレンチ・1号溝跡	口縁部 ハケメ→ヨコナデ、体部ハケメ	口縁部 ハケメ→ヨコナデ、体部 ハケメ→ナデ		(19.8)			1/4	
2	須恵器・長頸瓶	第6トレンチ・2号溝跡	ロクロナデ	ロクロナデ					1/2	3－4
3	須恵器・高台付坏	第8トレンチ・3号溝跡	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラケズリ、高台付	(16.2)		4.2	1/3	3－5
4	弥生土器	第9トレンチ・確認面	RLの斜縄文							4－3
番号	種別	出土区・層	備考							図版No.
5	磨石	第4トレンチ・確認面	石材：砂岩、長さ 11.0 cm、幅 9.2 cm、厚さ 7.5 cm							4－4
6	石器	第6トレンチ・2号溝跡	石材：粘板岩、長さ 11.1 cm、幅 5.2 cm、厚さ 0.5 cm、背部欠損、石包丁の未製品の可能性あり							4－5
7	骨角製品	第4トレンチ・確認面	鹿角製							4－6

第5図　2・3号溝跡およびその他の出土遺物

また、外面全体に自然釉が掛かっている。

▲石器（第 5 図－6）

石材は粘板岩で、刃部は片面のみに 2 次加工がみられ、背部は欠損している。研磨痕・孔はみられないが、その形態から石包丁の未製品の可能性がある。

2 号溝跡の堆積土中から出土した須恵器長頸瓶は、体部の肩が張る器形を呈しており、胎土には黒色粒、微砂粒が含まれ、密で精良な特徴をもっている。このような土器については搬入品である可能性が指摘されており、その年代は 7 世紀後半と考えられている(辻：1984)。このことから、2 号溝跡の年代も同時期と思われる。

【3 号溝跡】（第 2 図）

第 8 トレンチの北端で一部が確認された、上幅 12.0m以上の溝跡である。他のトレンチでは確認されていないため、その前後の延びと規模については不明である。2 号溝跡と同様に旧地形の自然堤防にそって低いところを巡っている可能性がある。堆積土の状況をみると、グライ化した粘土質シルトと砂質シルトが互層になって堆積しており、堆積時に水の影響を受けたと考えられる。また、堆積土の上部には炭化物が層状に堆積している。堆積土中からは土師器、須恵器が出土している。これらのうち図示できたのは須恵器高台付坏 1 点のみである。

《出土遺物》

▲須恵器高台付坏（第 5 図－3）

底部は平底で、体部下位に稜をもち、浅い器形を呈する。体部は直線的に開き、口径 16.2ｃm、高台径 11.8ｃmである。調整は内外面ともにロクロ調整で、底部は切り離された後回転ヘラケズリが施されている。

3 号溝跡の堆積土中から出土した須恵器高台付坏のような特徴をもつ土器は、8 世紀前半のものと考えられており、3 号溝跡も同時期と思われる。

また、溝跡の堆積土をみると堆積時に水の影響を強く受けていることがうかがわれることや、壁の立ち上がりが明確でないことから旧河道跡の可能性がある。

【その他の出土遺物】（第 5 図）

第 1～15 トレンチでは遺構に伴わない弥生土器、土師器、須恵器の破片と、石器、骨角製品などが出土している。この内図示できたものは弥生土器の体部の破片 1 点（4）と石

器１点（5）、骨角製品１点（7）である。

Ⅵ　まとめ

1．今回のトレンチ調査の結果と周辺の地形を考え合わせると、調査区の北側には自然堤防が東西に延び、第 3〜7 トレンチの北側で南へ張り出していることがわかった。また、調査区東半の大部分は昭和 22 年の洪水の影響を受けており、西半は低湿地となっている。

2．今回の調査対象地域で遺跡に含まれる部分は第 2 図に示したように、第 3〜10 トレンチの北半である。この地点は遺跡の南縁部にあたり、遺跡の主体は北側の自然堤防上に展開しているものと思われる。

3．調査結果からみると、今回の調査地点は主に古墳時代から奈良時代にかけての遺跡であると思われる。また、1 号溝跡からは北海道系の土器片が出土しており、北海道からの文化的影響を受けていた時期があった事もうかがわれる。

引用･参考文献

阿部恵他（1991）：「新峯崎遺跡」　宮城県村田町文化財調査報告9

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』1

伊東信雄編（1981）：「資料篇11」『宮城県史』34

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

小井川・村田（1991）：「古代における東北地方南部の集落と生業－宮城県を中心として－」『北からの視点』

小林克也（1988）：「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川I遺跡・寒川Ⅱ遺跡－」　秋田県文化財調査報告書167

佐藤信行（1976）：「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』

佐藤信行（1984）：「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究』1

佐藤則之（1992）：「伊治城跡第18次調査」　宮城県文化財調査報告書146集

庄子敦他（1985）：「南小泉遺跡－第12次発掘調査報告書－」　仙台市文化財調査報告書80

鈴木・奥山（1988）：「北日ノ崎窯跡」　宮城県村田町文化財調査報告6

高倉敏明（1981）：「山王遺跡」　多賀城市文化財調査報告書2

高橋・高橋（1991）：「北海道の続縄文文化と東北」『北からの視点』

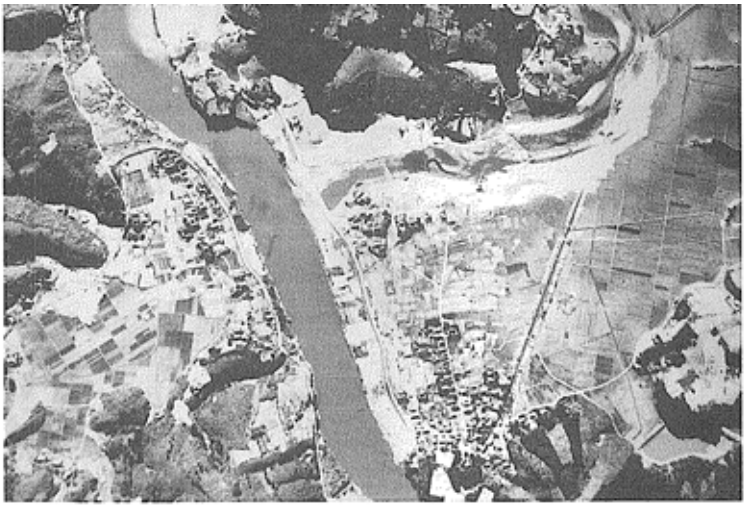
高橋富雄（1972）：「覚城の位置について」　東北学院大学東北文化研究所紀要4

次出淳（1992）：「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集

辻秀人（1984）：「宮城の横穴と須恵器」『宮城の研究』1
中田町史編纂委員会（1977）：『中田町史』
中田町教育委員会（1978）：「白地横穴古墳群」　中田町文化財調査報告書1
宮城県教育委員会（1987）：「硯沢・大沢窯跡　仙台－松島道路建設関係遺跡調査報告書」宮城県文化財調査報告書116

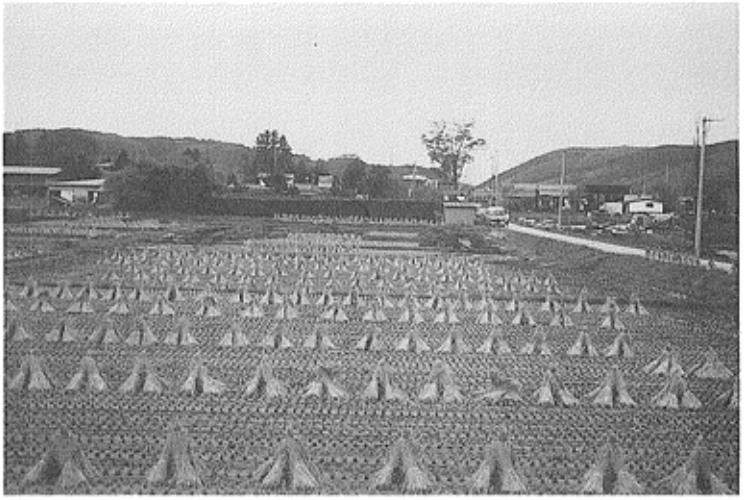
写　真　図　版

1.昭和22年の洪水
による大泉堤防
決壊の状況
(国土地理院
：M638—125)



2.遺跡遠景
(南東より)

3.遺跡近景
(南より)



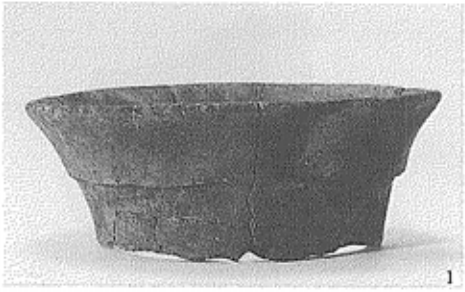
図版1

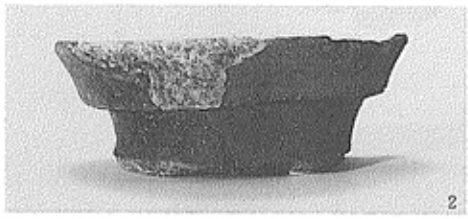
1.第3トレンチ 1号溝跡
（北西より）

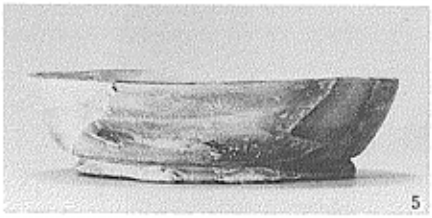
2.第3トレンチ 1号溝跡
遺物出土状況

3.第6トレンチ 東壁断面

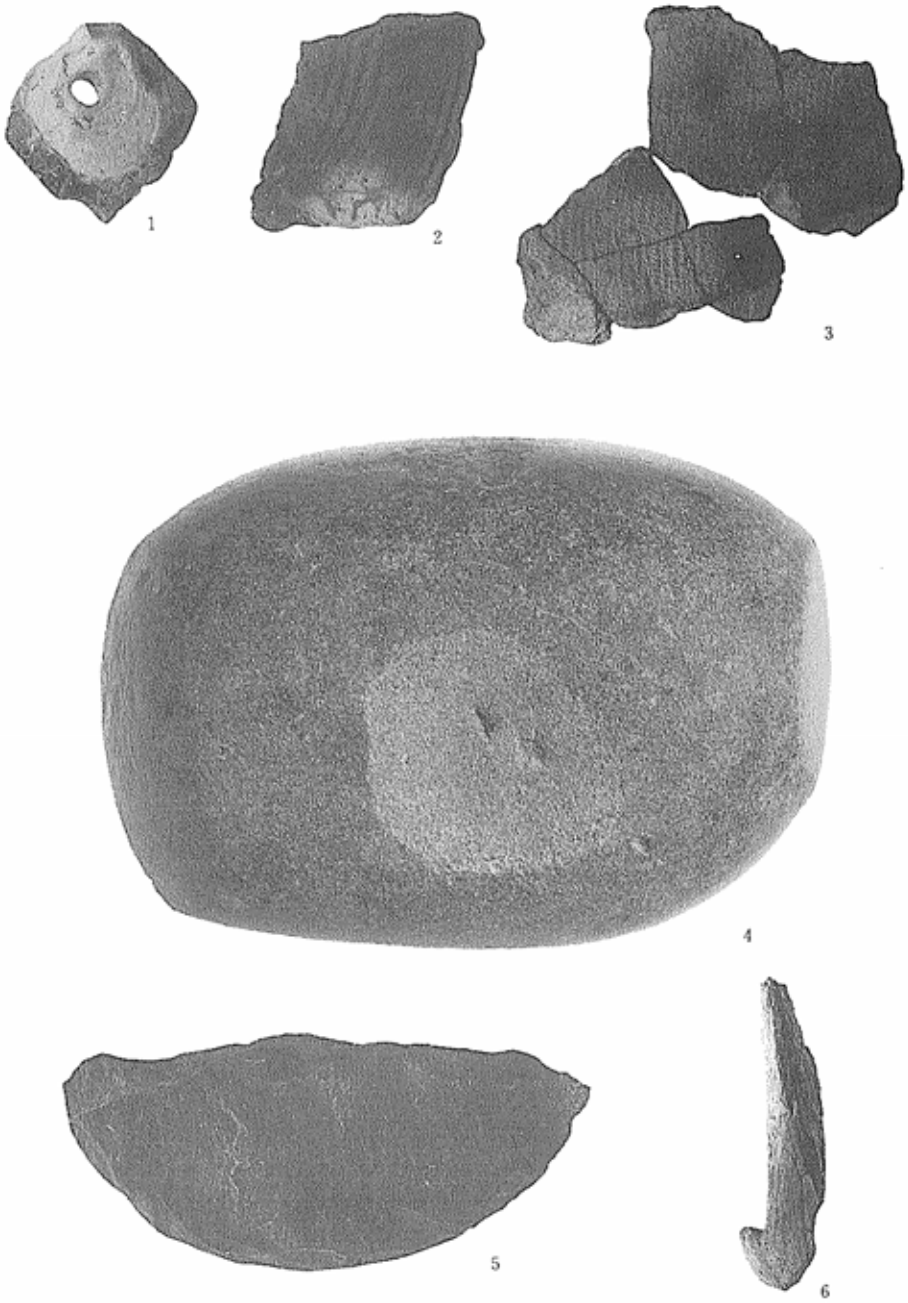
図版2







図版３　１・２・３号溝跡出土遺物　　$S = 1/3$



図版４　１号溝跡およびその他の出土遺物　S＝2/3

新 谷 地 遺 跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境 93
Ⅱ　周辺の遺跡 93
Ⅲ　調査の目的と方法・経過 96
Ⅳ　発見された遺構と出土遺物 96
　　※掘立柱建物跡　※柱穴列　※土壙　※溝跡
Ⅴ　まとめ 100
引用･参考文献 101
写真図版 103

調 査 要 項

遺 跡 名：新谷地遺跡（しんやちいせき）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：27057
遺跡記号：ＯＴ
所 在 地：宮城県古川市小林字新谷地
調査原因：県営ほ場整備事業
調査面積：約 31000 ㎡
調査期間：平成 4（1992）年 11 月 24 日～12 月 4 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：小村田達也、三好秀樹

新 谷 地 遺 跡

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境（第1・2図）

新谷地遺跡は、古川市宮沢小林字新谷地に所在する。遺跡は東北自動車道古川インターチェンジの北西方向約 3.5ｋｍの地点に位置している。

本遺跡の所在する古川市は宮城県の北西部に位置しており、北部一帯は奥羽山脈から派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が東へ展開し、その南には丘陵地帯の南麓を東南方向に流れる江合川や市の西端を東流する鳴瀬川によって形成された肥沃で広大な大崎平野が広がっており、県内有数の穀倉地帯となっている。

新谷地遺跡は古川南の北部一帯に展開する築館丘陵のほぼ南端、大崎平野に接する標高約 35～39mのなだらかな南斜面に立地しており、現状は水田、畑地および牧草地となっている。

Ⅱ　周辺の遺跡（第1図）

本遺跡が位置する丘陵地帯と大崎平野が隣接する地域一帯には多数の遺跡が存在しており、その時代は旧石器時代から中・近世にわたっている。中でも古墳時代の遺跡は数多く、仙台・名取市と並び宮城県内有数の古墳文化の中心地となっている。ここでは古墳時代から奈良・平安時代にかけてを中心に新谷地遺跡を取りまく環境を概観したい。

本遺跡の北西部、同一丘陵上に隣接して新谷地北遺跡（木皿：1992）がある。一昨年行なわれた発掘調査で、100 基以上の土壙墓が検出され注目を集めた。土壙墓は 8 世紀前半から 10 世紀前半以降にかけて存続していたと考えられており、その出土遺物には関東系の土器が見られる。この土壙墓群は、本遺跡の北方約 1.0ｋｍにある塚原古墳群（志間：1970）や、同様に関東系の土器が検出された色麻古墳群(古川：1982 他)、朽木橋横穴古墳群(佐々木・阿部：1983)など周辺の群集墳とは埋葬の形態において顕著な違いをみせている。

また、新谷地遺跡の西方約 0.5ｋｍには小寺遺跡（宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨：1992）、西方約 3.0ｋｍには名生館官衙遺跡（多賀城跡調査研究所：1981 他）、東方約 2.5ｋｍには宮沢遺跡（宮城県教委：1980）などの城柵官衙遺跡が近接して存在している。これらの遺跡のうち、名生館官衙遺跡では 8 世紀前後を中心に、掘立柱建物跡、一本柱列による塀跡、竪穴住居跡などが多数検出されている。小寺遺跡、宮沢遺跡は 8 世紀後半から 9 世紀にかけての時期をそれぞれ中心とした遺跡であり、築地跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されている。

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	新谷地遺跡	段丘	包含地	古代
2	新谷地北遺跡	段丘	土橋墓、集落	古代
3	宮沢要害跡	丘陵	城館・要害	中世、近世
4	宮沢要害城下跡	丘陵	城下	近世
5	国指定 大吉山瓦窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良
6	国指定 宮沢遺跡	丘陵	官衙	弥生、奈良、平安
7	倉の沢A遺跡	丘陵端	包含地	縄文前、古代
8	倉の沢B遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代
9	市ヶ坂館跡	丘陵	城館	中世
10	高合遺跡	丘陵麓	包含地	縄文早・前
11	雨生沢遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文晩
12	上前田遺跡	丘陵	包含地	縄文前、平安
13	蛇沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、弥生、古代
14	大谷川遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、奈良、平安
15	大谷川逆沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生
16	関久田B遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
17	若林B遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代
18	関久田遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生、奈良、平安
19	関久田A遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代
20	逆沢A遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古代
21	逆沢B遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳
22	若林遺跡	丘陵頂	包含地	古代
23	若林A遺跡	谷底平野	包含地	縄文、弥生
24	西館A遺跡	谷底平野	包含地	縄文前、弥生
25	雨生沢城跡	丘陵端	城館、包含地	縄文前、古代、中世
26	野崎遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生
27	城内遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
28	畑谷地遺跡	丘陵	包含地	縄文
29	長者原A遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
30	北原遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
31	長者原B遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
32	長浦遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
33	化女沼遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
34	新田A遺跡	丘陵斜面	包含地、窯跡	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古墳、平安
35	村山遺跡	丘陵頂部	包含地	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古墳～平安
36	疎敗乱木遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器前～晩、縄文前・晩、弥生、古代
37	中畑・陣館跡	丘陵斜面	城館	室町
38	柳沼遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文早・前・晩、弥生、古墳、平安
39	松森古墳群	丘陵尾根	方墳、円墳	古墳
40	堺館跡	丘陵斜面	城館	室町
41	成田山遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文前・晩、弥生、奈良
42	松森遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生
43	新田B遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
44	一本松B遺跡	丘陵尾根	包含地	旧石器
45	一本松遺跡	丘陵頂	包含地	旧石器、縄文早前晩、弥生、古墳、平安
46	一本松古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳後
47	一本松古墳群	丘陵	円墳	古墳
48	新田南遺跡	丘陵上	包含地	旧石器、縄文早・晩、弥生、古墳、古代
49	松森南遺跡	丘陵	包含地	縄文早・前・晩、弥生
50	成田谷地田遺跡	丘陵尾根	包含地	旧石器
51	鶴巻遺跡	丘陵頂部	包含地	旧石器、縄文早、弥生
52	成田B遺跡	丘陵	包含地	縄文
53	馬場壇A遺跡	丘陵	包含地、円墳	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古墳
54	大谷地遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文早
55	北馬場壇遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文早・晩、弥生、古墳
56	一の沢古墳	丘陵	円墳	古墳
57	一の沢遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文、弥生、古墳
58	塚原A遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、弥生
59	市史跡 塚原古墳群	自然堤防	円墳	古墳後
60	塚原B遺跡	丘陵	包含地	縄文晩、弥生
61	浦越東遺跡	丘陵上	包含地	旧石器、弥生
62	浦越北遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、弥生
63	浦越遺跡	丘陵上	包含地	旧石器後、縄文晩、古代
64	小寺囲遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器後、縄文、弥生
65	日光山古墳群（小寺囲支群）	丘陵尾根	方墳、円墳	古墳
66	成田A遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文早・前、古代
67	新庚壇遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
68	三丁目城跡	丘陵	城館	中世
69	小寺遺跡	丘陵	官衙	古代
70	北の前遺跡	丘陵斜面	包含地、瓦窯跡	縄文、古代
71	西館遺跡	丘陵	包含地	縄文、弥生、古代
72	上谷遺跡	丘陵	包含地	弥生、古代
73	宇南遺跡	丘陵	包含地	奈良、平安
74	後壇遺跡	段丘	包含地	古代
75	新庚壇遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
76	一本杉遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、平安
77	長者原D遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
78	長者原E遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
79	山の上古墳群	丘陵	円墳、方墳	古墳
80	長浦古墳	丘陵	円墳、塚	古墳、中世
81	川鯰館跡	丘陵	城館	中世
82	内林古墳群	丘陵	古墳	古墳後、奈良
83	下田遺跡	段丘	包含地	古代
84	杉ノ下遺跡	丘陵麓	包含地	古代
85	日光山古墳群（延順寺支群）	丘陵尾根	円墳	古墳
86	卿の関遺跡	段丘	包含地	平安
87	道場囲遺跡	丘陵	包含地	古代
88	小林杉の下窯跡	丘陵斜面	瓦窯跡	平安
89	卿の池囲遺跡	段丘	包含地	古代
90	灰塚遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古代、中世
91	小林一本杉遺跡	段丘	包含地	弥生
92	新田町遺跡	段丘	包含地	弥生、古墳
93	南小林遺跡	自然堤防	包含地	古代
94	石母田館跡	自然堤防	城館	近世
95	宮田天神遺跡	自然堤防	包含地	古代
96	朝日遺跡	自然堤防	包含地	古代
97	鹿島西遺跡	自然堤防	包含地	古代
98	夜鳥前遺跡	自然堤防	包含地	古代
99	南溝遺跡	自然堤防	包含地	古代
100	新田城跡	自然堤防	城館、包含地	古代、中世
101	月山囲遺跡	沖積平野	包含地	古代
102	境遺跡	自然堤防	包含地	古代
103	小泉遺跡	自然堤防	包含地	

第１表　周辺の遺跡地名表

さらに、本遺跡の西方 0.4ｋｍには古代の瓦が出土する杉ノ下遺跡、北面約 0.7ｋｍには多賀城・多賀城廃寺に瓦を供給したことで著名な大吉山瓦窯跡などの窯跡があり、周辺の城柵官衙遺跡との関係が注目されている。

新谷地北遺跡や色麻古墳群、朽木橋横穴古墳群などで出土した関東系の土器は、名生館官衙遺跡や宮沢遺跡などの周辺に位置する城柵官衙遺跡からも出土しており、大崎平野お

よびそれらを取り囲む丘陵地帯に分布する諸遺跡間の密接な関係と、関東地方からの強い影響が指摘されている。

III　調査の目的と方法・経過（第2図）

今回の調査は、宮沢地区県営ほ場整備事業に伴う確認調査である。

調査の対象地域は農道小林・川北線の西側にあたり、一昨年に調査が行なわれた新谷地北遺跡の南東に隣接する地域である。この地域は現在水田、畑地または牧草地となっており、調査対象面積は約 31000 ㎡である。

調査は遺構が分布する範囲を確認することを目的とし、任意の方向・規模のトレンチ調査を 11 月 24 日から 12 月 4 日にかけて行なった。調査対象地域は来年度の作付けを予定しているため、トレンチ調査が行なえない部分もあり、可能な範囲内で合計 16 本、約 2100 ㎡のトレンチ調査を行なった。トレンチ調査部分と遺構については、平板測量による平面図を作成し、写真記録は 35mmカラー・リバーサル写真によって行なった。

IV　発見された遺構と出土遺物

今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡 2 棟、柱穴列 2 条、土壙 18 基、溝跡 1 条であり、いずれも地山面で確認された。また、第 2 トレンチの表土中から石器 1 点（珪質頁岩製の剥片、時期不明）、第 11 トレンチの表土中から平瓦 1 点（第 4 図－1）が出土しているが、遺構に伴う遺物は出土していない。

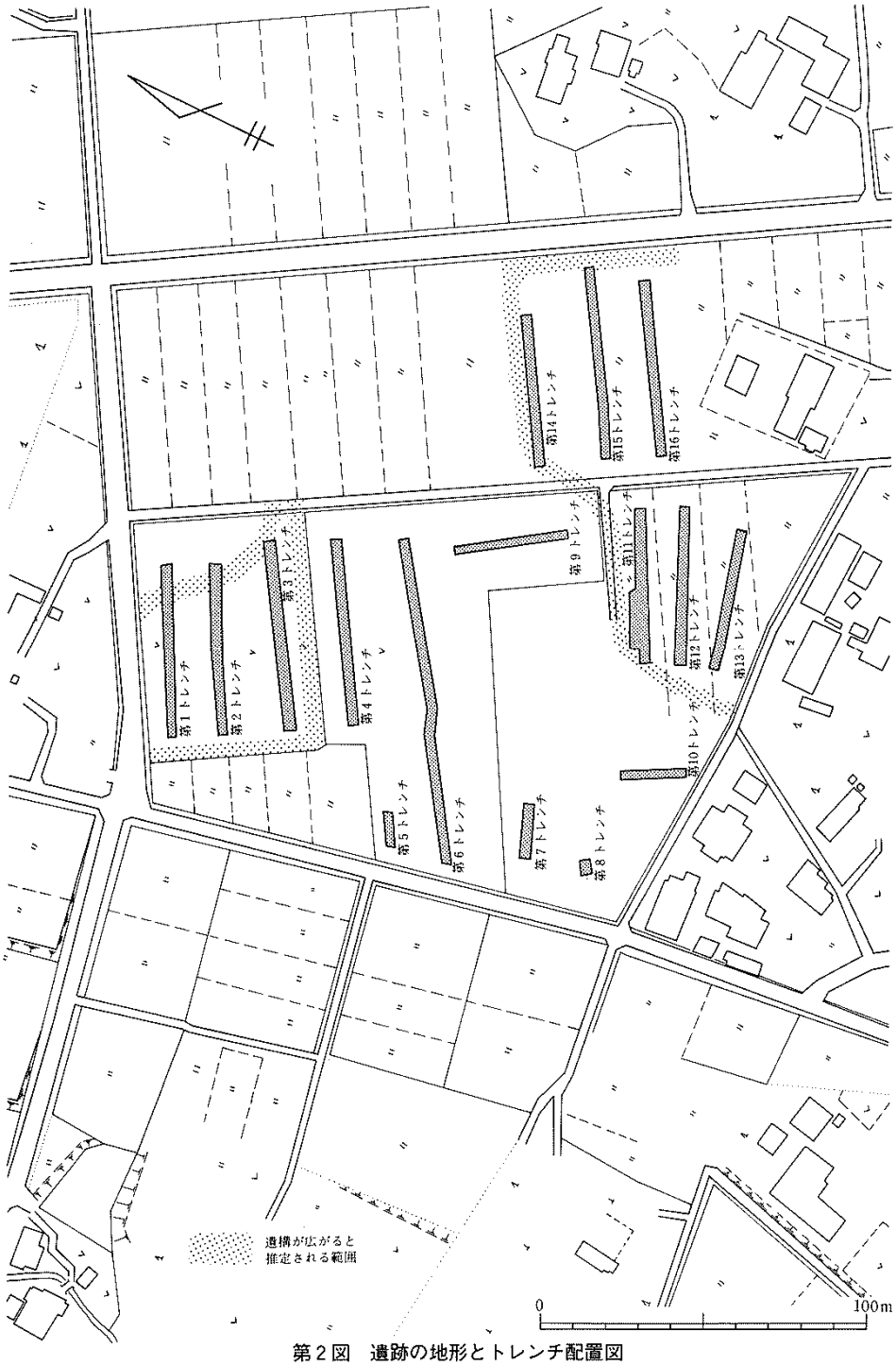
【掘立柱建物跡】（第 3 図）

第 11 トレンチで 2 棟確認されている。1 号建物跡と 2 号建物跡は桁行 2 間、梁行 2 間の東西棟の建物で、ほぼ同位置で重複しており、1 号建物跡より 2 号建物跡が新しい。

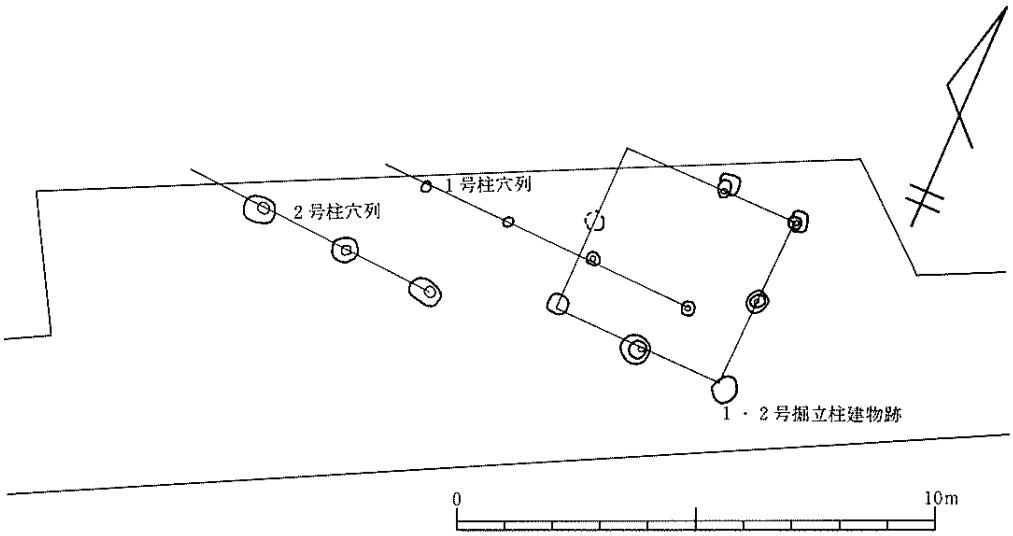
1 号建物跡の規模は桁行 2 間が約 3.8m、梁行 2 間が約 3.7mで、東側柱列の方向はほぼ北を向いている。柱間寸法は桁行が南側柱列で西から 1.9m･1.9m、梁行が東側柱列で北から 1.8m・1.9mである。柱穴は径 40～50ｃmで大きさと形状は一定しない。

2 号建物跡は規模・方向ともに 1 号建物跡と同一であるが、柱穴は径 20～40ｃmと小さくなり、直径約 10ｃm、円形の柱痕跡が確認されている。

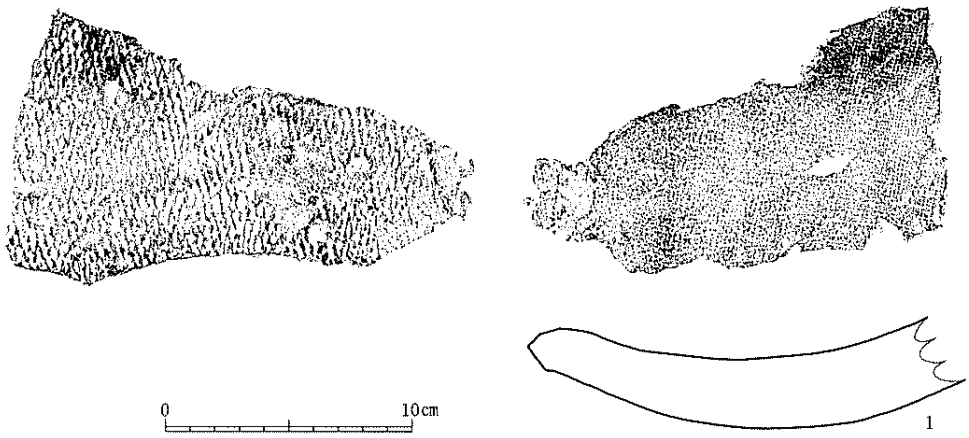
1 号建物跡と 2 号建物跡はほぼ同位置で重複しており、規模・方向ともに同一であることから 1 号建物跡を建て替えたものが 2 号建物跡であると考えられるが、その年代については不明である。



第２図　遺跡の地形とトレンチ配置図



第3図　第11トレンチ遺構分布図



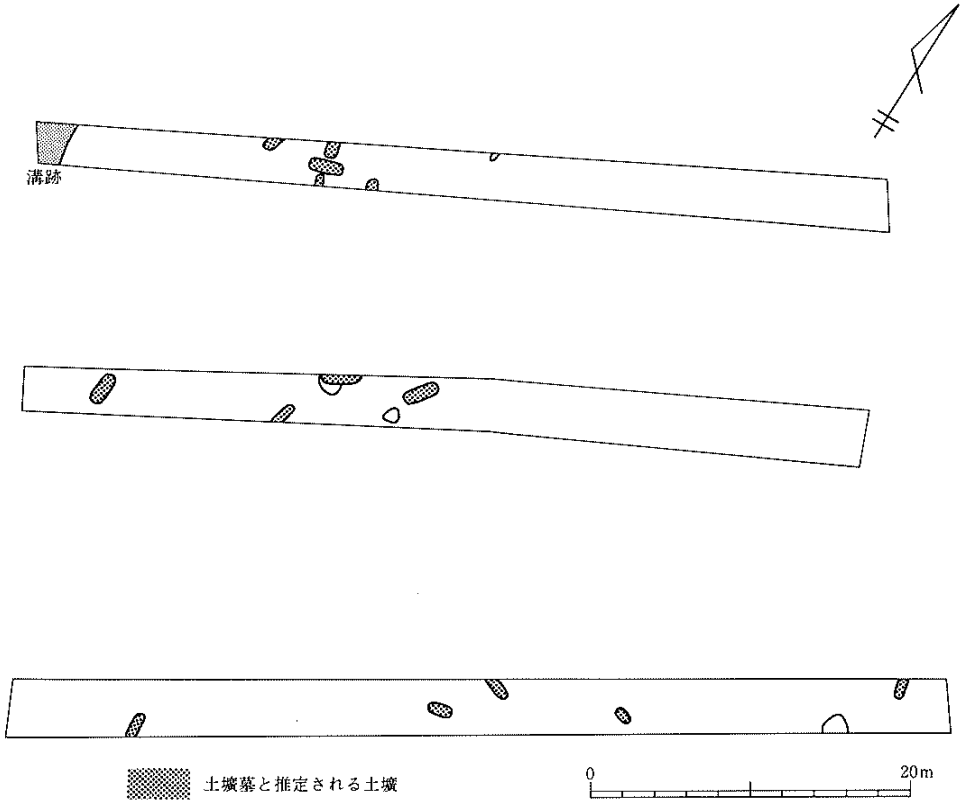
番号	種別	出土区・層	備考	図版No.
1	平瓦	第11トレンチ、表土	1枚作り、凹面－糸切り痕・布目・部分的なナデ、凸面－叩き目・縄叩き目のつぶれ	2－3

第4図　出土遺物

【柱穴列】（第3図）

第11トレンチで2条確認されている。掘立柱建物跡の一部である可能性がある。

1号柱穴列は柱穴が東西方向に4個並んで検出されており、柱穴間隔は西から1.8m・1.8m・2.1mである。柱穴は径20～30ｃｍで大きさと形状は一定せず、直径約10ｃｍ、円形の柱痕跡が東側2個の柱穴で確認されている。



第５図　第１～３トレンチ遺構分布図

２号柱穴列は柱穴が東西方向に３個並んで検出されており、柱穴間隔は西から1.9m･1.9mである。柱穴は径50～70ｃｍで大きさと形状は一定しないが、いずれの柱穴にも径約20ｃｍ、方形の柱痕跡が確認されている。

１号柱穴列と２号柱穴列はともに西側方向に延びる可能性はあるが、その性格・年代については不明である。

【土壙】（第５図）

第1～3トレンチで18基確認されている。

検出された土壙のうち14基は、その形態が長方形もしくは長楕円形を呈しており、長軸が1.2～2.0m、短軸が0.6～0.8mである。また、その堆積土は地山ブロックを多く含んでおり、人為的に埋められた土である可能性が強い。

これら 14 基の土壙はその形態･規模が新谷地北遺跡で検出された土壙墓と非常に類似しており、また、同一の丘陵の南斜面に限り発見されていることから、新谷地北遺跡の土壙墓群と一連のものであると思われる。

【溝跡】（第 5 図）

第 1 トレンチの西端で 1 条確認されている。この溝跡の堆積土上部では灰白色火山灰が層を成していることからそれ以前に機能していた溝跡と考えられるが、その具体的な規模・年代については不明である。

【出土遺物】

出土遺物のうち図示できたものは第 11 トレンチから出土した平瓦 1 点のみである。

[平瓦]（第 4 図－1）側面の角度と糸切り痕が瓦の長辺に対して縦位をとること、模骨痕が見られないことから、1 枚作りによる平瓦であると思われる。凹面には糸切り痕、布目、部分的なナデの痕跡、凸面には縄叩き目、縄叩き目のつぶれの痕跡が認められる。これらの痕跡から布を敷いた凸型台上で凸面を縄を巻いた原体で叩きしめた後､凹型台上に置き、凹面をナデ調整した製作工程がうかがわれるが、凸面には凹型台の側端部圧痕や方形突出などが見られないため明確ではない。また、側端部はヘラケズリによって面が作り出されている。このような平瓦は多賀城跡－政庁跡本文編（進藤他：1982）によるとⅡB類にあたり、多賀城の創建期以降連続して見られることから時期を限定することは難しい。

Ⅴ　まとめ

1. 今回の調査で遺構が確認されたのは第 1～3 トレンチと第 11 トレンチに限られる。また、トレンチ調査の結果から旧地形では調査範囲内の西縁に沿って沢が入っていたことがわかった。さらに、第 1～3 トレンチの東端とそれ以東、第 4～10 トレンチが配されている一段低くなっている部分は以前にかなり削平を受けていることも明らかとなった。
2. 第 1～3 トレンチで確認された土壙はその形態･規模が新谷地北遺跡で検出された土壙墓と非常に類似しており、同一の丘陵上で検出されていることから新谷地北遺跡の土壙墓群と一連のものであると思われる。また、この土壙墓群の分布する範囲は第 1～3 トレンチが配されている一段高く旧地形をとどめている部分に限られており、その密度は新谷地北遺跡と比べると稀である。
3. 第 11 トレンチでは掘立柱建物跡、柱穴列が検出されたが、周辺のトレンチではこれら

の遺構が確認されていないこと、遺構に伴う遺物が出土していないことなどからその性格・年代などについては不明である。しかし、第 11～16 トレンチが配されている部分は後世の削平をほとんど受けておらず、遺構が展開する可能性もある。

引用･参考文献

木皿・早川（1992）：「新谷地北遺跡」　宮城県文化財調査報告書146

斉藤・高橋・真山（1980）：「宮沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」　宮城県文化財調査報告書69

斉藤・後藤（1985）：「古川市宮沢遺跡－化女沼ダム建設関係Ⅰ」　宮城県文化財調査報告書105

佐々木・阿部（1983）：「朽木橋横穴古墳群」　宮城県文化財調査報告書96

佐々木茂**楨**（1981）：「大吉山瓦窯跡群」『宮城県史』34

志間泰治（1970）：「古川市塚原古墳群」　古川市文化財調査報告1

白鳥・後藤（1986）：「名主館遺跡Ⅵ－Ⅲ合戦原瓦窯跡の調査」　多賀城関連遺跡発掘調査報告書11

進藤秋輝他（1982）：「多賀城跡－政庁跡本文編」　宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所

古川市教育委員会（1986）:「名主館遺跡Ⅶ－昭和61年度発掘調査概報　宮城県古川市文化財調査報告書6

古川市教育委員会（1992）:「小寺遺跡発掘調査概要」　宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨

古川一明（1982）：「色麻古墳群－宮城県営ほ場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」　宮城県文化財調査報告書86

古川一明（1983）：「色麻古墳群－宮城県営ほ場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」　宮城県文化財調査報告書95

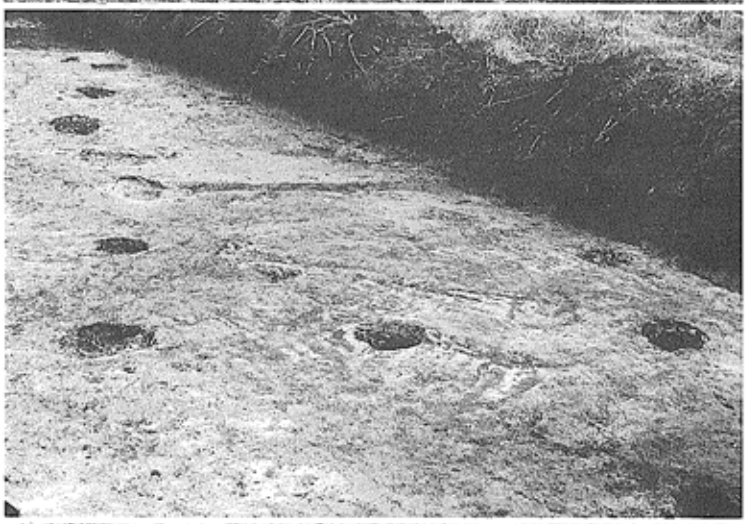
古川一明（1984）：「色麻古墳群－宮城県営ほ場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書」　宮城県文化財調査報告書100

宮城県教育委員会（1987）：「硯沢・大沢窯跡－仙台・松島道路建設関係遺跡調査報告書」　宮城県文化財調査報告書116

宮城県多賀城跡調査研究所（1981）:「名主館遺跡Ⅰ－玉造柵推定地」　多賀城関連遺跡発掘調査報告書 6

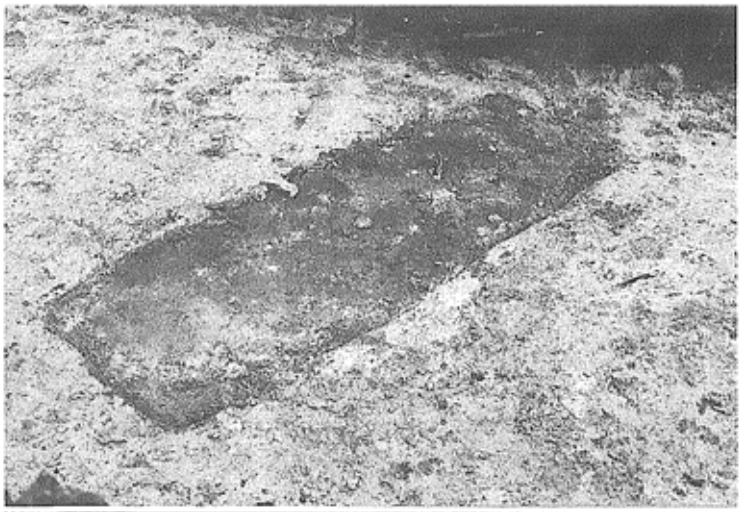
1.遺跡遠景
（南西より）

2.第11トレンチ遺構分布
状況（南東より）

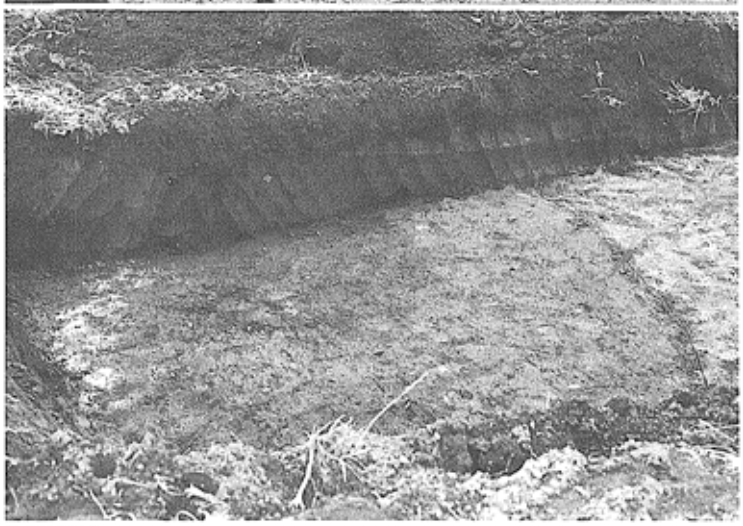


3.1・2号建物跡の柱穴

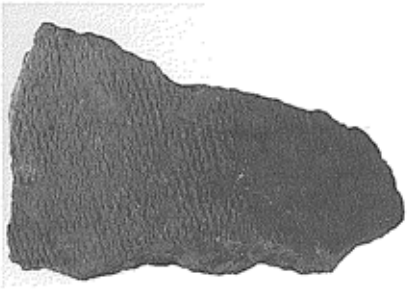
図版1



1.第1トレンチで確認
された土壙



2.第1トレンチで確認
された溝跡（南より）



3.第11トレンチ出土の平瓦
S＝1/3

図版2

宮 沢 要 害 跡

目　　次

Ⅰ　はじめに 107
Ⅱ　宮沢要害の変遷と構造 107
Ⅲ　発見された遺構と出土遺物 110
　※掘立柱建物跡　※柱穴列　※土壙　※溝跡　※出土遺物
Ⅳ　まとめ 117
引用･参考文献 118
写真図版 119

調 査 要 項

遺 跡 名：宮沢要害跡（みやざわようがいあと）
　　宮城県遺跡地名表登載番号：27098
遺跡記号：ＭＸ
所 在 地：宮城県古川市宮沢裏馬田町
調査原因：県営ほ場整備事業
調査面積：約 120 ㎡
調査期間：平成 4（1992）年 12 月 7 日～12 月 11 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：小村田達也、三好秀樹

宮 沢 要 害 跡

Ⅰ　はじめに（第 1・2・4 図）

今回の調査は宮沢地区県営ほ場整備事業に係わる幹線道路部分の事前調査である。調査地点は古川市宮沢裏馬田町に所在しており、宮城県遺跡地図（宮城県教委：1988）では西館遺跡の範囲に含まれている。当初、調査は幹線道路が西館遺跡の範囲内に含まれていることから、この部分の遺跡の状況を把握することを目的とした確認調査であった。平成 4 年 12 月 7 日に確認調査を行なった結果、調査区から柱穴、土壙、溝跡などの遺構が確認されたため、引き続き 12 月 8 日から 12 月 11 日にかけて事前調査を行なった。

本遺跡の調査は西館遺跡の調査として行なわれたが、出土した遺物の大半は近世の陶磁器類であり、予想されていた西館遺跡の性格とは異なっていた。また、貞享二年（1685）に作成された「粟原郡宮沢村居館之絵図」を現在の地籍図上におとした図（第 4 図：古川市教育委員会、柴原一雄氏により作成されたものを一部改変）によると調査地点は要害の南側に広がる城下の下中屋敷にあたることがわかった。これらのことから本遺跡は宮沢要害跡に含めることにした。

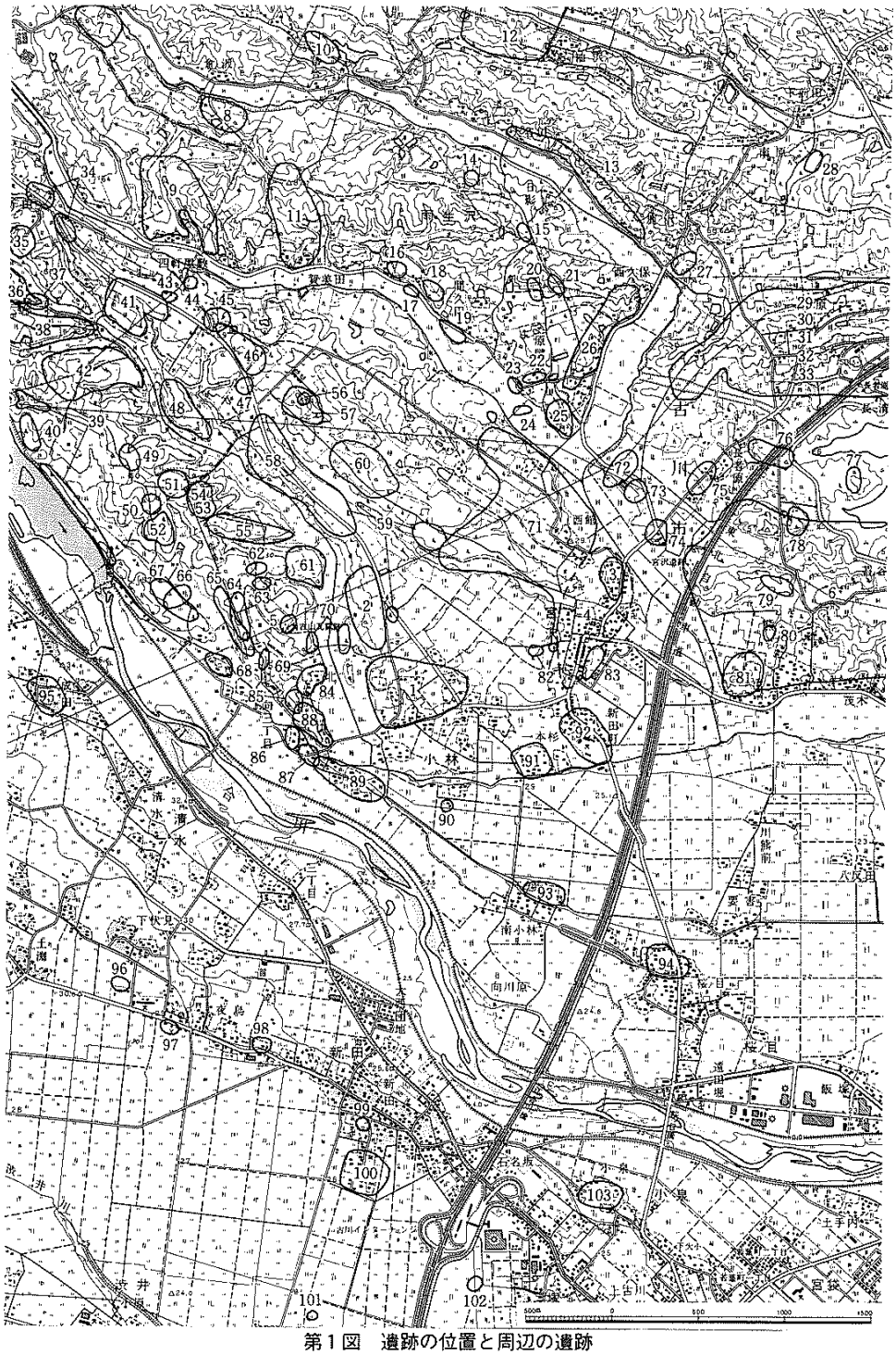
調査は重機によって調査区の表土を除去した後、遺構の精査を行なった。調査面積は 120 ㎡であり、検出された遺構については平板測量および 20 分の 1 の遣り方測量によって平面図を作成した。写真記録については 35mm白黒写真、同カラー・リバーサル写真によって行なった。

Ⅱ　宮沢要害の変遷と構造（第 4 図、写真図版 2）

宮沢要害は古川市宮沢に所在し、地理的には大崎平野の北部、奥羽山脈から派生する長岡丘陵の末端の台地上に立地している。遺跡が位置する標高は約 40～50mであり、東方約 2.0ｋｍの地点には古代の城柵官衙遺跡と考えられている宮沢遺跡（宮城県教委：1980）がある。

「宮沢要害」の地は、中世は大崎氏の支配下に置かれていたと考えられており、『貞山公治家記録』の天正十八年（1590）十二月条には、大崎・葛西一揆の際に「岩崎讃岐父子及ヒ岩崎伯耆、鎌田彦右衛門、飯塚次郎右衛門、芳賀蔵人」などが宮沢城に籠って、伊達家の軍に抵抗したことが記されている。

天正十八年以降、伊達家の支配下となった宮択要害には、多賀谷氏、後藤氏、上郡山氏が引き続き知行主として入封している。延享四年（1747）には長沼家が知行主となり、そ



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	断谷地遺跡	段丘	包含地	古代
2	断谷地北遺跡	段丘	土塁群、集落	古代
3	宮沢要害跡	丘陵	城館・要害	中世、近世
4	宮沢要害城下跡	丘陵	城下	近世
5	国指定 大吉山瓦窯跡	丘陵斜面	窯跡	奈良
6	国指定 宮沢遺跡	丘陵	官衛	弥生、奈良、平安
7	倉の沢A遺跡	丘陵端	包含地	縄文前、古代
8	倉の沢B遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代
9	市ヶ坂館跡	丘陵	城館	中世
10	落合遺跡	丘陵麓	包含地	縄文早・前
11	雨生沢遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文晩
12	上前田遺跡	丘陵	包含地	縄文前、平安
13	蛇沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、弥生、古代
14	大谷川遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、奈良、平安
15	大谷川逆沢遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、弥生
16	間久田B遺跡	丘陵麓	包含地	縄文
17	若林B遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代
18	間久田遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生、奈良、平安
19	間久田A遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、古代
20	逆沢A遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文、古代
21	逆沢B遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳
22	若林遺跡	丘陵頂	包含地	古代
23	若林A遺跡	谷底平野	包含地	縄文、弥生
24	西館A遺跡	谷底平野	包含地	縄文前、弥生
25	南生沢城跡	丘陵端	城館、包含地	縄文前、古代、中世
26	野崎遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生
27	城内遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
28	畑谷地遺跡	丘陵	包含地	縄文
29	長者原A遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
30	北原遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
31	長者原B遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
32	長清遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
33	化女沼遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、奈良
34	新田A遺跡	丘陵斜面	包含地、窯跡	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古墳、平安
35	村山遺跡	丘陵頂部	包含地	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古墳～平安
36	薙散乱木遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器前～晩、縄文前・晩、弥生、古代
37	中館・陣館跡	丘陵斜面	城館	室町
38	御口遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文早・前・晩、弥生、古墳、平安
39	松森古墳群	丘陵尾根	方墳、円墳	古墳
40	堺館跡	丘陵斜面	城館	室町
41	成田山遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文前・晩、弥生、奈良
42	松森遺跡	丘陵斜面	包含地	弥生
43	新田B遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
44	一本松B遺跡	丘陵尾根	包含地	旧石器
45	一本松遺跡	丘陵頂	包含地	旧石器、縄文早前晩、弥生、古墳、平安
46	一本松古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳後
47	一本松古墳群	丘陵	円墳	古墳
48	新田南遺跡	丘陵上	包含地	旧石器、縄文早・晩、弥生、古墳、古代
49	松森南遺跡	丘陵	包含地	縄文早・前・晩、弥生
50	成田谷地田遺跡	丘陵尾根	包含地	旧石器
51	城換遺跡	丘陵頂部	包含地	旧石器、縄文早、弥生
52	成田B遺跡	丘陵	包含地	縄文
53	馬場壇A遺跡	丘陵	包含地、円墳	旧石器、縄文早・前・晩、弥生、古墳
54	大谷地遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文早
55	北馬場壇遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文早・晩、弥生、古墳
56	一の沢古墳	丘陵	円墳	古墳
57	一の沢遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文、弥生、古墳
58	塚原A遺跡	丘陵	包含地	旧石器、縄文晩、弥生
59	市史跡 塚原古墳群	自然堤防	円墳	古墳後
60	塚原B遺跡	丘陵	包含地	縄文晩、弥生
61	浦越東遺跡	丘陵上	包含地	旧石器、弥生
62	浦越北遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、弥生
63	浦越遺跡	丘陵上	包含地	旧石器後、縄文晩、古代
64	小寺囲遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器後、縄文、弥生
65	日夫山古墳群（小寺囲支群）	丘陵尾根	方墳、円墳	古墳
66	成田A遺跡	丘陵斜面	包含地	旧石器、縄文早・前、古代
67	断庚壇遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
68	三丁目城跡	丘陵	城館	中世
69	小寺遺跡	丘陵	官衛	古代
70	北の前遺跡	丘陵斜面	包含地、瓦窯跡	縄文、古代
71	西館遺跡	丘陵	包含地	縄文、弥生、古代
72	上谷遺跡	丘陵	包含地	弥生、古代
73	宇南遺跡	丘陵	包含地	奈良、平安
74	庚壇遺跡	段丘	包含地	古代
75	断庚壇遺跡	丘陵	包含地	縄文、古代
76	一本杉遺跡	丘陵麓	包含地	縄文、平安
77	長者原D遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
78	長者原E遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
79	山の上古墳群	丘陵	円墳、方墳	古墳
80	長清古墳	丘陵	円墳、線	古墳、中世
81	川熊館跡	丘陵	城館	中世
82	内林古墳群	丘陵	古墳	古墳後、奈良
83	下田遺跡	段丘	包含地	古代
84	杉ノ下遺跡	丘陵麓	包含地	古代
85	日夫山古墳群（花姫寺支群）	丘陵尾根	円墳	古墳
86	舞の関遺跡	段丘	包含地	平安
87	道場囲遺跡	丘陵	包含地	古代
88	小林杉の下窯跡	丘陵斜面	瓦窯跡	平安
89	御の池囲遺跡	段丘	包含地	古代
90	灰塚遺跡	自然堤防	包含地	縄文、古代、中世
91	小林一本杉遺跡	段丘	包含地	弥生
92	新田町遺跡	段丘	包含地	弥生、古墳
93	南小林遺跡	自然堤防	包含地	古代
94	石母田館跡	自然堤防	城館	近世
95	宮田天神遺跡	自然堤防	包含地	古代
96	朝日遺跡	自然堤防	包含地	古代
97	鹿島西遺跡	自然堤防	包含地	古代
98	夜鳥前遺跡	自然堤防	包含地	古代
99	南清遺跡	自然堤防	包含地	古代
100	新田城跡	自然堤防	城館、包含地	古代、中世
101	月山囲遺跡	沖積平野	包含地	古代
102	境遺跡	自然堤防	包含地	古代
103	小泉遺跡	自然堤防	包含地	

第１表　周辺の地名表

の後幕末まで宮沢要害を拝領している。（伊藤：1972、薩日内：1982、柴桃：1973）

仙台藩において、要害制は天和元年（1681）の幕府令達を契機に、翌二年の吟味をもって事実上成立し、貞享四年（1687）名実ともに確立したと考えられている（小林：1982）。しかし、いかなる条件をもって要害としているかを明確に示した文献は残されておらず、天和の時期に見られる「居館」(要害の地であり、所領内に古館があってこれを除屋敷とし

て拝領し、伝馬を勤め、市の立つ町場を拝領する）がのちに見られる要害に相当するいう説（佐藤：1979）や「所」の一部の地区が要害であるという説（小林：1982、斉藤：1981）などがあり、軍事的要地、地域発展、交通の要地として捉えられている。

また、元禄十四年（1701）の『肯山公治家記録』には、要害・所拝領という知行形態が家臣としての班・格式を決定していることが示されている。

貞享二年（1685）に作成された「栗原郡宮沢村居館之絵図」を見ると、宮沢要害は本丸・二の丸・下中屋敷より構成されており、いずれも外堀に囲まれている。本丸は東西方向に広がり、堀の内側には土塁が巡らされている。二の丸は本丸を囲むように南北方向に広がり、下中屋敷との間には部分的に土塁、内堀、柵が見られる。下中屋敷の東辺部には土塁が見られ、城外からの入口は南辺と北東部の 2 箇所に設置されている。また、要害の北東には下中屋敷、南西と南東には寺屋敷、南側には下中屋敷と町屋が見られ、南側を中心に城下が開けている。

III　発見された遺構と出土遺物

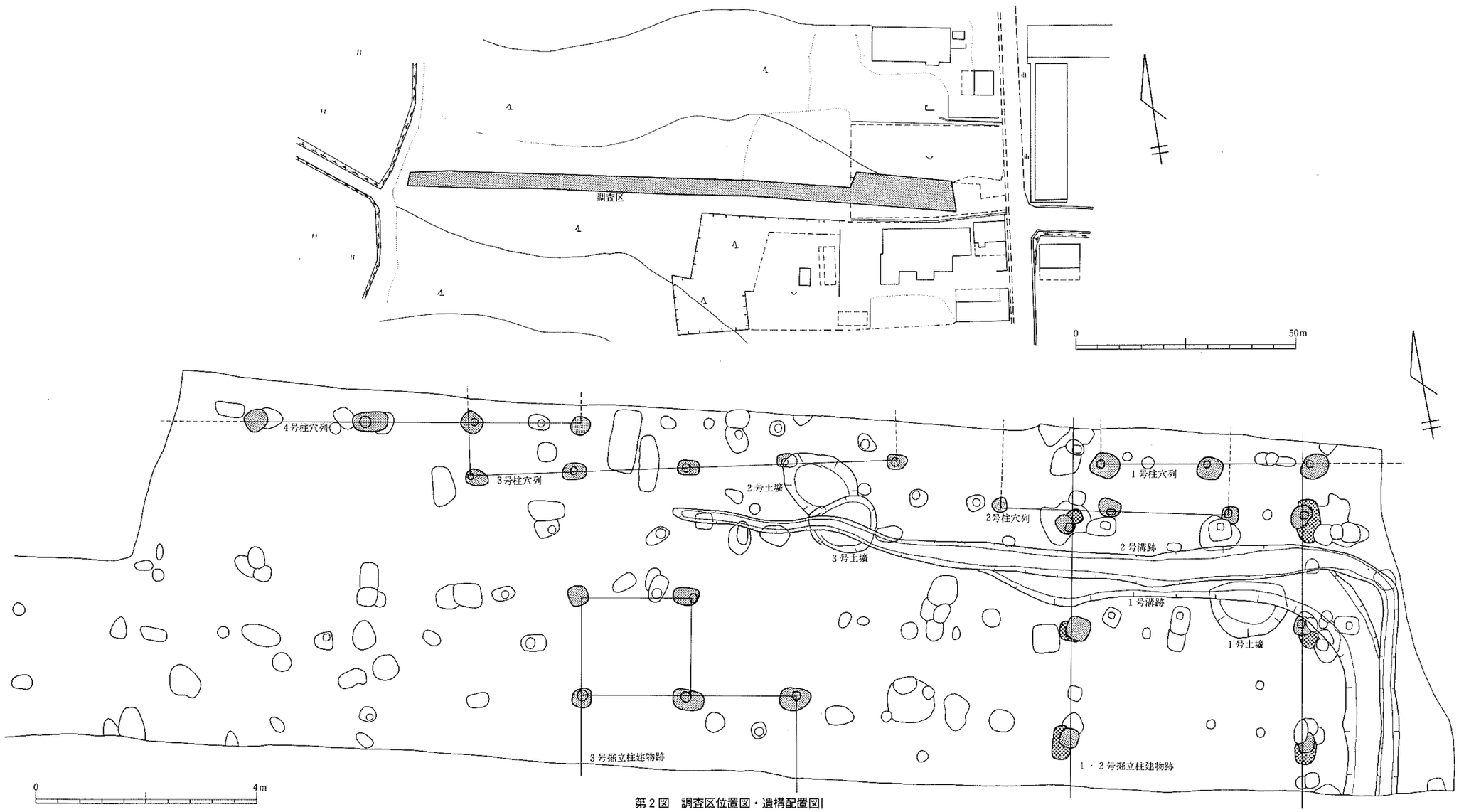
今回の調査で検出された遺構は掘立柱建物跡 3 棟、柱穴列 4 条、土壙 3 基、溝跡 2 条などであり、いずれも地山面で確認された。また、遺物は近世の陶磁器類、石製品などが出土している。

【掘立柱建物跡】（第 2 図）

調査区内では約 150 のピットが確認されており、その多くは掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。これらはいずれも地山面で確認されたが、調査面積が限られていたために、以下に述べる掘立柱建物跡は必ずしも確定したものではない。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

[1 号掘立柱建物跡]

桁行 4 間以上、梁行 2 間の南北棟と考えられる掘立柱建物跡である。建物跡が南北の調査区外に延びるため規模は不明であり、東西方向への折り返しも確認されていない。1 号溝跡、2 号建物跡と重複しており、いずれの遺構よりも古い。また、2 号建物跡とはほぼ同位置で重複しており、1 号建物跡の建て替えがこれにあたると思われる。東側柱列はほぼ北を向いており、柱間寸法は桁行が東側柱列で北から 2.1m・2.2mである。柱穴は径 40～80ｃｍで大きさと形状は一定しない。



第２図　調査区位置図・遺構配置図Ⅰ

[2 号掘立柱建物跡]

1 号建物跡とほぼ同位置で重複しており、その建て替えであると考えられる。1 号建物跡と同様に桁行 4 間以上、梁行 2 間の南北棟の建物であると考えられるが規模は不明であり、1 号溝跡よりも古い。柱間寸法は桁行が東側柱列で北から 2.0m・2.1mである。柱穴は径 30～40ｃｍの方形で、東側柱列の北から 2 個と西側柱列北端の柱穴で径約 10ｃｍ、方形の柱痕跡が確認されている。この建物跡は柱穴の状態から 1 号建物跡の柱の抜き取り穴を柱穴として利用しているものと思われる。

[3 号掘立柱建物跡]

桁行 2 間以上、梁行 2 間の南北棟と考えられる掘立柱建物跡である。建物の北側には 1 間四方の張り出し部が設けられているが、建物跡が南側の調査区外へ延びるため規模は不明である。柱間寸法は梁行が北側柱列で西から 1.9m･2.0mであり、柱穴は径 30～60ｃｍで大きさと形状は一定しない。北東隅以外の柱穴では直径約 20ｃｍ、円形の柱痕跡が確認されている。

【柱穴列】（第 2 図）

調査区内の地山面で 4 条確認されている。掘立柱建物跡の一部である可能性がある。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

[1 号柱穴列]

柱穴が東西方向に 3 個並んで検出されており、柱穴間隔は西から 2.0m･1.9mである。柱穴は径 40～50ｃｍの方形で、いずれの柱穴にも径約 10ｃｍ、方形の柱痕跡が確認されている。

[2 号柱穴列]

柱穴が東西方向に 3 個並んで検出されており、柱穴間隔は西から 2.0m･2.1mである。柱穴は径 20～30ｃｍで大きさと形状は一定せず、径約 10ｃｍ、方形の柱痕跡が東側 2 個の柱穴で確認されている。

[3 号柱穴列]

柱穴が東西方向に 5 個並んで検出されており、柱穴間隔は西から 1.9m･2.0m･1.8m･1.9mである。柱穴は径 40～50ｃｍで大きさと形状は一定しないが、いずれの柱穴にも直径約 10ｃｍ、円形の柱痕跡が確認されている。また、2 号土壙と重複しており、これよりも古い。

[4 号柱穴列]

柱穴が東西方向に 4 個並んで検出されており、柱穴間隔は西から 2.0m・2.0m・2.0mである。柱穴は径 40～60ｃｍで大きさと形状は一定せず、直径約 10ｃｍ、円形の柱痕跡が中央 2 個の柱穴で確認されている。

【土壙】（第 2 図）

調査区内の地山面で 3 基確認されている。

[1 号土壙]

長軸 1.4m、短軸 1.0m、深さ 0.2mの不整楕円形を呈する。1 号溝跡と重複しており、これよりも古い。堆積土は黄褐色のシルトで地山に近い色をしているが、地山よりも汚れており人為的に埋められたものと思われる。遺物は出土していない。

[2 号土壙]

長軸 1.4m、短軸 1.1m、深さ 0.2mの楕円形を呈する。3 号柱穴列、3 号土壙と重複しており、3 号柱穴列よりも新しく、3 号土壙よりも古い。堆積土は炭化物を含む粘土質シルトで、自然流入土である。遺物は出土していない。

[3 号土壙]

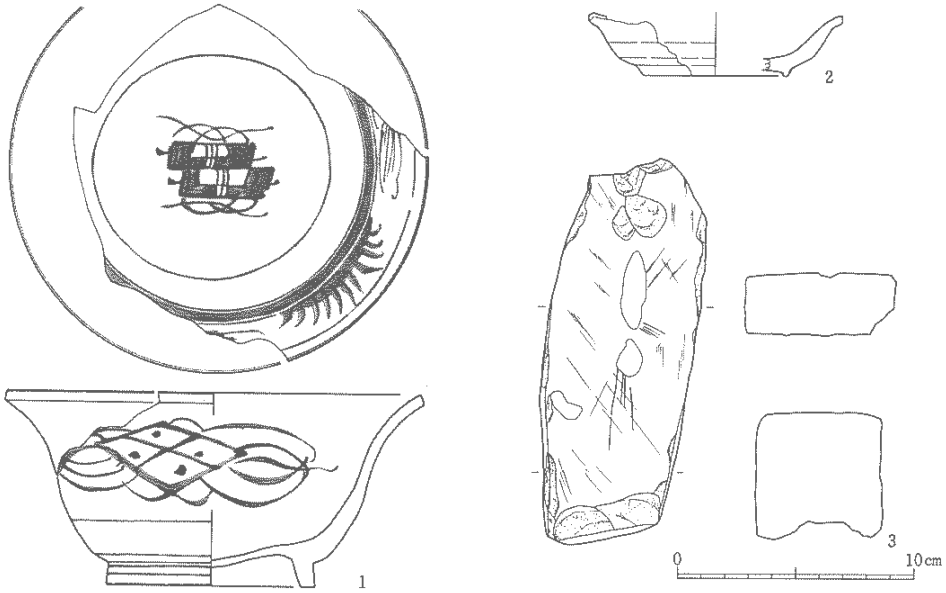
長軸 1.1m、短軸 1.0m、深さ 0.3mの不整円形を呈する。2 号溝跡、2 号土壙と重複しており、2 号土壙よりも新しく、2 号溝跡よりも古い。土壙の底面には幅 15ｃｍ、深さ 5ｃｍの溝が巡っている。堆積土は地山のブロックを多く含む粘土質シルトで、人為的に埋められたものである。また、堆積土中からは磁器の染付鉢（切込産・19 世紀代）が出土しているが、プリント柄の磁器も同堆積土中から出土しており、遺構が埋められた年代は明治時代以降と思われる。

【溝跡】（第 2 図）

調査区内の地山面で 2 条確認している。遺構に伴う遺物は出土していない。

[1 号溝跡]

調査区の南東隅から西へ「L」字状に延びる溝である。幅約 0.8～1.0m、深さはもっとも残りのよいところで約 10 ㎝である。1 号建物跡、1 号土壙、2 号溝跡と重複しており、1 号建物跡、1 号土壙よりも新しく、2 号溝跡よりも古い。堆積土は黒褐色のシルトで、自然堆積層である。



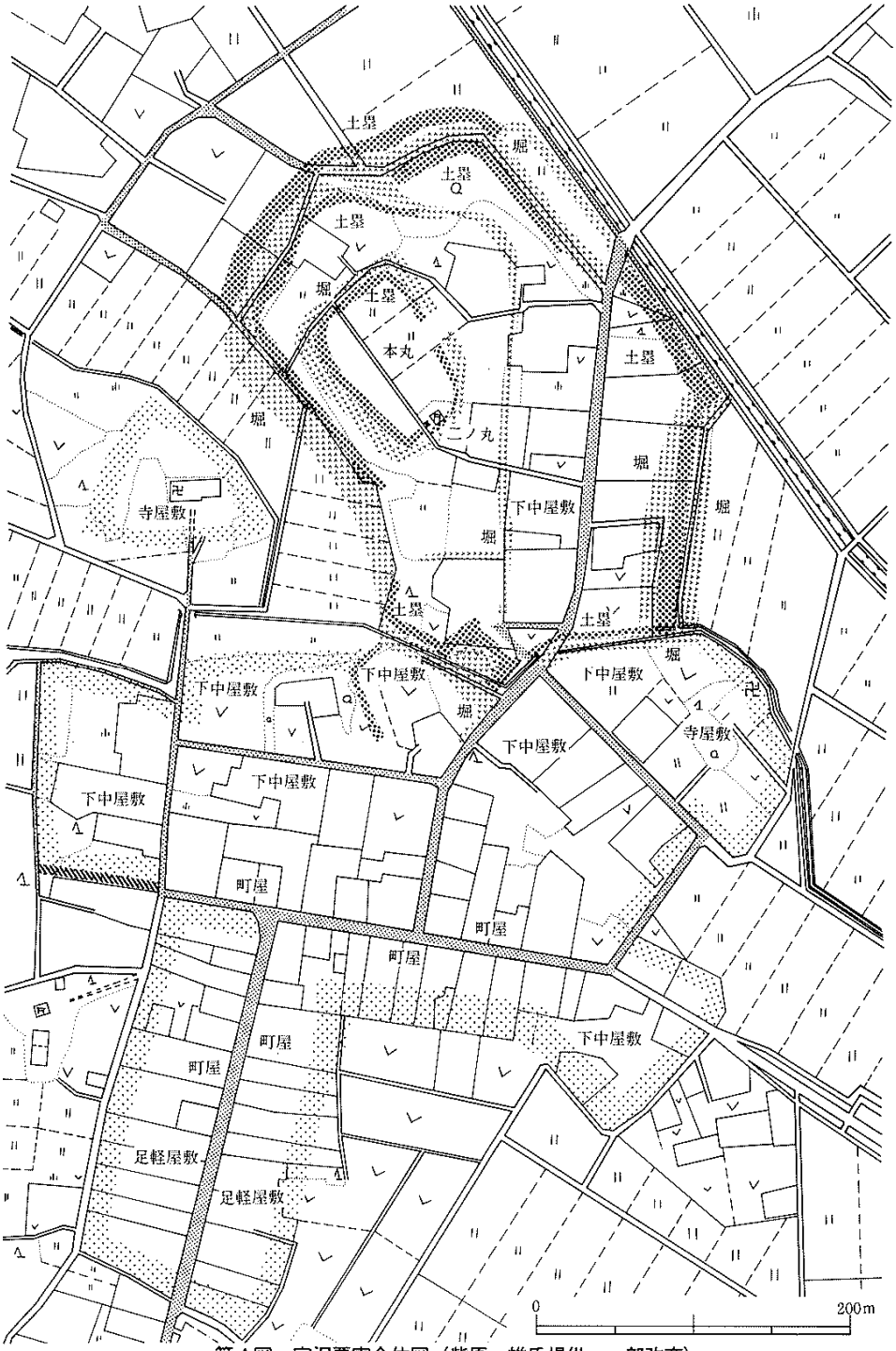
番号	種別	出土区・層	特徴	図版No.
1	磁器・鉢	確認面	染付、口縁部－鉄釉による口紅、外面－四ツ目菱、見込み－宝文、内側面－草花文、産地－切込	3－1
2	陶器・小皿	確認面	口唇部－波状に成形、全面に青緑色で透明感のある釉、全面に貫入、産地－美濃	3－2
3	砥石	確認面	石材－凝灰岩、長さ 16.4 cm、幅 6.4 cm、厚さ 5.3 cm	3－3

第3図　出土遺物

[2号溝跡]

1号溝跡と平行して調査区の南東隅から西へ「L」字状に延びる溝である。幅約0.2～0.6m、深さはもっとも残りのよいところで約25ｃｍである。3号土壙、1号溝跡と重複しており、1号溝跡よりも新しく、3号土壙よりも古い。堆積土は黒褐色のシルトで、自然堆積層である。3号土壙よりも新しいことから、その年代は明治時代以降と思われる。

これらの遺構は、3 号土壙を除き遺物を伴っていないためその具体的な年代については不明である。しかし、表土中には多数の近世の陶磁器片が含まれており、それ以前の遺物が出土していないことから、3 号土壙、1・2 号溝跡を除き近世のものと考えられる。また、3号土壙、2号溝跡は比較的新しいもので2号溝跡は明治時代以降のものと思われる。1号溝跡については2号溝跡と堆積土が非常に似ていることから同様に明治時代以降の可能性が強い。



第４図　宮沢要害全体図（紫原一雄氏提供、一部改変）

【出土遺物】（第 3 図）

調査区内からは、近世の陶磁器類、石製品が出土している。

陶磁器類のほとんどは表土中から出土した小破片で、器種・産地のわかるものは数少ない。その中で図示できたものは、3 号土壙の堆積土中から出土した磁器の染付鉢（1）と表土中から出土した陶器の小皿（2）のみである。

3 号土壙の堆積土中から出土した磁器の染付鉢は切込産で、19 世紀代のものである。口縁部は面取りされており、鉄釉による口紅が施され、外面には四ツ目菱、見込みには宝文、内側面には草花文がそれぞれ描かれている。

表土中から出土した陶器の小皿は美濃産で、16 世紀後半（大窯Ⅲ～Ⅳ期）のものと思われる。口唇部を波状に成形しており、全面に青緑色で透明感のある釉が掛かっている。また、全面に貫入がみられる。

石製品は表土中から出土した砥石（3）のみである。

Ⅳ　まとめ

1．貞享二年（1685）に作成された「粟原郡宮沢村居館之絵図」を現在の地籍図上におとした図（第 4 図）を見るとわかるように要害が機能していた当時の道路と現在の道路がほぼ同位置で対応している。このことは、当時の道路が機能し続けていることを示しており、今回の調査地点は宮沢要害の城下の東端に位置する下中屋敷にあたることがわかる。

2．検出された遺構については、遺構に伴う遺物がほとんど出土していないため年代を限定することはできない。しかし、遺物の大部分が近世の陶磁器類であり、それ以前の遺物が見られないことから、3 号土壙、1・2 号溝跡を除き大枠で近世の範疇に納まるものと思われる。

3．検出された掘立柱建物跡はすべて南北棟の建物で調査区の東側に位置する道路に面してたっており、桁行がほぼ道路に平行している。また、道路から離れるにつれて東西方向に延びる柱穴列が見られることから、道路を意識して建物をたてていることがうかがわれる。

4．第 4 図をもとにして周辺の遺跡図（第 1 図）上に、宮沢要害とその城下を含めた範囲を示しておいた。これからみると、要害の規模（本丸、二の丸の他下中屋敷を含む）は東西約 300m、南北約 350mであり、城下も含めた範囲は東西約 500m、南北約 900mである。

引用･参考文献

伊藤　隆　（1972）：「史跡・名勝」　『古川市史』下

井上喜久男（1990）：「尾張陶磁（1）－近世初期の瀬戸物生産」　愛知県陶磁資料館研究紀要9

小林・薩日内他（1982）：『仙台城と仙台領内の城・要害』　日本城郭史研究叢書2

佐藤　巧　（1979）：『近世武士住宅』

斉藤鋭雄　（1981）：「仙台藩要害預り考」　『日本城郭大系』3

斉藤・薩日内他（1983）：『宮城の研究』3

斎藤・高橋・真山（1980）：「宮沢遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」　宮城県文化財調査報告書69

柴桃正隆（1973）：『仙台領内古城・館』3

芹沢長介（1987）：『東北の近世陶磁』　東北陶磁文化館

茂庭邦元（1968）：「中世史」　『古川市史』上

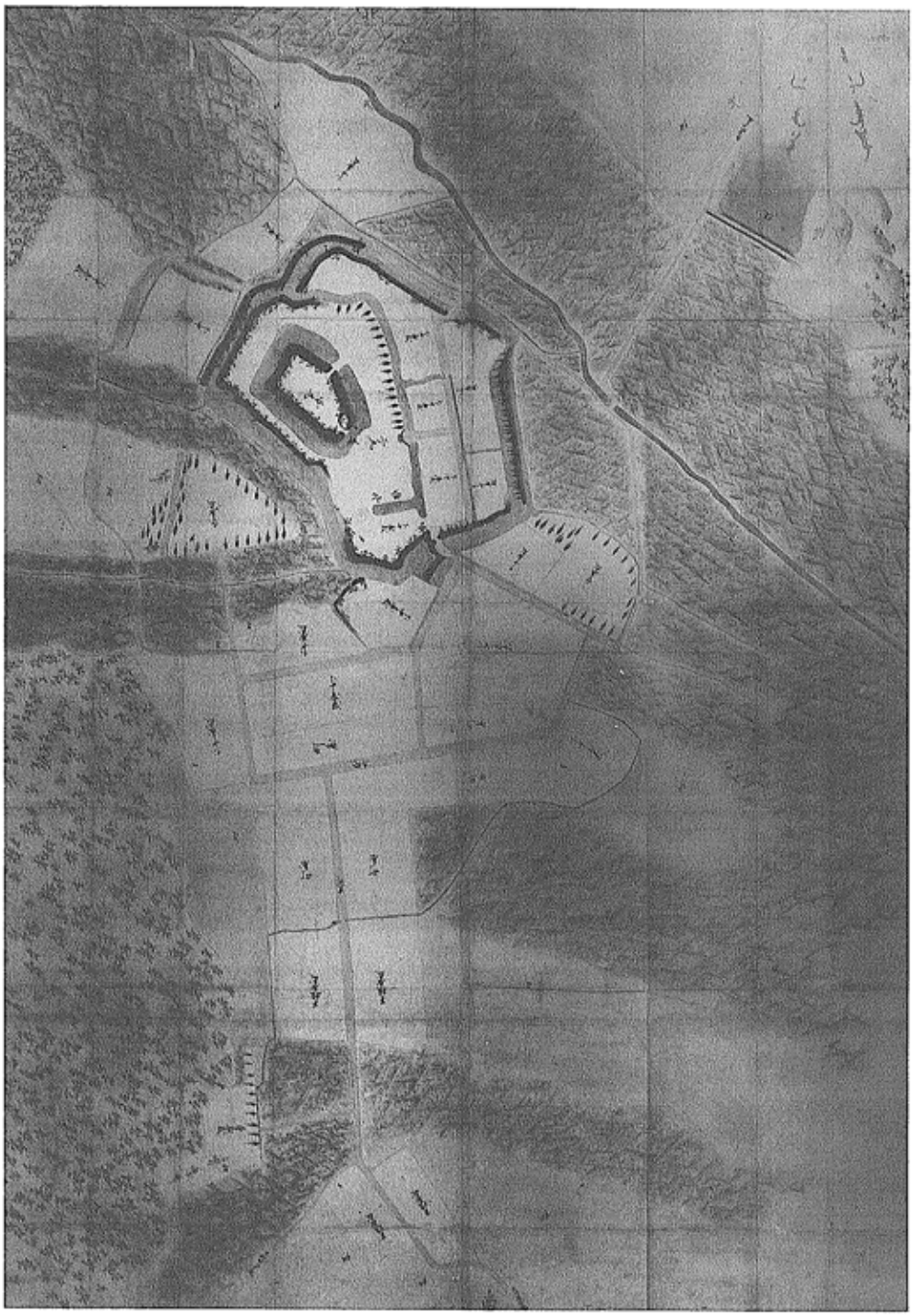
栗原郡宮沢村居館之絵図　貞享二年（1685）：宮城県立図書館所蔵　ＫＤ294－ク1

1.調査区西半
（東より）

2.遺構分布状況
（東より）

3.遺構分布状況
（西より）

図版1



図版 2　「栗原郡宮沢村居館之絵図」(宮城県立図書館所蔵KD294-71)

図版３　出土遺物

1・2　S＝1/4
3～6　S＝2/3

山の神遺跡

目　　次

Ⅰ　はじめに ……125
Ⅱ　調査の結果 ……127
Ⅲ　まとめ ……132

調 査 要 項

遺 跡 名：やまのかみいせき
遺跡記号：ＬＸ
所 在 地：宮城県名取市本郷字矢口・山の神
調査原因：県営圃場整備事業に関わる遺跡の範囲確認調査
調査期間：1992 年 4 月 15 日～4 月 17 日・同年 9 月 17 日
調査面積：約 800 ㎡
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調査第二係　係　　長　加藤　道男
技術主査　手塚　　均
〃　佐藤　則之
〃　古川　一明
技　　師　天野　順陽
佐藤　憲幸

山の神遺跡

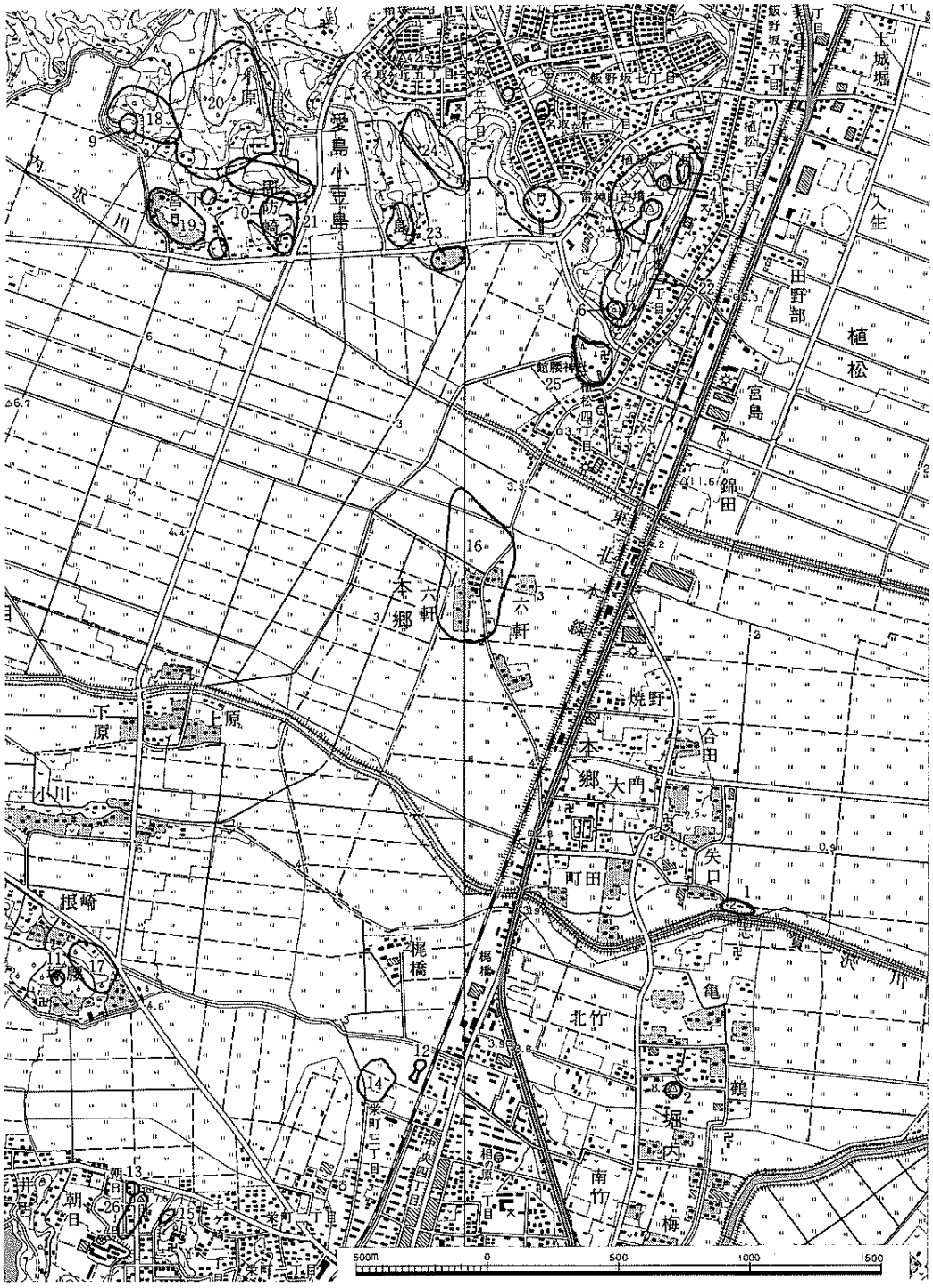
1　はじめに

山の神遺跡は、名取市本郷字矢口・山の神に所在し、東北本線館越駅の南約 2ｋｍに位置する。遺跡の所在する名取市は宮城県のほぼ中央部に位置し、北は仙台市、南は岩沼市と境を接している。市域の広がる平野部は西が奥羽山脈に連なる標高 200m前後の高館丘陵によって限られ、東は太平洋に面する単調な海岸線となっている。

平野部には海岸線に沿って数列の浜堤が南北方向に伸び、これと交差するように高館丘陵を源流とする増田川・志賀沢川などの小河川が太平洋に注いでいる。これらの浜堤や、河川流域の自然堤防上には多くの遺跡が立地しており、山の神遺跡もその中の一つである。本遺跡周辺にも様々な時代の遺跡が数多く発見されているが、とりわけ古墳時代の遺跡は多数立地し、中でも東北地方最大の前方後円墳である雷神山古墳をはじめ、有力な古墳が多数集中する箕輪・飯野坂古墳群は本遺跡の北北西約３ｋｍに位置している。

No	遺跡名	所在地	種別	出土遺物	時期	No	遺跡名	所在地	種別	出土遺物	時期
1	山の神遺跡	名取市	集落跡	土師器	古墳時代前期	14	亀塚西遺跡	岩沼市	包含地	弥生土器・土師器	弥生・古墳
2	温南山古墳	〃	前方後円墳	円筒・形象埴輪	古墳時代中期	15	朝日遺跡	〃	〃	土師器	古墳・古代
3	雷神山古墳	〃	〃	壷型埴輪・土師器	古墳時代前期	16	西六軒遺跡	〃	〃	〃	〃
4	小塚古墳	〃	円墳	壷型埴輪	〃	17	上根崎遺跡	〃	〃	〃　・縄文土器	縄文・古墳
5	北小塚古墳	〃	〃			18	北東宮下遺跡	名取市	〃	石器・土師器	縄文・古代
6	切通上古墳	〃	〃			19	宮下遺跡	〃	集落跡	土器・石器	縄文・弥生・古代
7	一本杉古墳	〃	方墳			20	五郎市遺跡	〃	古墳・集落	土師器	古墳・平安
8	天文塚古墳	〃	円墳			21	松崎遺跡	〃	集落跡	土師器	弥生・古墳・古代
9	北東宮下古墳	〃	〃			22	館越遺跡	〃	包含地	弥生土器・土師器	弥生・古墳
10	字賀崎古墳群	〃	円墳・方墳	土師器		23	小豆島横穴墓群	〃	横穴墓群	土師器・須恵器	古代
11	新明塚古墳	岩沼市	前方後円墳			24	山の前横穴墓群	〃	〃		〃
12	かめ塚古墳	〃	〃			25	館越横穴墓群	〃	〃		〃
13	朝日古墳群	〃	円墳・集落	弥生土器・石器	古墳・弥生時代	26	鷲崎横穴墓群	〃	〃		〃

周辺の遺跡の一覧表


愛島小豆島
内沢川
植松
田野部
宮島
錦田
本郷
六軒
焼野
三合田
大門
町田
失口
根崎
梶橋
北竹
亀
堀内
南竹
梅
朝日
500m
0
500
1000
1500

第１図　周辺の遺跡図

山の神遺跡は調査以前は「山の神古墳」として登録されていた。「山の神古墳」は、志賀沢川の北岸の堤防直下の水田中にある径約 5m、高さ約 2mの塚である。頂部に高さ 1m、幅 50ｃm、厚さ 10ｃmほどの板状の石で作られた山の神碑が南向きに建てられ、傍らに松の木が生えている。これを後期古墳の墳丘と認識し古墳として登録していたものである。

今回の調査は、「山の神古墳」周辺の水田が県営圃場整備事業の対象地となったため、古墳の周溝の有無の確認を目的として調査を行ったものである。調査ではまず縮尺 1/100 で「山の神古墳」の現況図を作成し、周溝の有無を確認するため墳丘を中心に「十字」に 4 本のトレンチを設定し掘り下げた。その結果周溝は確認されず、数軒の竪穴住居跡が確認されたこのため新たにトレンチを北と東に任意に設定し、遺構・遺物の分布と地形の変化を確認することにした。調査区西側については集落跡が広がるものとみられるが圃場整備の対象地外であるため調査できなかった。確認された住居跡は計 22 軒で、他に柱穴・土壙も発見されている。ただし、遺構は掘り下げていないので詳細は不明である。

従来「山の神古墳」とされてきた墳丘は、むしろ中・近世もしくはより新しい時代に構築された山の神信仰に関連する塚である可能性が強く、古墳ではないことが確認された。一方、本遺跡は、集落跡としては新発見であるため新たに「山の神遺跡」と呼称することにした。

Ⅱ　調査の結果

(1)　発見された遺構

調査区では水田耕作土直下に自然堤防を構成するとみられる黄色でしまりのある砂層があらわれ、その上面で遺構が検出された。確認された遺構は竪穴住居跡 22 軒・土壙 1 基・柱穴 2 基である。

竪穴住居跡については調査区が狭かったことから全体形を確認できたものはない。また重複しているものや、床面の一部がかろうじて残存しているものなどもあり、実数はさらに増えるものと推定される。また、土壙や柱穴は主部が削平された竪穴住居跡の下部施設である可能性が高い。これらの遺構は次項でみるように出土土器からいずれも古墳時代前期のものと考えられるが、精査を行っていないので詳細は不明である。

なお、確認された竪穴住居跡については堆積土から土器が出土したものがあったため通し番号を付けた（第 4 図）。調査結果からみて、遺跡の範囲は志賀沢川の北岸に沿って幅 20m前後で東に 150mまで延び、周囲は低湿地が広がっていることが確認された（第 4 図）。西側については圃場整備の対象地外で不明であるが、現在の集落の広がりや水田・畑の分布状況などから、遺跡の範囲は第 3 図に示したような広がりをもつものと推定された。

(2)　出土遺物

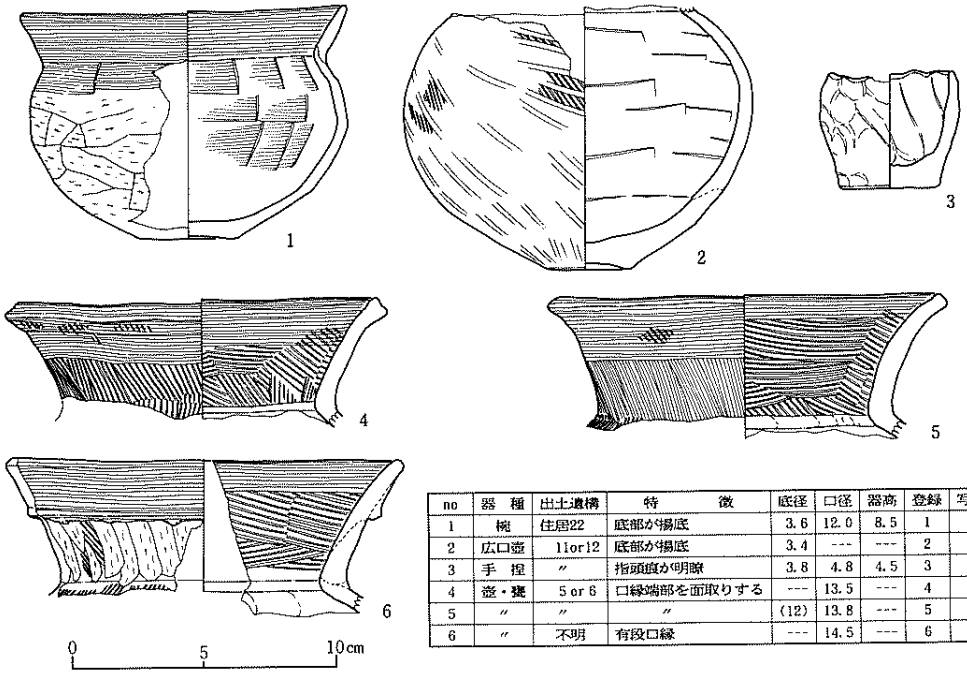
いくつかの竪穴住居跡内堆積土から古墳時代前期の土師器が整理箱で１箱分出土した確認面で採集された遺物であるため図化できた資料は少なく、遺構との帰属関係も明かでないものが多い。図示した資料は椀１点、広口壺体部１点、手捏土器１点、壺もしくは甕の口縁部３点計６点である（第２図）。

椀：（1）：深めの椀形の土器で、頚部で「く」字状に屈曲し口縁部が外傾する器形である。底部は小さく揚げ底風である。器面調整は、外面はケズリとヘラナデ、内面はヘラナデである。

広口壺：（2）：球形の体部で、底部は小さく揚げ底風である。器面調整は、外面はハケメ後ミガキ、内面はヘラナデである。口縁部は失われている。

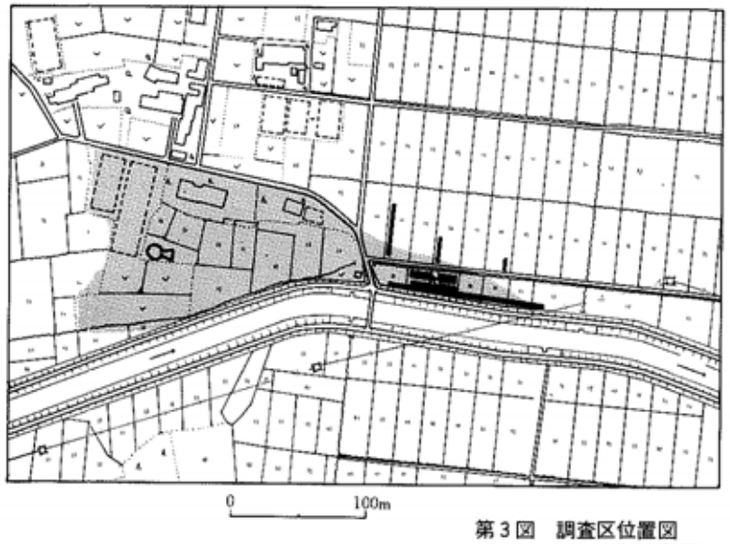
手捏土器：（3）：口縁部が小波状をなすもので、指頭痕が明瞭である。

壺・甕：（4～6）：大型の壺・甕の口縁部破片である。図示できなかった部体部破片からいずれも体部に丸みのある器形とみられる。4・5は頚部が「く」字状に屈曲し口縁端部が斜めに面取りされている。6 は有段口縁である。器面調整は、いずれも内外面とも荒いハケメの後、口縁部はヨコナデ、体部はミガキが施されている。

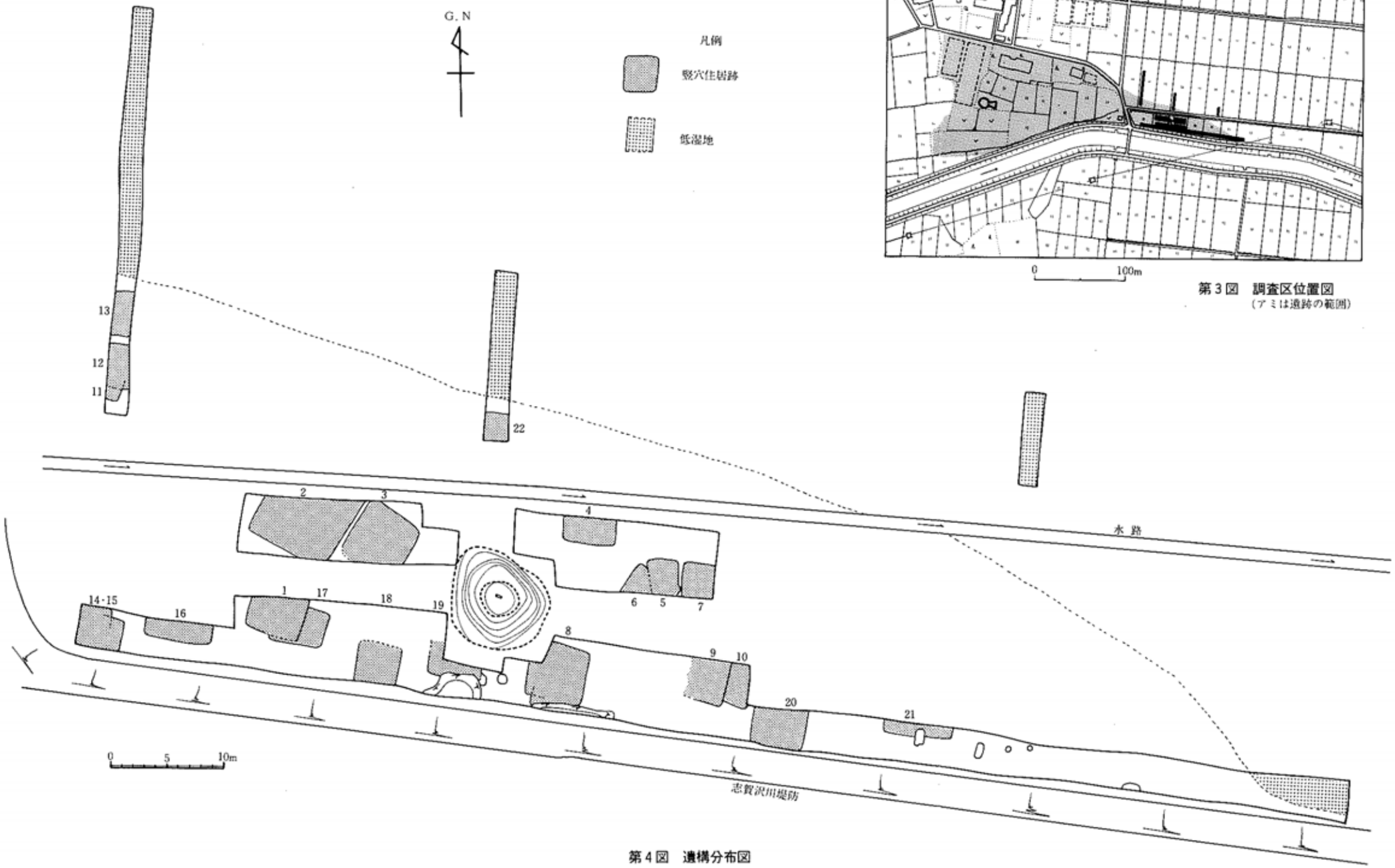


no	器　種	出土遺構	特　　徴	底径	口径	器高	登録	写真no
1	椀	住居22	底部が揚底	3.6	12.0	8.5	1	1
2	広口壺	11or12	底部が揚底	3.4	---	---	2	2
3	手　捏	〃	指頭痕が明瞭	3.8	4.8	4.5	3	5
4	壺・甕	5 or 6	口縁端部を面取りする	---	13.5	---	4	4
5	〃	〃	〃	(12)	13.8	---	5	3
6	〃	不明	有段口縁	---	14.5	---	6	

第２図　出土遺物



第３図　調査区位置図
（アミは遺跡の範囲）



第４図　遺構分布図

出土した土器は器形や器面調整の特徴からいずれも東北地方の古墳時代前期の「塩釜式」(氏家：1957)に比定される。断片的な資料であり明確な時期の比定は難しいが、さらにその中でもやや古い段階（白鳥・古川：1991）のものが主体をなしていると考えられる。

以上の他にも図示できなかった土器の細片があるが、図示した資料と大きく異なる時期に属するとみられる土器はない。

なお、調査期間中、地元の人から、かつて調査対象地の西側に古墳が存在したとの情報を得た。現在、墳丘は削平され地表からこれを確認することはできないが明治時代の地籍図によって検討したところ該当する地点に鍵形の土地が確認された(第５図)。したがってここに前方後円墳が存在したものとみられる。この古墳跡については「弁財天古墳跡」と呼称することにした。

第５図　古墳跡周辺の地籍図

III　まとめ

①「山の神古墳」と呼称されていた墳丘はより新しい時代の塚であり、古墳ではない。

②調査対象地は古墳時代前期の集落跡である。

③西側の隣接地に大規模な前方後円墳が存在したことが確認された。

④本遺跡は集落跡としては新発見であるため「山の神遺跡」と呼称することにする。

⑤西側の古墳跡については「弁財天古墳跡」と呼称することにする。

引用文献

氏家和典：1957：「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」第14　東北史学会

白鳥・古川：1991：「土師器の編年・東北」「古墳時代の研究6」　雄山閣

山の神碑と塚状遺構

竪穴住居跡検出状況
（東より）

竪穴住居跡検出状況
（東より）

1　第2図：1
2　第2図：2
3　第2図：5
4　第2図：4
5　第2図：3

出土土器

尾 田 峰 貝 塚

調 査 要 項

遺 跡 名：尾田峰貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 73001）
遺跡記号：ＵＲ
所 在 地：宮城県牡鹿郡女川町浦宿字尾田峰
調査面積：約 270 ㎡
調査期間：平成 4 年 7 月 27 日～8 月 7 日
調査担当：宮城県教育委員会文化財保護課・女川町教育委員会
調 査 員：平塚英一（女川町教育委員会）・茂木好光（石巻西高校）
加藤道男・阿部恵（文化財保護課）
調査協力：勝又孝夫（土地所有者）

尾 田 峰 貝 塚

調査の概要

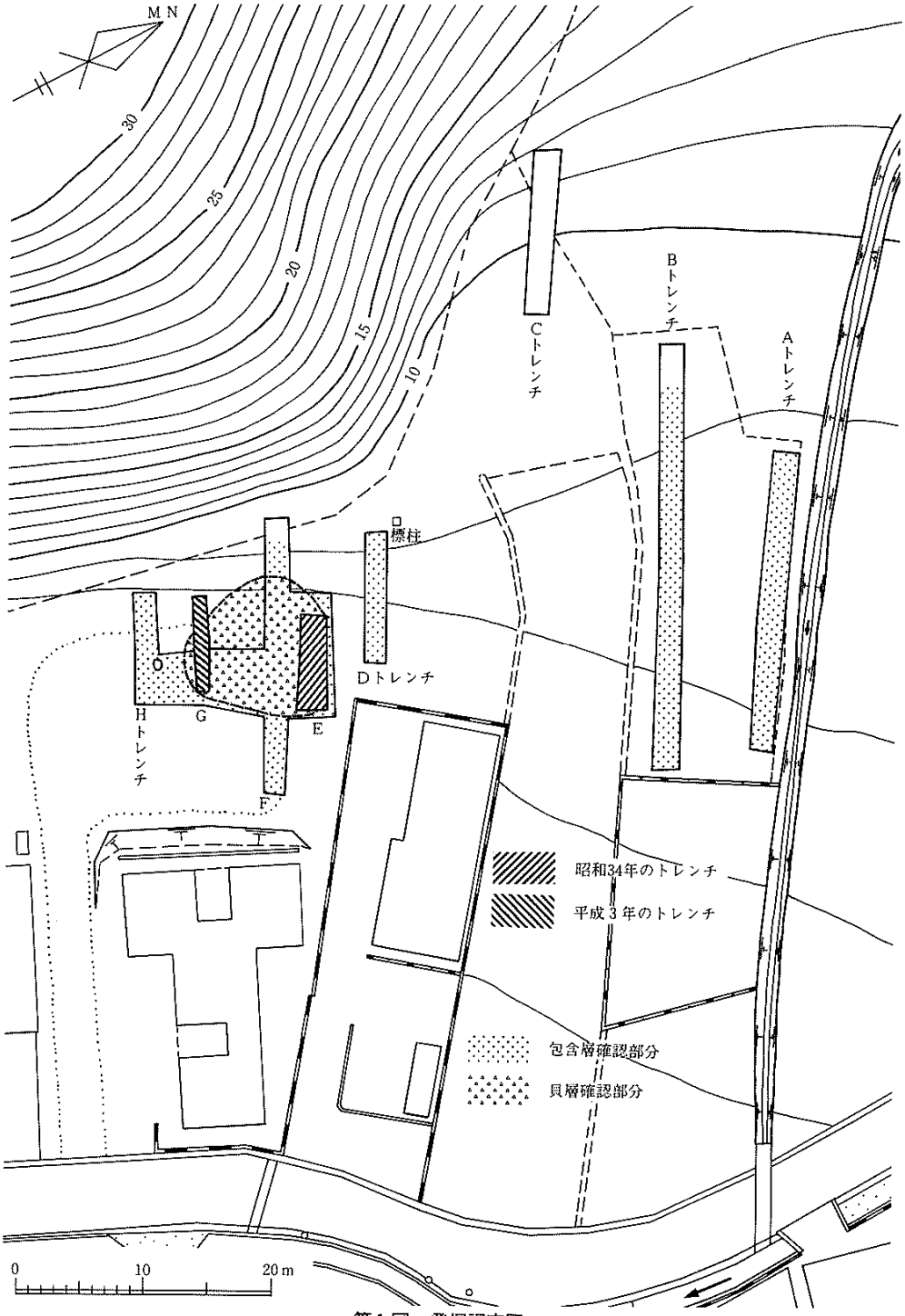
女川町内に立地する尾田峰貝塚は、浦宿貝塚として古くから知られ、また、度々調査が行われて、後・晩期の豊富な出土遺物等から石巻市沼津貝塚と共に著名な貝塚である。しかし、正式な報告がないこともあり、その内容や詳細については不明な点が多く、その所在地も明確では無いような現状にあった。この尾田峰貝塚周辺にも、近年宅地化の波が及ぶようになり、平成3年度にも宅地造成に伴って調査が実施された事からも、尾田峰貝塚の実態を早期に把握する必要が高くなって来た。このため貝塚の位置・範囲等を知るための確認調査を国庫補助事業として実施した。

確認調査は遺跡の範囲と考えられる畑・荒れ地・駐車場等を対象に、雑木・下草を除去すると共に、遺跡に厚く廃棄された建築廃材などのゴミも搬出した。その上で、幅 2mの傾斜に沿った東西方向のトレンチを設定し、重機によって表土を除去し、貝層・包含層の検出と範囲の把握を図った。特に貝層部分はほぼ全体の表土を剥離した（第1図）。

確認調査の結果、包含層は標高の高い斜面には分布しないものの、東西 30m、南北 60m以上の広い範囲の緩斜面に認められること、貝層は平成3年度の確認調査トレンチをほぼ南限に直径10m以上の範囲に分布することがなどが知られた。包含層については確認に止め、確認面より掘り下げることはしなかったが、貝層部分については昭和34年に実施された東北大学教育学部の発掘トレンチを発見するように務め、このトレンチと平成3年のトレンチとを掘り下げて、その断面で貝層・包含層などの状況を把握した。

今回の調査によって出土した遺物には、主として東北大学トレンチの埋土から出土した多くの縄文土器・土製品・石器・石製品・骨角器・貝製品・自然遺物などがある。

土器には深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器・皿などの器形があり、これらは文様等の特徴などから縄文時代後期の宝ケ峯式・金剛寺式、晩期の大洞Ｂ式～C_2式に位置付けられる。また、少量ではあるが前期の繊維土器もある。土製品には土偶・土錘・滑車状耳飾りなどがある。石器には石鏃・尖頭器・石匙・石錐などの剥片石器や石斧・石捧・石剣の磨製石器、磨石・凹召・石皿などがある。石製品には小礫に顔を彫刻した特殊なものがある。骨角器には釣針・燕尾形離頭銛頭・ヤス状刺突具・根挟み・骨鏃・骨針・骨箆・棒状角器や鳥の大腿骨に穿孔した装身具などがある。貝製品には貝輪がある。自然遺物には貝類・棘皮動物・魚類・爬虫類・両生類・鳥類・哺乳類などがあり、その種類・数量はいずれも多いが、特に魚類が多い。自然遺物ではカマイルカの頭部が2頭分、埋設された状態で出土しているのが特筆される。


M N
30
25
20
15
10
Cトレンチ
Bトレンチ
Aトレンチ
標柱
Dトレンチ
Hトレンチ
O
G
E
F
昭和34年のトレンチ
平成３年のトレンチ
包含層確認部分
貝層確認部分
0
10
20 m

第１図　発掘調査区